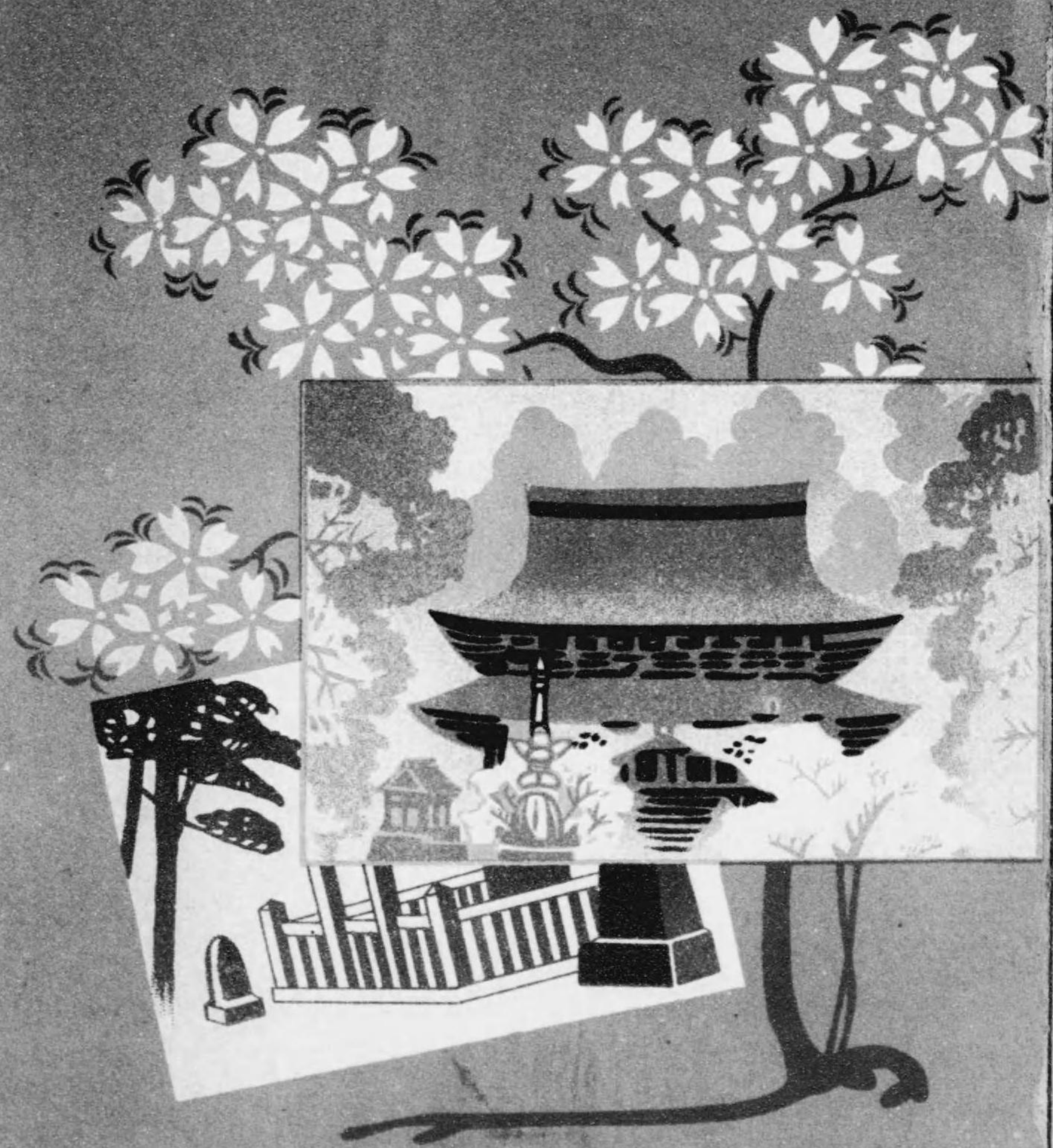




始

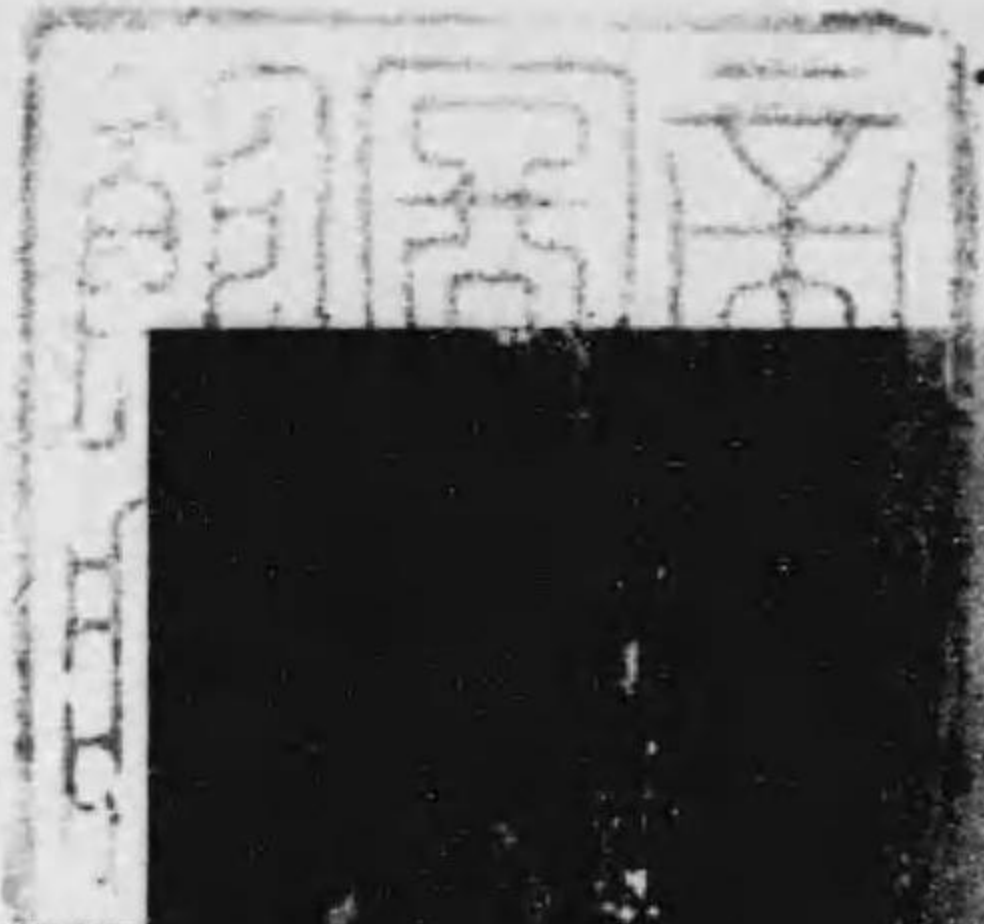


吉野名所誌

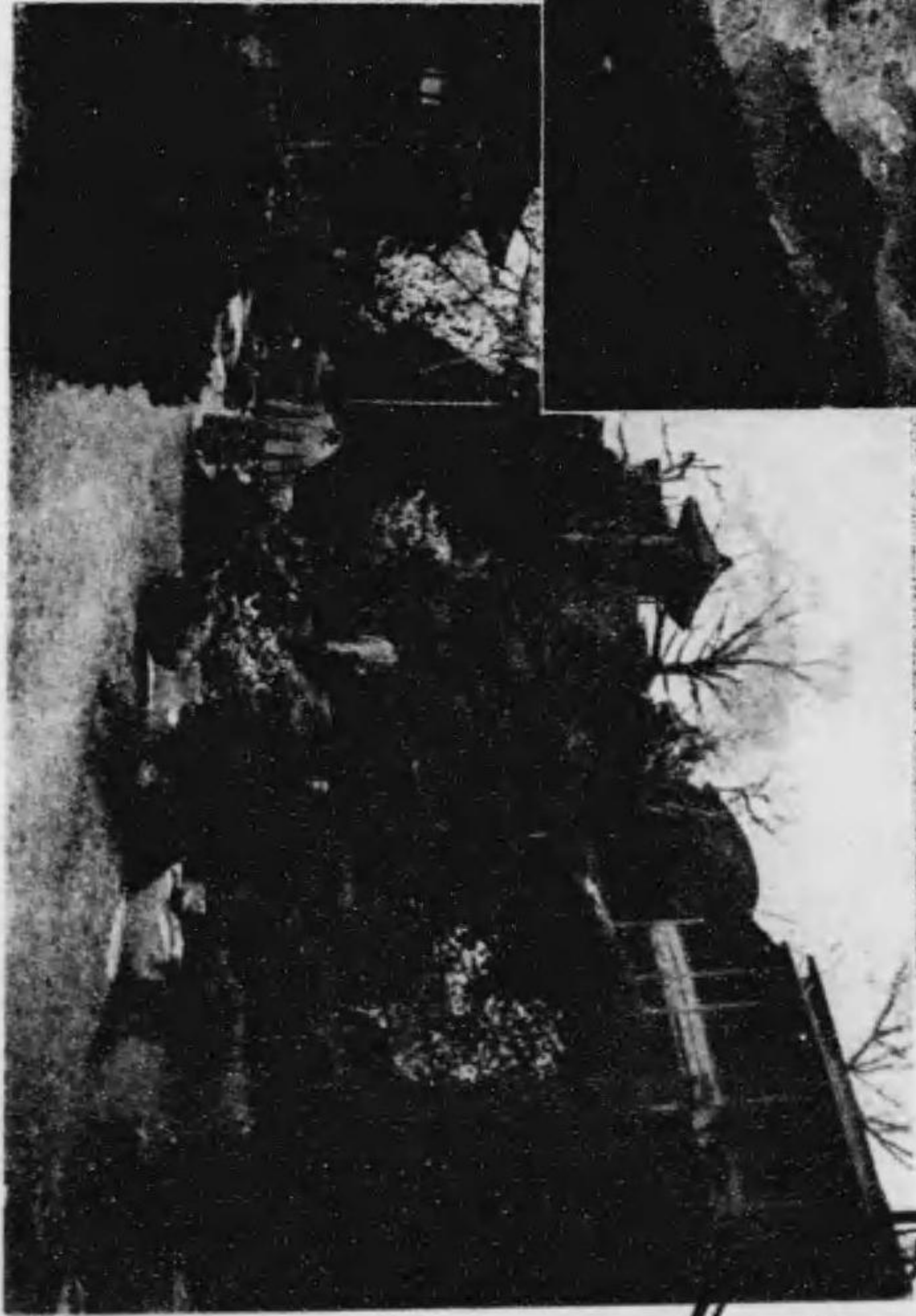


吉野山小學同窓會

339-480

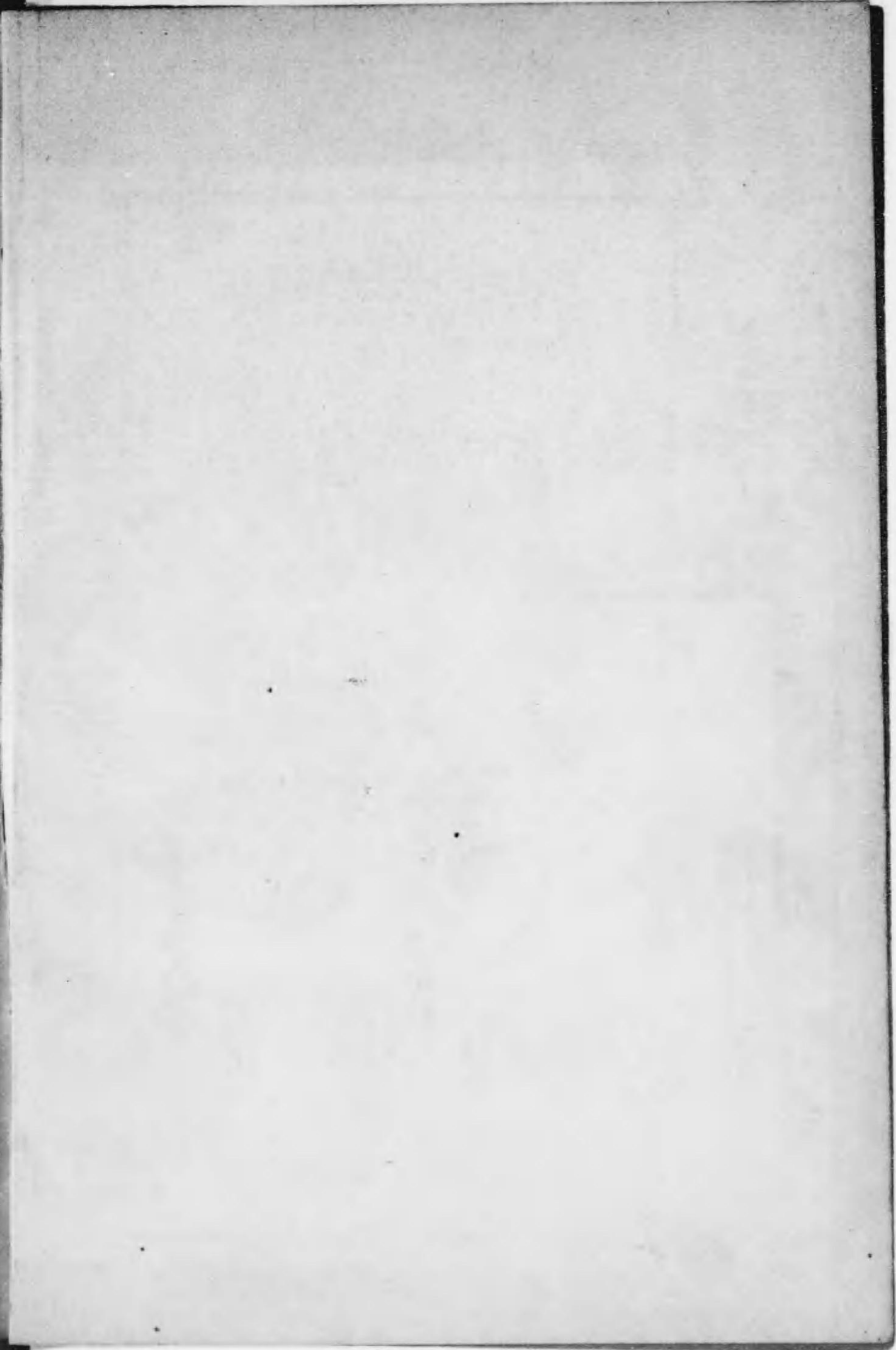


全 景 山 野 景

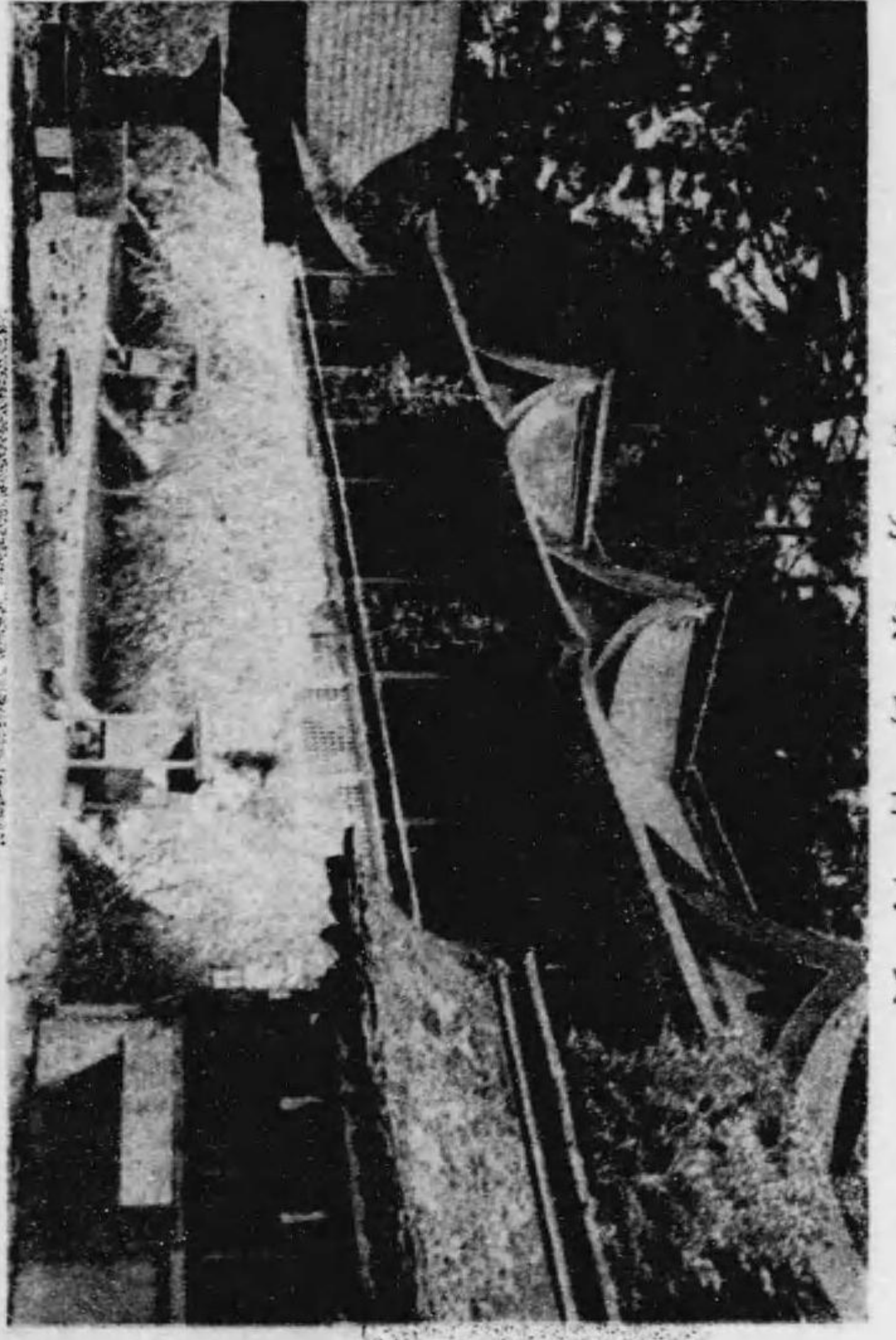
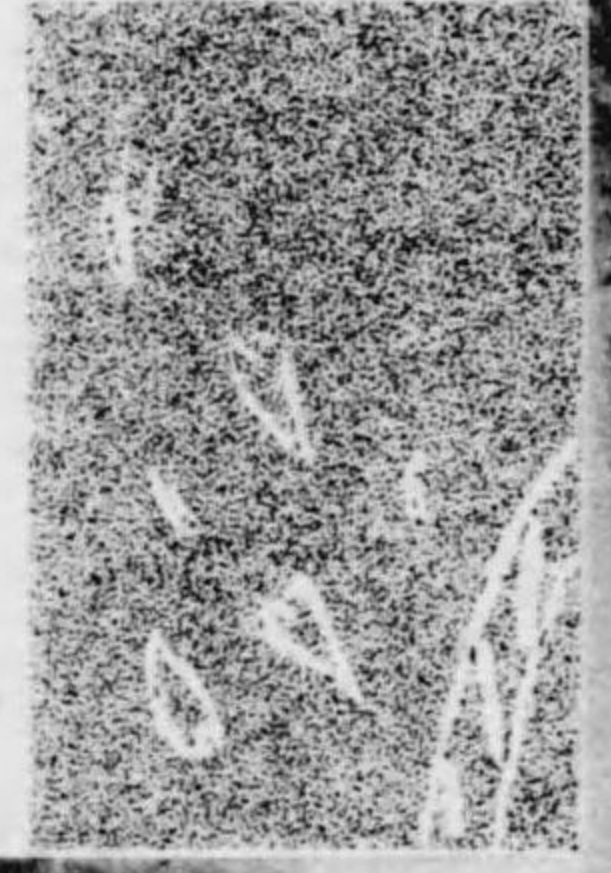
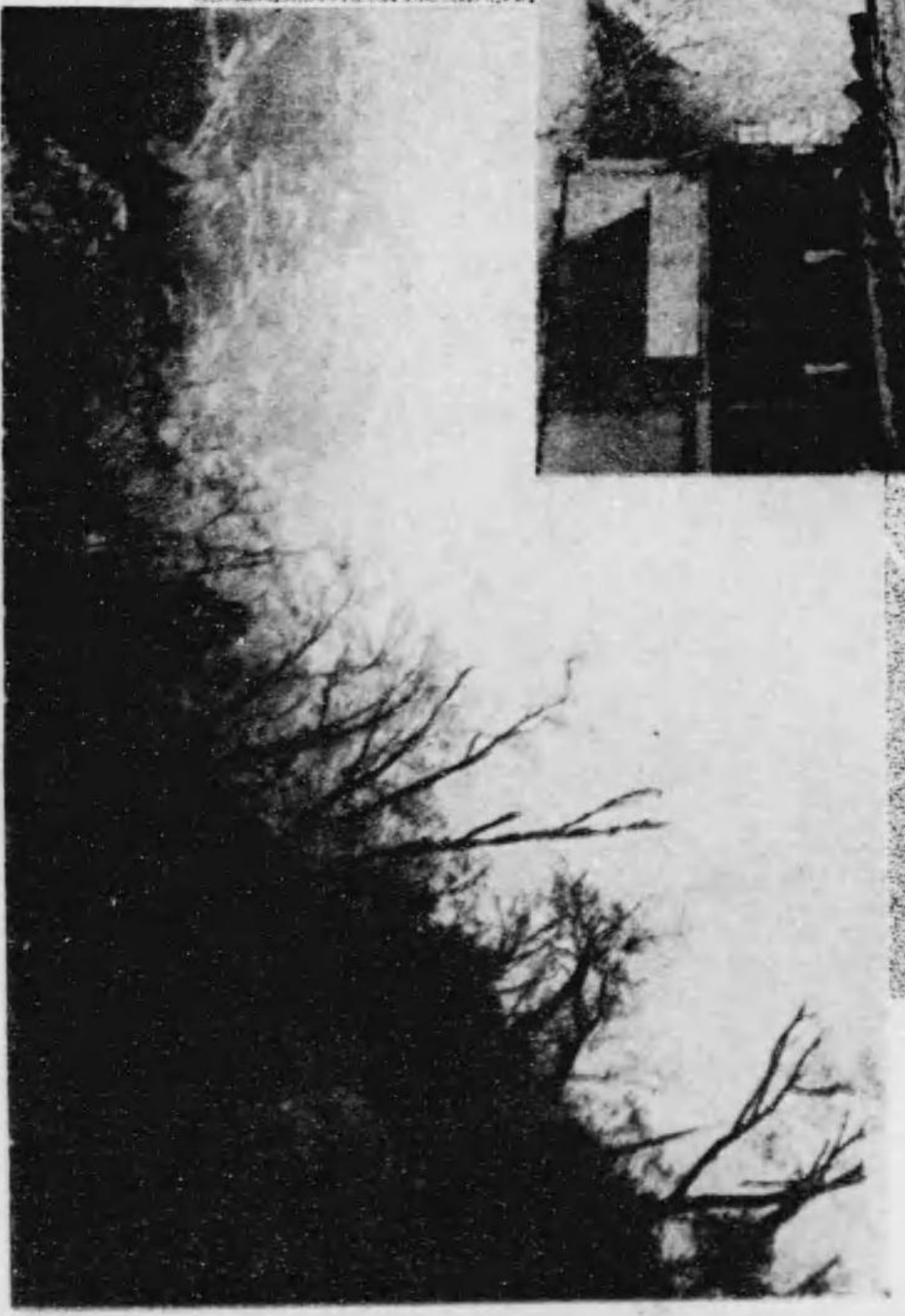


園 芳 群 之 院 林 竹

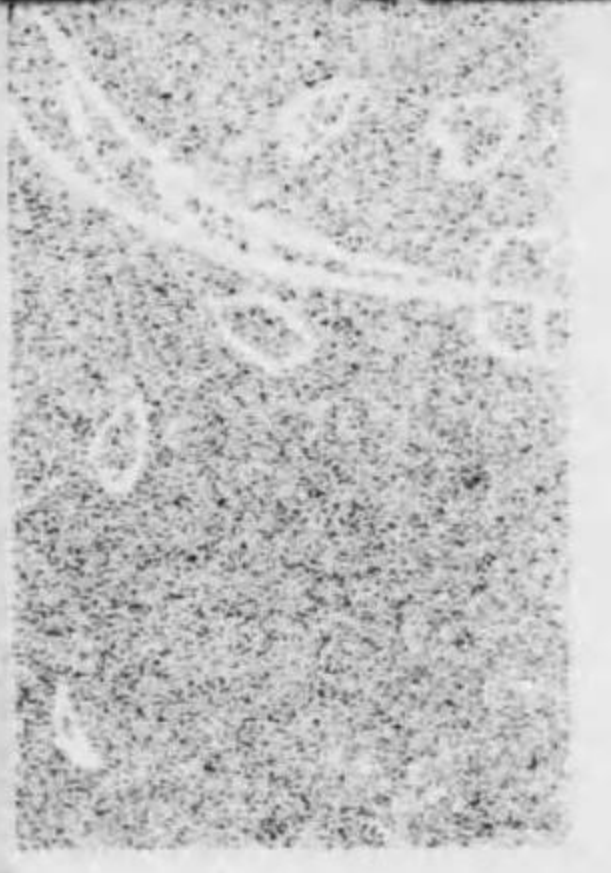
大正
9. 4. 2
内交



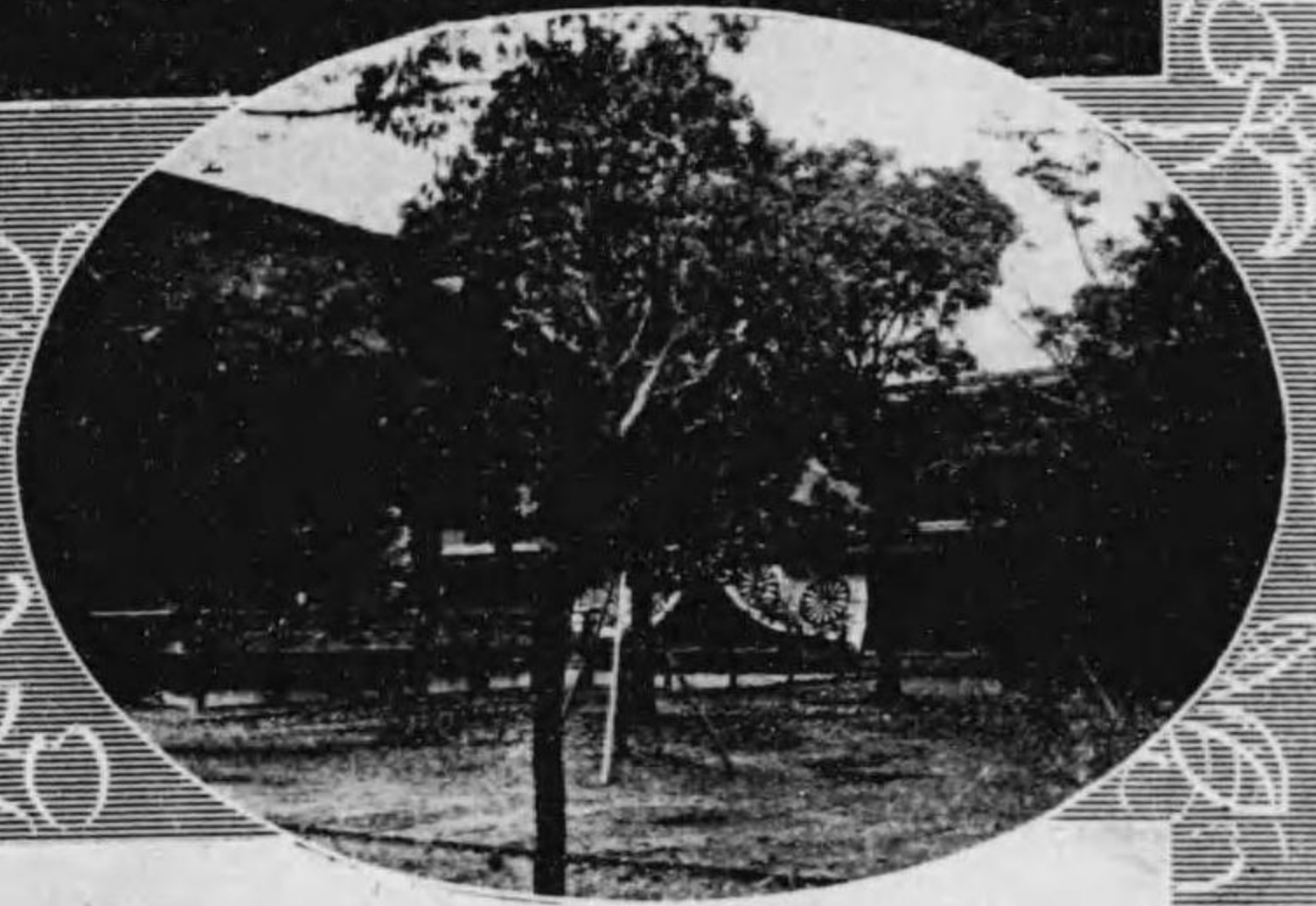
木
干
上



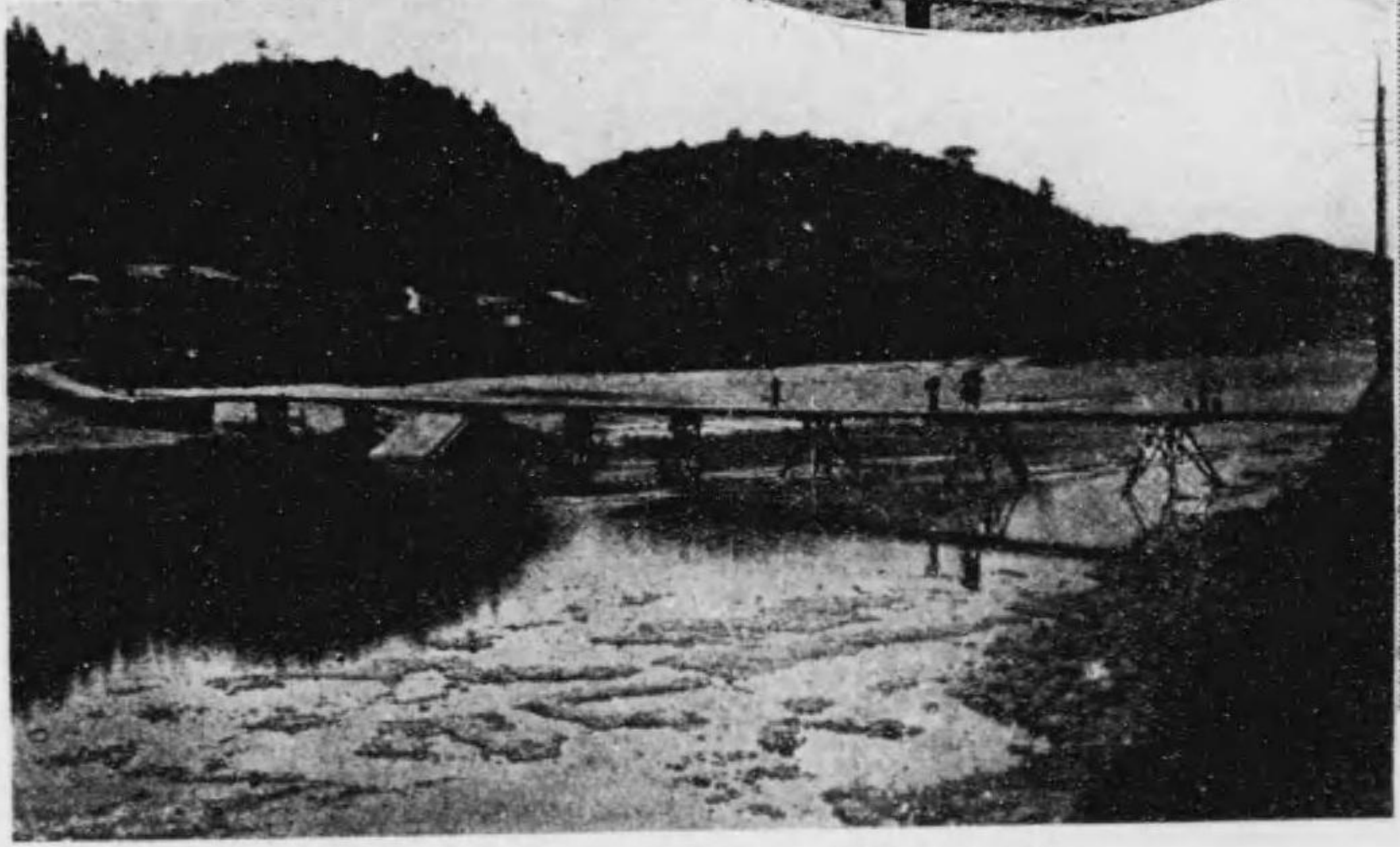
社
神
分
水
野
吉
内
式



宮
野
吉
社
大
幣
官

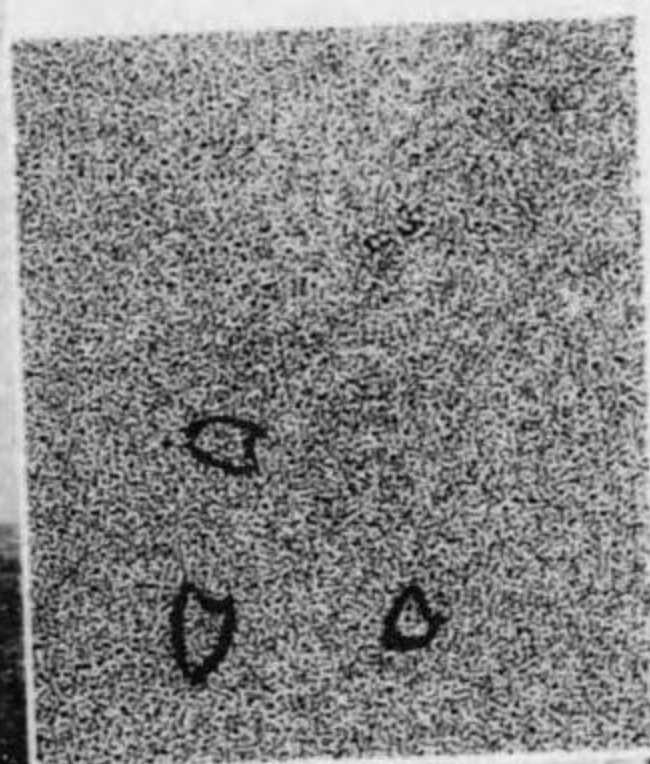
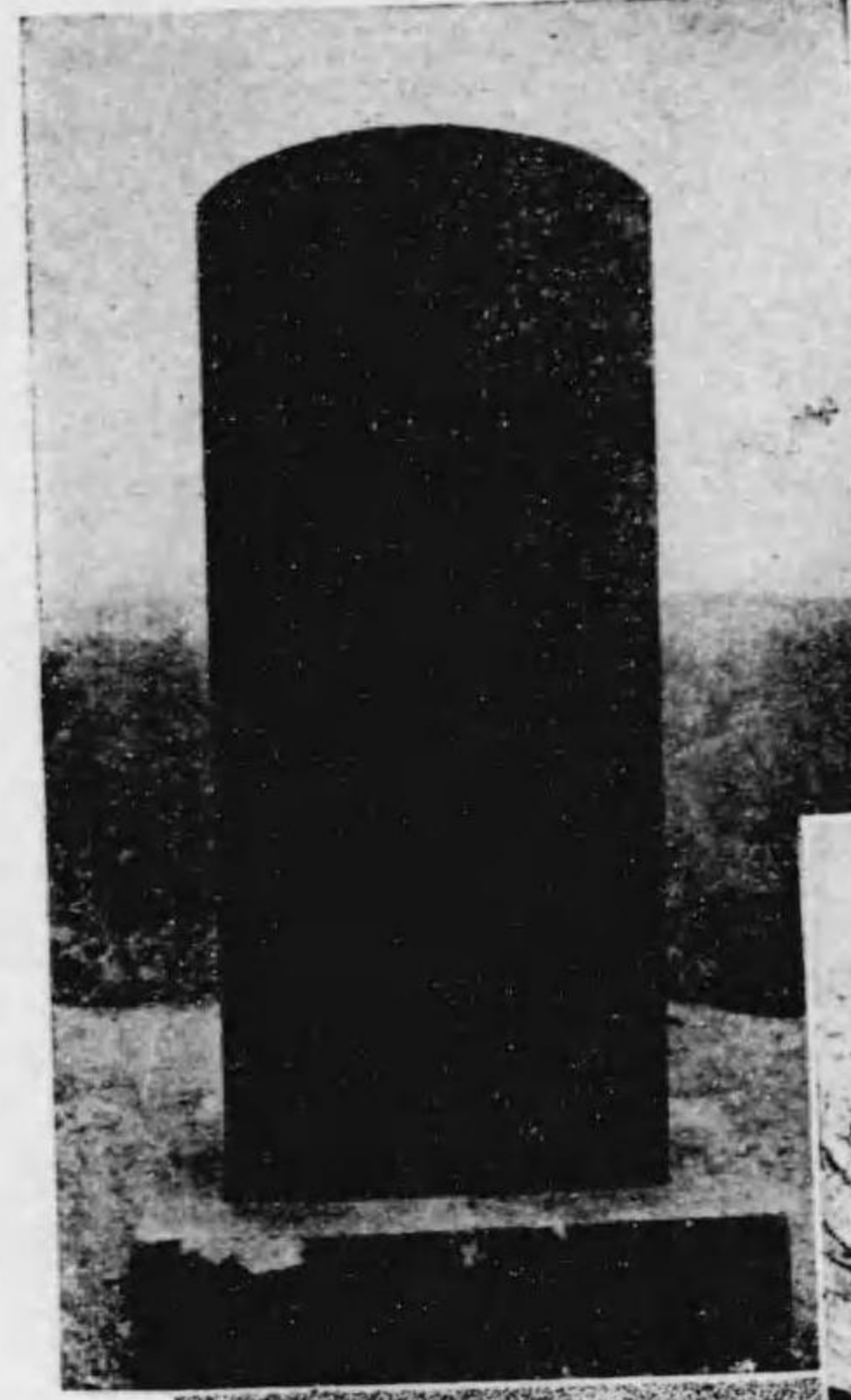


同
上

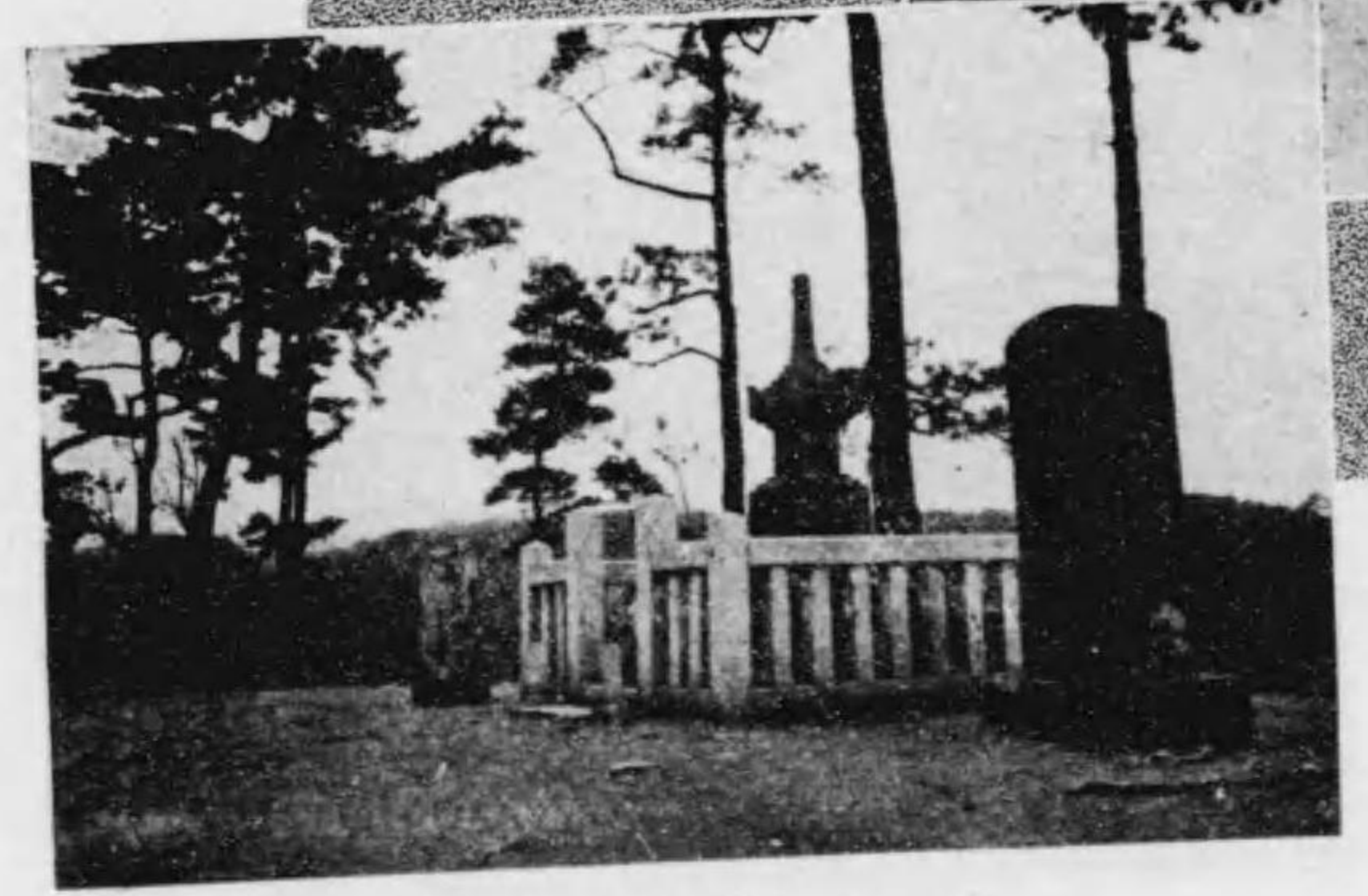


渡
之
田
六

村上義光墓碑



長峰の櫻

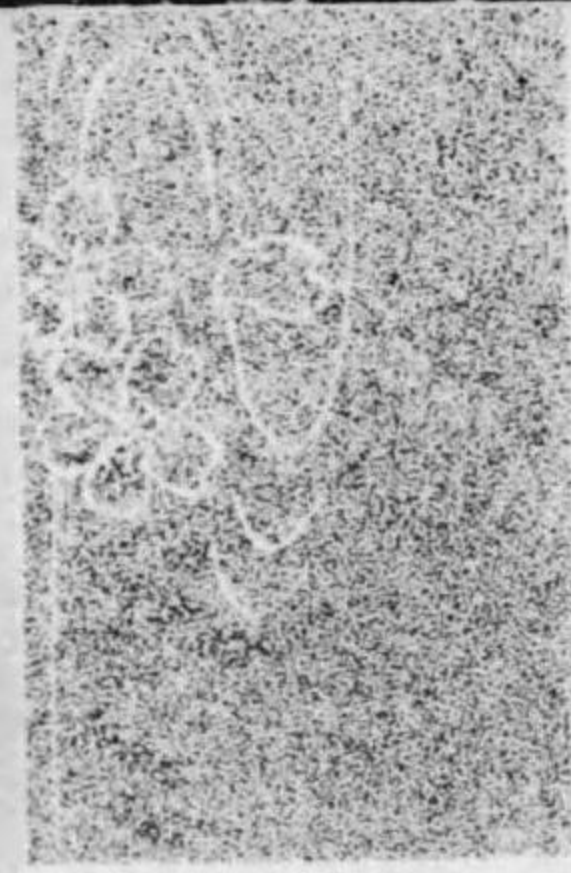


村上義光之墓

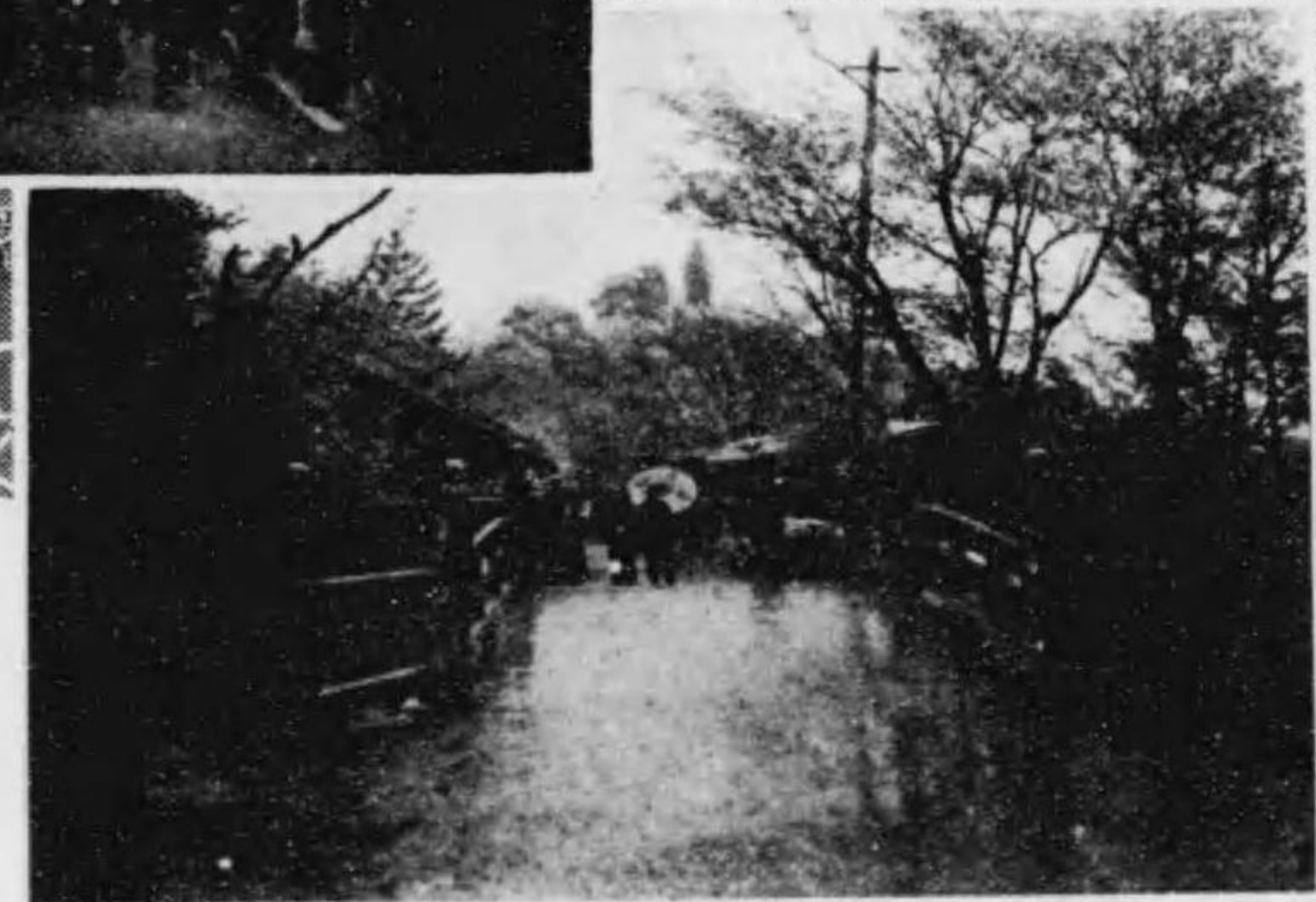
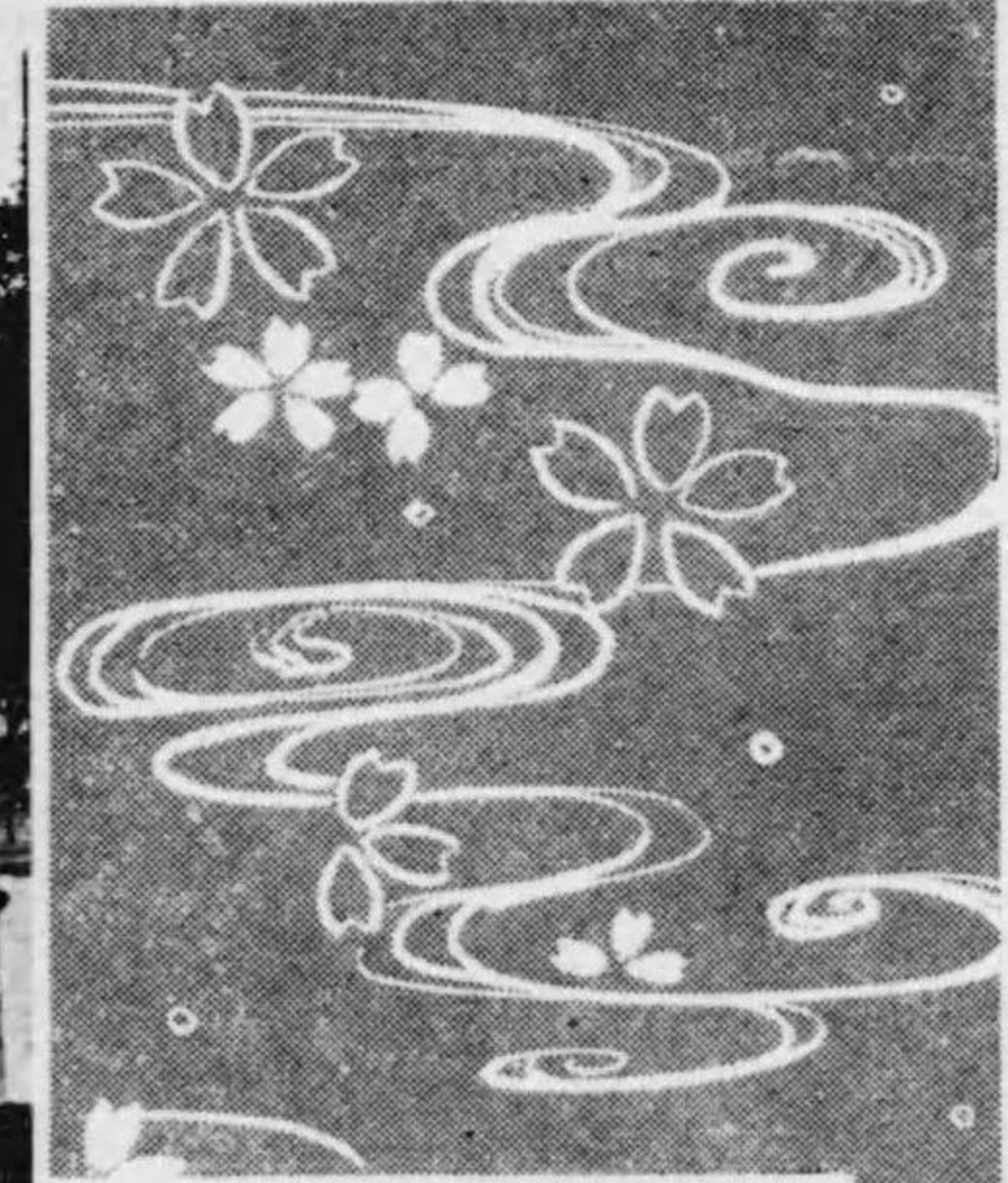
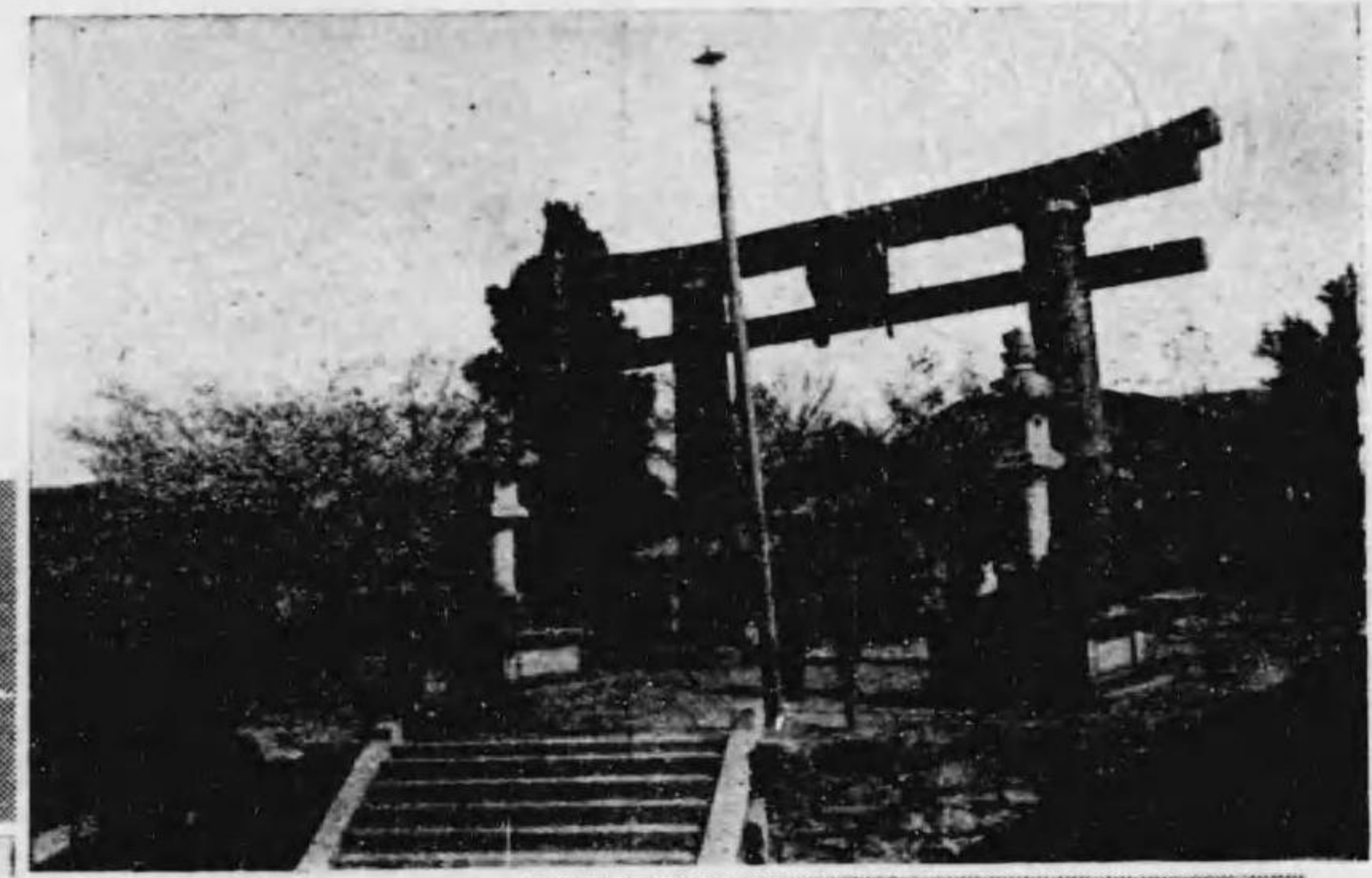
下千本井(一)



下千本井(二)



銅の鳥居

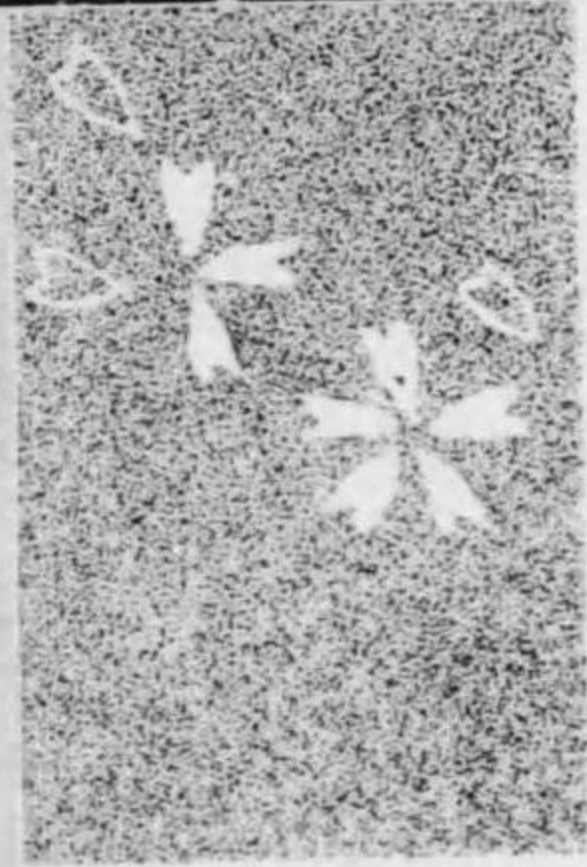
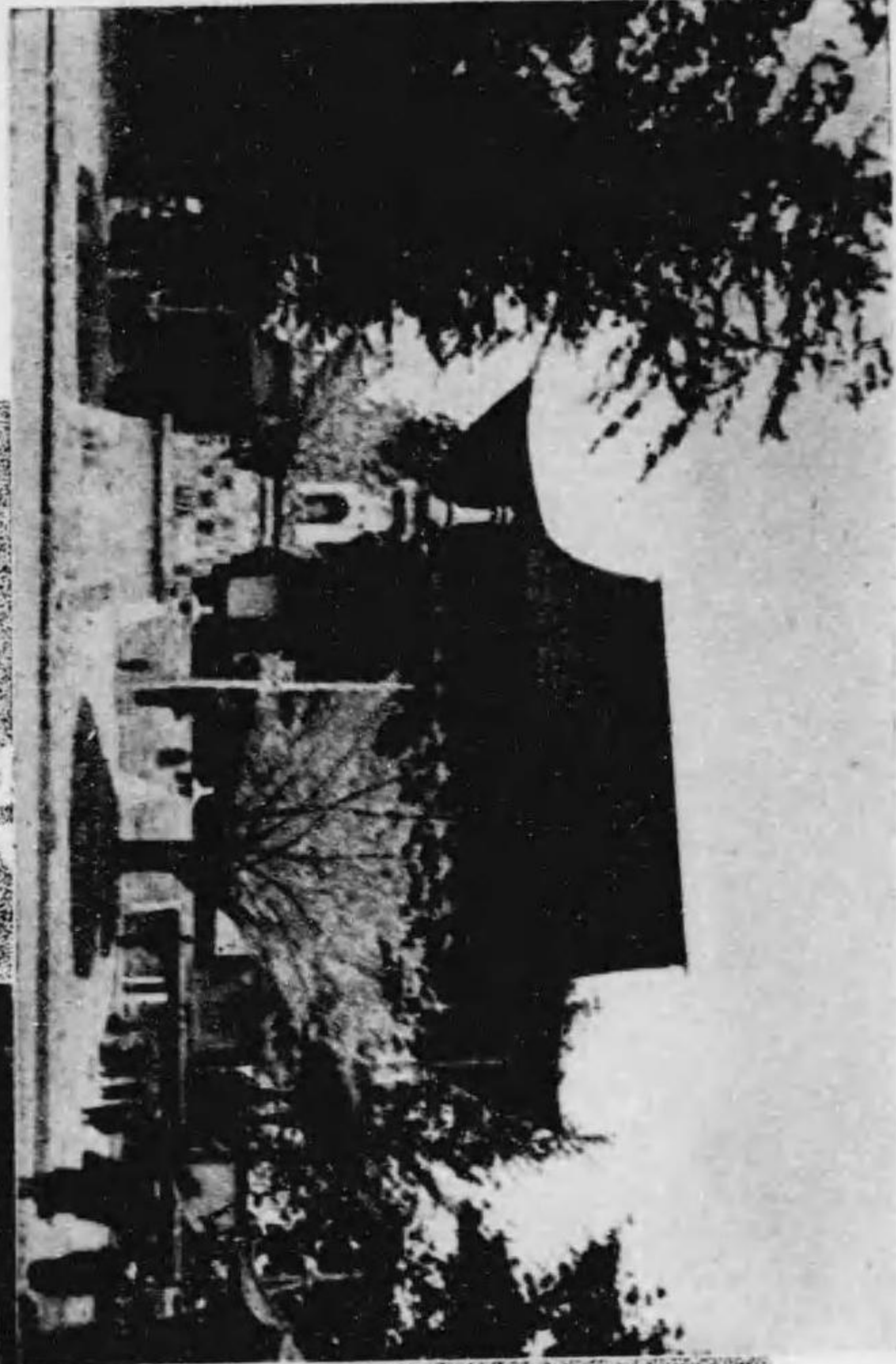


金峰山寺仁王門



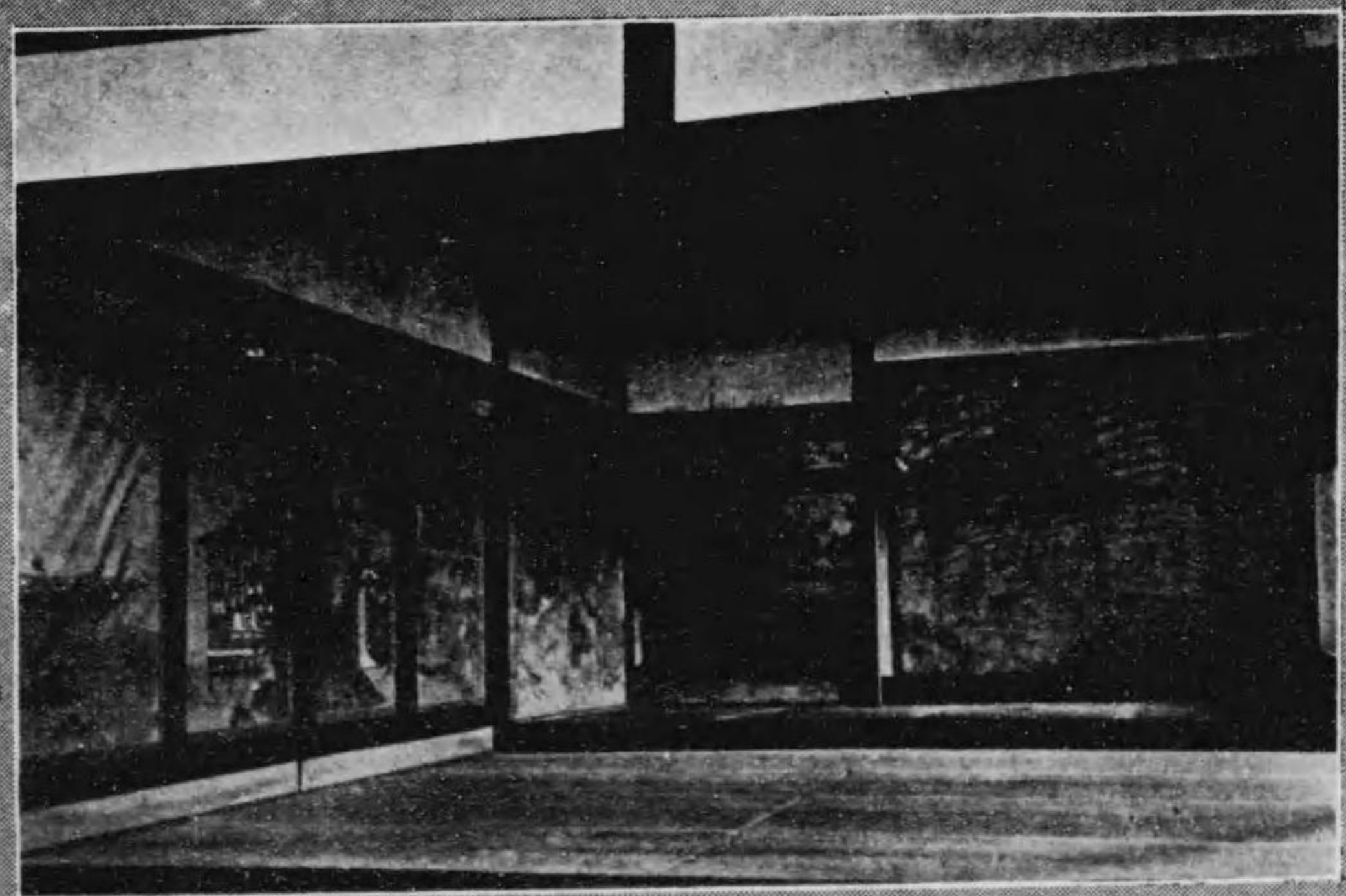
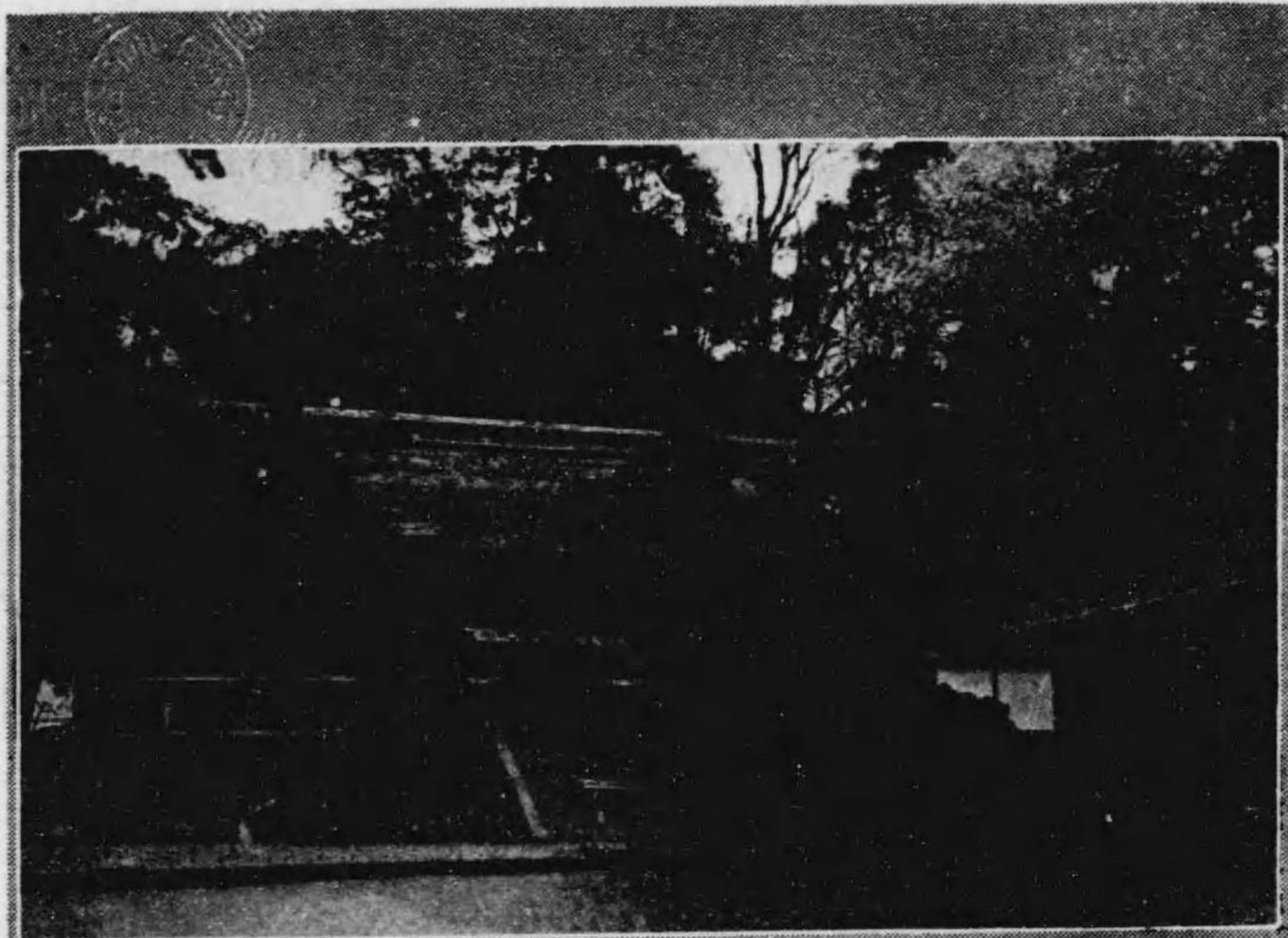
大橋(山花)

金峰山寺藏王堂



中千木

社神口山野吉内式



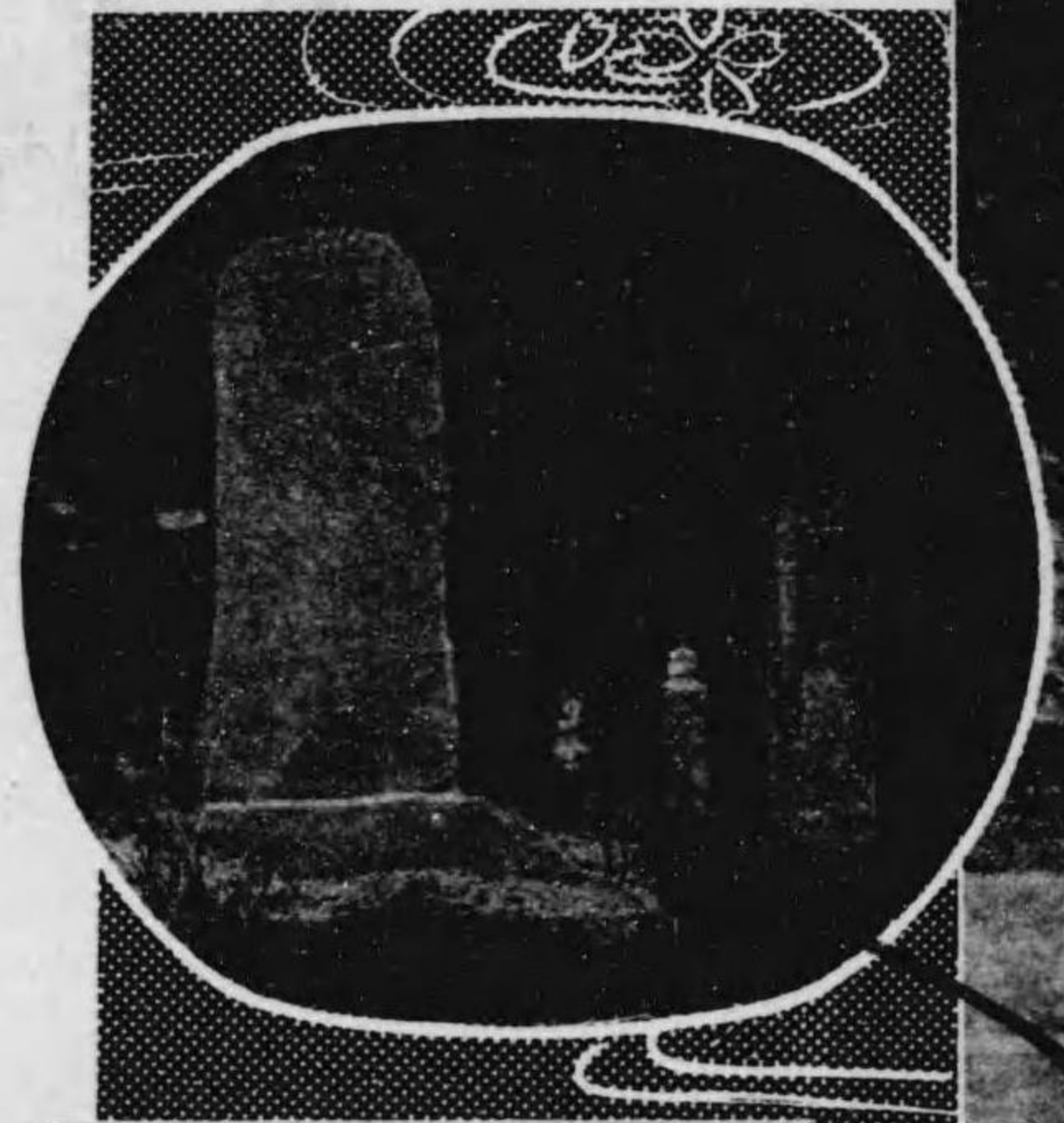
院書坊本櫻元

社神水吉居皇野吉

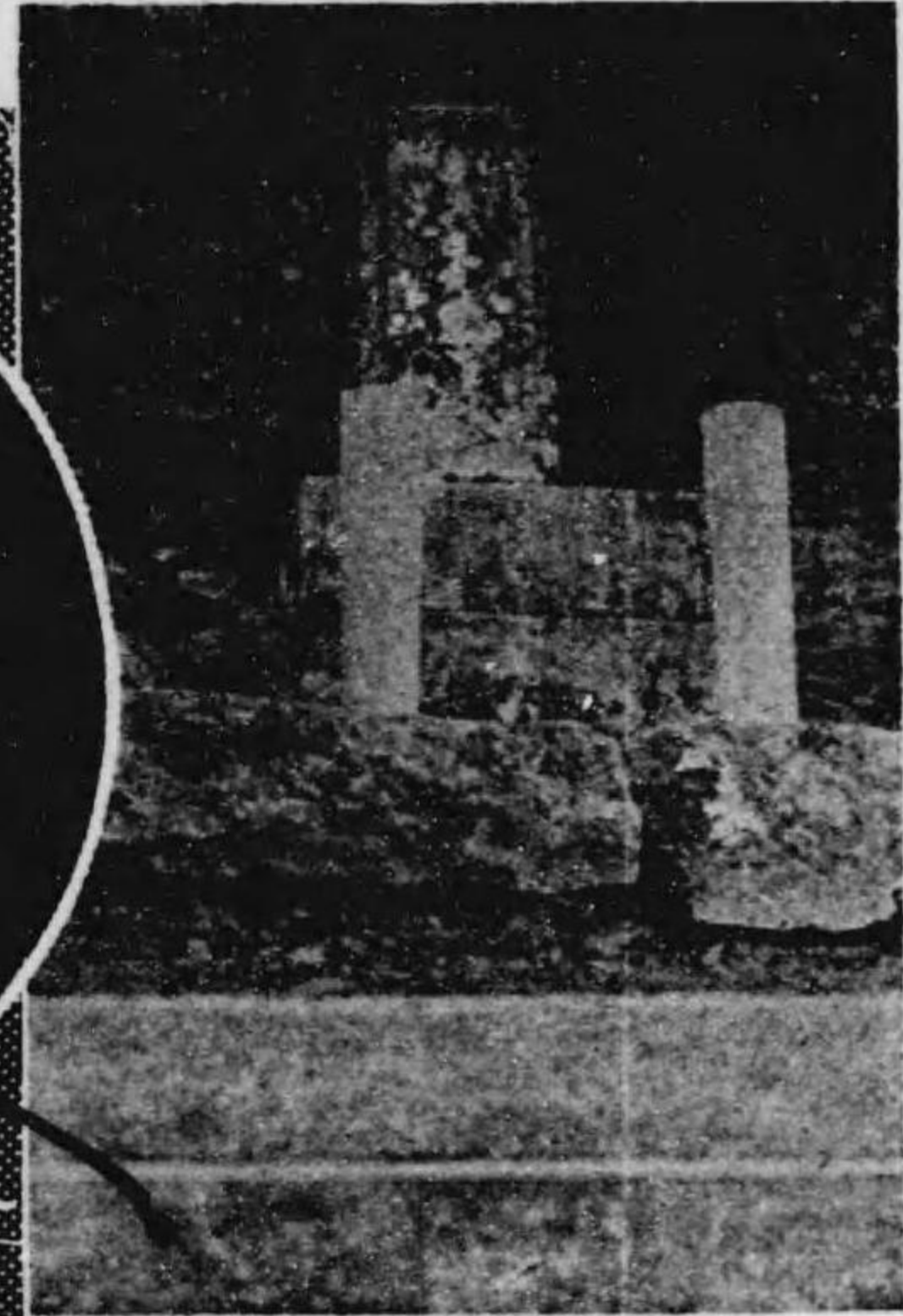


(址寺王輪金) 址宮野吉

楠正行行塚碑



村上義隆之墓

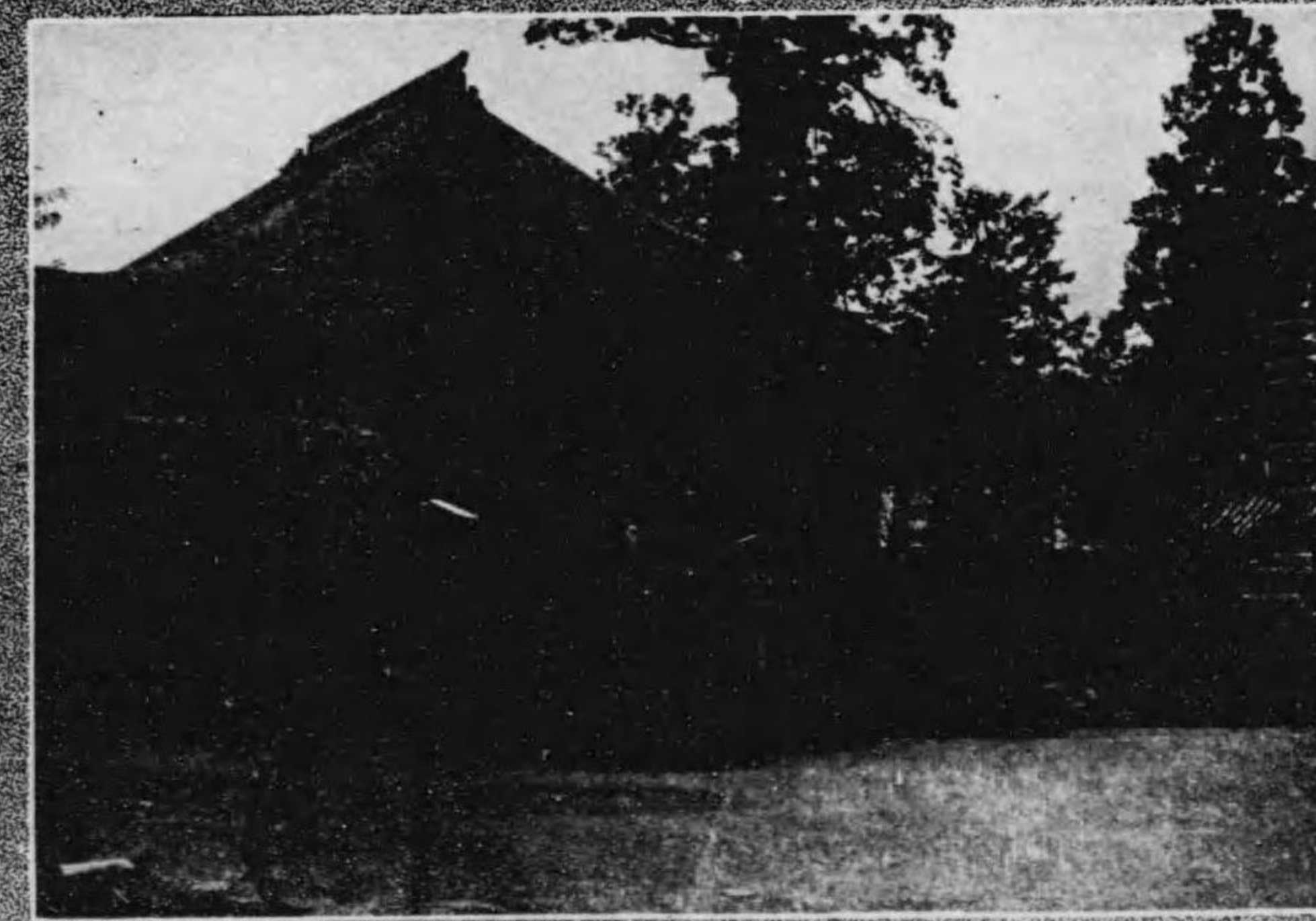
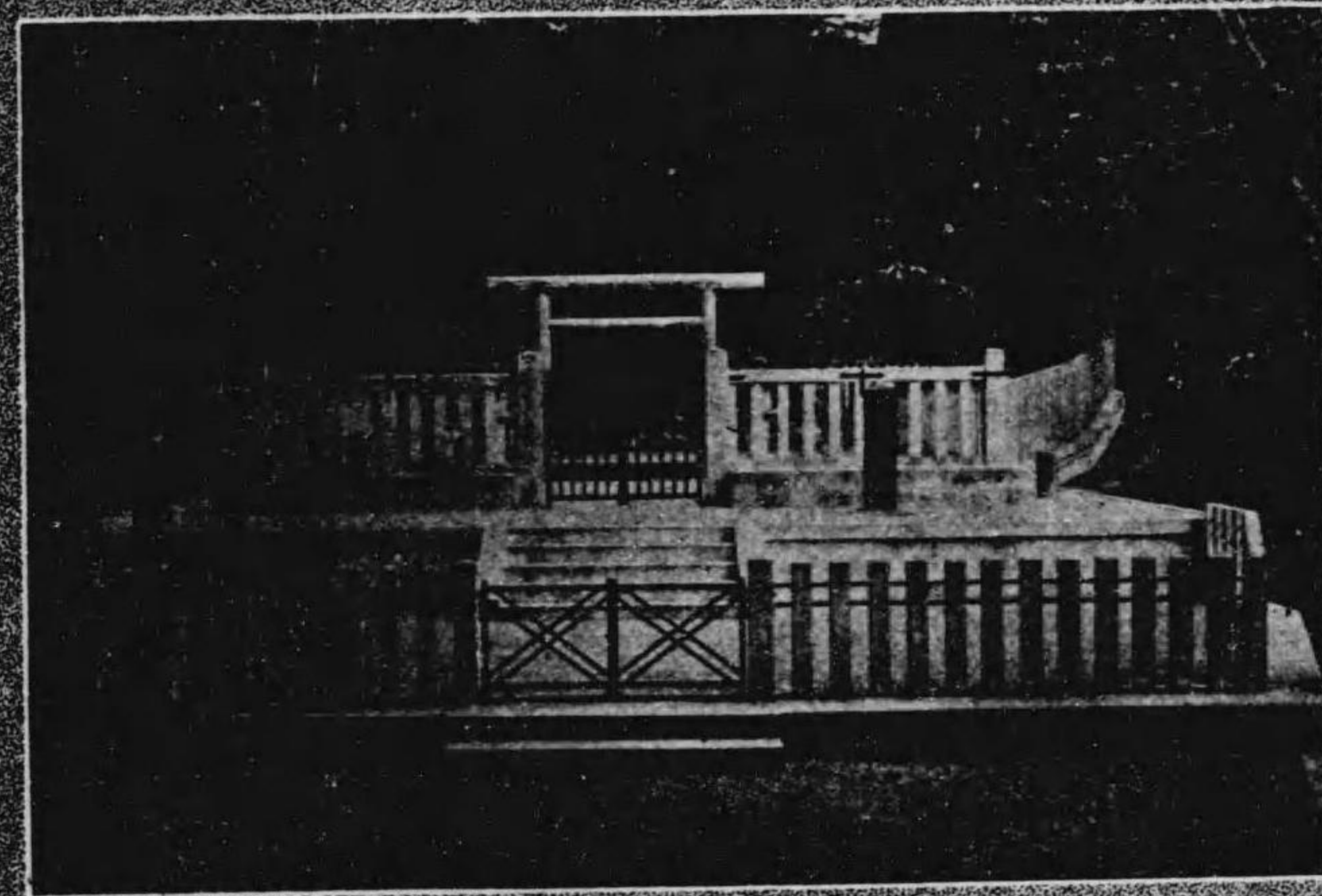


辨内侍至情塚



藤本鐵石招魂碑

後醍醐天皇塔尾御陵



塔尾山如意輪寺



大塔宮城址 高城山

奥千木西行庵

例言

一、本書は吉野観光の利便に供せんため、吉野山小學校同窓會の事業としてなれるものであるが、余元より淺學非才、到底粗漏杜撰なきを得ない、幸に職者の高教を賜ひたい。

一、吉野名所誌は全々吉野歴史でない、歴史は正確考證を要するが、古蹟名勝は口碑傳説になれる場合がある、故に本書記事中、間々玉石混淆荒誕無稽のものあるを免れない、只見る人の感想を養ふの方便になれば幸である。

一、本書を草するに當り、参考とした書籍記録舊記等尠なくないが、煩を厭ひて茲に列記しない、併し之等に就て種々便宜を與へられた諸君には、特に記して謝意を述べて置く。

一、本書は吉野探勝の順序として、山麓六田より次第を追うて、古蹟名勝を記述したるものであるから、途中の前後左右上下等は之に依りしものと知られたい。

編者 職

目次

地勢及位置	一
沿革概要	二
金峰山寺	三
櫻の由來	四
登山の栞	八
古蹟名所	九
吉野川、柳之渡、一之坂、長峰、歌塚、吉野宮	一一
峰の薬師堂址、村上義光の墓、嵐山、一目千本	一六
追分の辻、七曲、大橋、隠れ松、關屋の櫻、黒門、銅の鳥居、藤尾坂、仁王門、花見塚、吉野式内吉野、鳥居金輪王寺址	一八
藏王堂	二四
四本櫻、威徳天神社、稻荷社、草駄天山、東南院、吉水神社、吉野鑛泉、元櫻本坊、井光神社、山口神社、袖振山、大日寺、村上義隆の墓、中千本、如意輪寺、塔尾御陵	二五
世泰親王の墓、芳野離宮址、喜藏院、櫻本坊、竹林院、小山神社、忠僧宗信の墓	二六

布引の櫻……………
 御幸之芝雨師、上千木、横川覺範の首塚、
 瀧欄、花矢倉、雲井欄、世尊寺址、佛像石(人丸塚)……………
 式内吉野水分神社……………
 午頭天王の社址、高城山、金峰神社、
 寶塔院の址、青根峰、苔清水、西行庵、
 奥千木、金峰山上……………
 金峰山創草記……………
 豊太閣芳野山登嶺記……………
 花供懺法會の由來……………

吉野名所談

吉野山小學校同窓會編

地勢及位置

武蔵秩父より西走して伊勢海を越へ紀和に亘り、遠く四國九州に連るものを秩父古生層と云ふ。吉野は此の地質によりて築かれたる吉野群山中、金峰山の中腹にあり、地形恰も馬背の如く吉野河畔より起り蜿蜒南二里に及び、後に轟々たる峰情を背ひ、前に吉野の清流を帯び、土地高燥、四時の風光甚佳なり。

沿革概要

吉野或は芳野と書し、上古之をえしぬ(延斯怒或は鬼之怒)、よしぬ(與之怒或は余思努)といひ、古歌にみえしぬの(美延斯怒能或は美曳之努能)みよしぬの(美與之努能)みよしの(三吉野或は見吉野又は三芳野)などいへり。
 又金峰山の支脈なれば世に金御嶽、黄金嶽、御嶽、金嶽、國軸山等の稱あり。
 神代既にこの地の名顯はれ、神武天皇熊野を経て大和に入り給ひし御時、吉野首の祖井水鹿(井光)天皇を迎へ奉りたりと。降つて應神天皇吉野に巡狩せられ、尋で雄略齊明の二帝も此の地に御幸し給ふ。其の後役君小角金峰山を開き修驗道を起すに及び、角乘角仁等の名僧知識相次ぎて之を繼承し、大に斯道の普及興隆につとめしかば、寺院數多建立せら

れ、吉野の基礎は全くこゝに形つくられたり。

大海人皇子一時世を遁れて當山に入り給ひしより、持統文武元正聖武の諸帝相次ぎて御幸あり、花に雲に歌を詠じ、君臣相興じ給ひて後永く遊覧の地とはなりき。

文治年間源義經、兄頼朝の疑をうけて暫くこゝに匿れ愛妾靜と一片の哀史を止め、元弘年間大塔宮、こゝに城きて北條の大軍を迎へ村上義光父子雖に殉じ芳名を千古に遺して以來、延元元年後醍醐帝、南遷して行宮をこの地に定め給ひて後、後村上後龜山の二帝相承け給ひ五十餘年間、時に行宮をかへさせ給ひしことあれど概ねこの地を皇居とせさせ給へり。

この間正平二年楠木正行一族郎黨と共に吉野廷に参内し、辭世を如意輪寺に止め、四條畷に戦死す。師直捷に乗じ、大舉吉野を襲ひしかば後村上帝神器を奉じて、賀名生に移らせ給ふ等、所謂歌書よりも軍書に悲しき吉野山とはなりぬ。文祿三年豊公、秀次家康等五千人を従へ當山に觀櫻すること五日間、和歌の會能樂の催あり、一代の豪奢をつくされたり、觀櫻の盛大は實に此の時を以て最とす。

慶長十九年徳川家康、南光坊天海をして當山主寺金輪王寺を日光に移さしめ、これが支配地とせしより、事物皆學頭の興る所となり、漸次往時の盛況を失ひしが寺院は尙陰然勢力を有し、又花に月に文人墨客の來訪絶え間なかりき。然るに一朝明治の政變に遭ひ破壊の風潮はこの僻地を襲ひ、寺院は殆ど破壊し、名勝は廢頽に委し、櫻樹は濫伐して一時見る影もなかりしが、近時官民覺醒して大いに復舊に努む。

現今行政區劃により吉野郡吉野村の一大字たり。戸數約四百、人口二千百餘。

金峯山寺

役君小角金峰山を開き、修驗道を創始せしより以後、堂宇寺院數多建立せられしが元來金峰山上は險峻高峰にして、冬季積雪文餘に及び冬籠の困難より、其の山麓なる吉野山に假舎を置き、山上護持の任に當りしが、吉野藏王堂をはじめ觀音堂講堂寺院僧舎百餘坊を數ふるに到れり。山上本堂諸坊にこれ等を加へ總稱して金峰山寺といふ。

以後金峰山寺は諸國に多數の末寺と數萬の修驗者とを有し、上下の歸依信仰厚く、(後掲金峰山創草記参照) 其の勢力強盛にして、當時交通不便なりし支那に迄も知らるるに至れり。

日本國都城南五百餘里、有金峰山、頂上有金剛藏王菩薩、第一靈異、山有松檜名花軟草、大小寺數百、節行高道者居之、不曾有女人得上、至今男子欲上、三月斷酒肉飲食、所求皆遂云、菩薩是彌勒化身、如五臺文殊(義楚六帖) 後醍醐帝當山を皇居と定め給ひしを初めとし、忠臣烈士の事蹟に富み歴史上一段の光彩を添ふる所以亦實に金峰山寺の興隆に起因するもの多し。

其の後多くの寺院堂宇は屢兵燹に罹り、幾多の變遷を歴て概ね廢頽し其の名近時に存するもの左記の如し。

(一)を附せるは現在せるもの)

藏王堂	大峰本堂	觀音堂	二王門	二月堂
彌勒堂	師子尾堂	藥師堂	二天門	大塔假堂
鐘樓堂	安神寺藏王堂	四方正面堂	丈六山藏王堂	長峰藥師堂

講堂釋迦	世尊寺釋迦堂	二鳥居丈六堂	石藏寺觀音堂	常行堂
道圓寺講堂	吉水觀音堂	大塔	寶塔	多賀塔
獻拔塔	牛頭宮	金精大明神宮	子守大明神宮	勝手大明神宮
佐地大明神社	天滿天神社	八王寺社	上宮	下宮
吉水院	東南院	喜藏院	大福院	知足院
新藏院	新熊野院	實相院	妙覺院	道光院
竹林院	成就院	寶生院	吉祥院	新住院
勝光院	蓮藏院	寶積院	福壽院	持福院
十方院	禪定院	千手院	通照金剛院	金剛壽院
來迎院	不動院	延命院	釋迦院	樂師院
千光院	眞珠院	福島院	文珠院	小松院
眞藏院	寶塔院	寶泉院	多聞院	龍華院
保光院	清涼院	光藏院	寶藏院	持明院
心善院	密乘院	教學院	如輪寺	大日寺
大將軍寺	實城寺	大福寺	蓮臺寺	周通寺
大聖寺	一乘寺	道光寺	南室坊	櫻本坊

岸室坊	上室坊	椿坊	池之坊	福井坊
坂中坊	角之坊	寶泉坊	福之坊	岩室坊
宗春坊	舞仙坊	宗學坊	裕春坊	松室坊
寶積坊	上之坊	喜久坊	西之坊	岩本坊
中室坊	藏之坊	寶楠坊	松之坊	柳之坊
舞學坊	行織坊	乘順坊	舞良坊	笹之坊
前之坊	久南坊	穀松坊	谷之坊	東之坊
杉本坊	久保坊	穀屋坊	岩之坊	辻之坊

櫻の由来

櫻の産勝に一説あり、一は天武天皇の勅裁とし、一は役君小角の植樹となす、何れも里人に櫻は神木なりと稱して其傷害をいましめしかば、人皆之を恐れ樵夫すら之を伐らず、薪中にも其の一枝一葉をも交へざりき。斯の如き消極的方法と、爾後藏王權現に冥福を祈るもの棄するに櫻を以てせし積極的方法と、この兩方法が數百年來永續して愈増殖し、遂に雲井櫻布引櫻瀧櫻馬場櫻香清水遠谷千本櫻花塚等其の絶美を極め、貞室としてこれはこれと驚嘆せしめ、知紀をして見ゆる限は櫻なりけりと絶叫せしむるに至りしなり。然るに惜むべし、明治維新に於ける破壊の風潮は心なき里人として産伐に産伐を重ねしめ、一時見る影もなき衰態を來たせしが、近時區民漸く覺醒し官民銳意其の保護と増殖とを

はかりしかば、漸く現状を呈するに至れり。

天武天皇の御製

淑人のよしとよく見てよしといひし吉野よくみよき人よく見つ

よき人のよしといひつる吉野山よく見て行きてよしと語らん

吉野山たへず霞のたなびくは人に知られぬ花や咲くらん

吉野山みねになみよる白雲とみゆるは花のこずるなりけり

櫻花さきぬるときはよしの山たちのほらぬ峰の白雲

吉野山去年の葉の道かへてまだ見ぬ方の花をたづねん

人は武士柱は槍魚は鯛小袖は紅梅花はみよしの

むかし誰かゝる櫻の種を植えて吉野を春の山となしけん

名に高きよしの山の花よりや雲に櫻をまがへそめけん

梅と櫻と吉野へいたら梅は酸いとて戻された

- 本居 宣長
- 中 務
- 藤原 忠隆
- 修理大夫 顯季
- 西行 法師
- 一休 和尚
- 後京極攝政良經
- 藤原 俊成
- 俗 論

大和巡りの記 凡此山は六田の方の麓より奥の院まで百餘町の間民家なき所は左右皆並木の櫻なり。又左右の傍も下の谷も左右のかけはる所々の谷にも皆櫻多し。まれに杉あり。二三月は花の世界と云つべし。春は麓より先花開初てややく山にさきのぼりて奥の院にてなほる。麓の花盛過て中の花盛になる中の花さかり過て上の花盛にひらく。其間大や三十日許あり。又晚櫻は麓にも所々に在りて春の末奥の院の花盛の頃盛に開くあり。初櫻は高き所にあるも早くさくなり。凡此山の櫻は皆一重なり。入重櫻は山中及び民家僧坊に一株もなし寒風はげしき年或は風雨久しく續けば花の容色あしく故に年に依て好否あり山僧の曰此四十年前以前は今より此

山に櫻多し。凡此山の花上中下一時にひらかずといへども大や立春より六十五日に當る頃を最中とす。但し年の寒温によりて遲速あり。吉野の町より少く前東の方に山のさし出たる所あり櫻の盛此あたりより左の谷の内まへよりむかひ左より右より二十町ばかりたゞ一目に見えて皆花の林なり。おもしき事たさへていはん方なし。ゆきのあけはたゞひたしるにてわいためなし。此所花のさころんくにさきほころびたるようほひき世の外の物にやあやまらる。凡櫻は雲すきに見ゆるはあやなし。山のかたはさり又谷底にありてむかひにすき間なき所にあるを見たるがよきなり。此所の花は四邊の山のかたはら谷のうごにあるをたかき所より望み見る。たさへば大なる盆などの内を見るやうに待る此やうのめたき見ものはやまさはいふにおよばずおろくは見ぬもろこしもあらじと思ふ。うの好のあだし國はさらなり、子守より上の花はおろし。この山にて櫻を切る事を甚だ禁す。櫻木を薪にせずかゝるが故に樵夫櫻をきりて賣らず。もし薪のうちに櫻あれば里人これをわらびてすつ。是里人のひとへに櫻を愛するにあらず藤王権現の神木にてなしみたまふさいひ傳へて神のたゞりを畏るゆゑなりと。

我邦各地には或は史蹟或は名勝、或は天然記念物として保存すべきもの少からず、今特に櫻に就て云へば大和に吉野山あり、武州には小金井あり、東近郊に江北村あり、吉野と小金井と江北とを合せて予はこれを我邦の櫻の三大勝地とせり、此中種植時代の最も新らしきは江北の櫻にして正に明治十九年にあり、更に古きものは小金井の櫻にして、徳川幕府の初期より中期に亘り、而して年代の最も古きは吉野の櫻に外ならず。

上記の櫻の名所は各々特色あり、我邦古來の櫻の園藝變種を網羅せるは江北にして、山櫻の自然變種を収集せるは小金井と吉野なり、殊に吉野の櫻の來歴は最も古く、遠く平安朝の昔に知られ、これより出でたる櫻の系統全國に擴がりて今日に傳はれるもの甚だ多し、現に吉野山に在る櫻の品種は各々其特徴を異にし、詳かに比較すれば數十種に分つを得べし、これ皆古來の自然變種の傳はれるものにして、科學上より見れば實に貴重なるものなり、抑々山櫻は我邦の國華にして、其自然の變種は各地に散在し、容易に一處に見るを得ず、これを見得るは唯吉野と小金井のみ、故に吉野は我國華の粹を集めたるの地にして、天然記念物として見るも我邦の誇りとするところなるが亦南朝の遺蹟として同地の櫻に一段の光彩を添ふるものと云ふべし、轉近世界各國にては自國の史蹟名勝天然記念物を保存するの計畫を立て、著々實行に力めつゝあり、我邦にても第二十七議會に於て同趣意の建議は貴衆兩院より出で、次で「史蹟名勝天然記念物保存會」の設立を見るに至りたれば、斯かる保存上の思想は次第に普及するに至るべし。前にも記せる如く、吉野山は古蹟と名勝と天然記念物を兼ねる本邦著名の地にして、正に國寶物價値あるところなれば、將來に於て十分に其美の維持に努むべきものなり。(理學博士三好學)

登山の乗

吉野觀光を爲さんとして鐵道により、名古屋、京都、奈良、大阪方面より來るものは、王寺驛より吉野口驛(葛)に丹波市、櫻井、畝傍方面より來るものは、高田より吉野口驛に和歌山高野口方面より來るものは、五條より吉野口驛にそれれ、出で、此處にて吉野鐵道線に乗り換へ吉野驛(北六田)に下車すべし、又徒歩畝傍方面よりするものは、檜原神宮より壹阪越により北六田の東なる増口に出で柳の渡を渡るべく、初瀬、櫻井方面よりするものは、多武峰より上市に出で櫻の渡を渡りて登るべく、高野橋本方面よりするものは、先づ五條に出で宇野峠を越え千石橋を渡りて下市に出で山麓六田に出するをよしとす、六田より吉野藏王堂に至る約一里、途中路坂多かれど峻坂と稱すべきものなく、人力車も通じ又山駕籠の便もあり、されど徒歩にて徐に途中の風光を賞せらるゝの勝れるに如かず。

上中下奥千本は勿論他の公園の手入年々に行届き櫻樹の増殖を計りつゝ、あれば花は年と共に芳しく、眺は之に正比して益勝る、加之夏は金峰登山秋は紅葉に集ふ人の多ければ、これに應ずべき旅館の設備もよく整ひ、大小數十の旅館料理店を有し、其の他寺院にも參籠を許すを以て如何なる場合と雖も不便を感じるが如きこと萬あるべし。觀光者は下千本を賞し吉水神社塔尾の御陵を拜し中千本に觀櫻し日歸りせらるゝも可なれど、一泊して金峰水分の神に賽し奥千本西行庵を訪ふて悠々一日の清遊を恣にせらるゝも可なり。地圖及び里程表は巻首に掲げられたれば参考とせらるべし。

古蹟名所

吉野川

吉野川は源を大臺ヶ原山に發し、西流して紀伊に入り紀の川となり紀伊水道に注ぐ。流程約三十里、上流は流水の石に激し岩を嘍み、急瀬碧潭相連り奇景多し、中にも大瀧柴橋、茶摘、音無川等の勝景最も著はる。

この川には鮎の産多くして櫻鮎の名世に高く、夏季遊漁の客少なからず。有名なる吉野材木(年額五百餘萬圓)はこの川によりて搬出せらる。

- 八雲さす出雲の子らがくろかみは吉野の川のおきになづさふ
- うまなめてうちむれこえき今日みつる芳野の川をいつかへりみん
- くるしくもくれゆくひかも吉野川清き河原をみれとあかなく
- よしぬ川かはなみたかみたぎのうらをみずなりなんこひしけまくに
- いにしへのかしこき人の遊びけん吉野の川原みれどあかなくに
- よしの川嶺の櫻の移り來て瀧せもしらぬ花のしら浪
- 吉野川岩もと櫻咲きにけりみねよりつゞく花の白ゆき
- 春風にかすみ流れて吉野川水のうへ行く花のしらなみ

柿本人丸
萬葉集
同
同
藤原泰綱
光明寺入道
不知護人

禮天王氣已寥々 五百春秋日月遼 猶是芳山山水 聲々嗚咽哭南朝
路入和州林壑間 遺蹤名勝好登攀 湯々芳野一溪水 隔斷夫妻兩岸山
芳川滾繞芳山 練色藍光百折灣 天愛名花設斯險 不分一樹向塵寰
山田永年
大島如風
中井竹山

柳之渡 (三吉野橋)

大淀村大字北六田と、吉野村大字六田間吉野川の渡にして、昔時附近に柳樹多かりしを以てこの名あり。この渡は傳法阿闍梨聖寶僧正(理源大師)のはじめて設くる所、六田(ムダ)は古六つ田(ムツダ)の淀といひしところなり。この渡は櫻の渡(上市)、梅の渡(瀬上)と共に古來三渡とて有名なりしが大正八年縣費を以て三吉野橋を架す。

かはづなく六田のかはのかはやきのねもころみれどあかぬきみかも
萬葉集

船つなく風も縁にちりにけり六田の淀の玉の小柳
大貳重家
櫻咲く水分山に風吹けばむつ田の淀に雪つもりけり
飛白井雅章
青柳の縁に染めて河なみは六つ田の淀に雪つもりつゝ

一之阪

柳の渡を渡り六田を経て吉野に向へば四五丁にして急阪あり、一之阪といふ。
みよしのや櫻一本に先見せて山口しるく匂ふ春風
飛鳥井雅章

山口はうつるもよしや吉野山なほわけ入らん花も奥あり
涌蓮法師

長峯 (吉野八景の一 長峰彩霞)

一之阪より下の千本に至る二十餘丁の峰つゞきをいふ、道路の兩側に櫻の並木多くして花時花洞に行くが如く、片々たる暖雪を遊びながら左顧右眺絶景を賞せば登阪の勞も忘るべし。
いつかたを限りならまし吉野山行くくつゞく花の下みち
涌蓮法師
吉野山消えせぬ雪と見えつるは嶺つゞき咲く櫻なりけり
讀人知らず

歌塚

吉野宮より一丁ばかり下道路の左側にあり。西方遙に金剛葛城の諸山を眺め、北方近く龍門高取の連峰と對し、吉野の清流は足下をめくり眺望甚だ佳にして、自一句を禁じ得ざるべし。
金剛山 大和河内の境上に跨り、海拔三九七三尺、山腹に楠公の城址あり、頂上に登れば近畿大牛の景象を雙眸に收め得べし。
葛城山 金剛山の北方に連り、海拔三七〇〇尺、山中に清澗あり、極難遊といふ。
龍門岳 山中に龍門瀧あり。
高取山 植村氏(高取藩)の城址あり、附近一帯は高取官林なり。
高見山 伊勢大和の境に屹立す、海拔四三三三尺。
月雪に流れてやまぬよしの川
一片亭可翠

東北眼下に見ゆるは飯貝丹治(吉野村)上市町(吉野郡役所々在地)なり。
吉野川畔の森は子守神社なり。

吉野神宮

祭神 後醍醐天皇

御影神社 贈従二位 藤原資朝
贈従三位 藤原俊基

攝社 船岡神社 贈正四位 兒島範長
贈従三位 兒島高德

贈従四位 櫻山茲俊

瀧櫻神社 贈正四位 土居通増
贈正四位 得能通綱

明治二十二年六月二十八日神殿を創立し官幣神社に列せらるゝの御宣下あり更に明治三十四年八月八日官幣大社に御昇格あらせらる。輪奐宏大結構壯麗にして、花梢の間白木の宮居神々しき、自崇嚴の感にうたるべし。大正二年六月十七日 今上陛下本殿修理の事開召され金貳百五十拾圓御下賜あらせられ大正七年九月廿八日吉野神宮と御改稱せらる、當今御崇敬の厚きこと窺る奉るを得べし、此所はもと丈六山一の藏王堂址なるを以て丈六平の名あり、元弘の亂賊軍の陣せしところなりと。

本殿は本造流造檜皮葺にして桁行三間弱、梁行二間弱、拜殿は本造妻向入母屋造檜皮葺にして方三間弱、攝社本殿は入母屋造檜皮葺にして桁行一間強、梁行一間弱、同拜殿は妻向切妻造檜皮葺にして方二間弱其他神饌所、繪馬堂、神庫等あり。

寶物の中後醍醐帝御製の色紙「ながらふるかひこそなけれあふこと、かへぬ命の、こるつらさは、」小楠公の甲冑は其の主なるものなり。

人皇第九十六代後醍醐天皇は御諱を尊治と申し、後宇多天皇第二の皇子にましまし御母は談天門院藤原忠子の方にて孝誠忠繼の息女なり、正應元年十一月二日御降誕正安四年六月御年十六歳にして親王に立たせ給ひ嘉元元年十二月御元服ありて三品に叙せられ大宰帥中務卿を経て徳治三年九月御年二十一歳にして皇太子に立たせ給ふ、文保二年二月御受禪あり、三月御即位の大禮を舉げらる時に御年三十一歳なり、天資英邁にして常に王威の振はざるを慨き北條氏の無道な憤り給ひ密かに忠義の士を語らひ高時討滅の御謀をめぐらし給ひしが、端なくも其事敵方に洩れ賊軍反りて京師を犯し、かば元弘元年八月天皇皇居を出で南部へ行幸あり、次で笠置へ御遷幸ありしも賊勢熾にして幾程なく破られ赤坂に落ち給ふ、さして行く笠置の山を出でしより天が下には隠れ家もなしと歌はせ給ひしは此の時なり、さるを御運拙く遂に執はれ給ひ平等院及六波羅に押込の御身となり、翌春三月隠岐に遷され遷き年月を送り給ひぬ、此の間護國親王は吉野に補正成は千劍に赤松明村は苦繩に其他勤王の士諸國に競ひ起りければ三年二月密かに、ろ、を出で伯耆國にいらせ給ふ名和長年行宮を船上山に送り兵を聚めて護衛し奉る之れより諸國へ高時追討の宣言を下し給ひければ官軍敵に鋒起し、幾程もなく北條氏の一族亡びて六月車駕京都に還幸し、年號を建武と改む洵に累代の御憤みも遂げ給ひて王政維新の大業に就き給ひき世に之を建武中興の御世と申し奉る、然るに延元元年足利尊氏反逆を企てければ帝親山に幸し油臣追討の事を圖らせ給ひ一度は尊氏を西國に追落して都に還り給ひしが五月尊氏四國九州の大軍を率ゐて襲ひしかば再び親山にのかれ給ふ、尊氏謀を以て天皇を欺き花山院に押籠給ふ、かくては共に思召し給ふ折柄、北島親房の奏上により十二月三種の神器を奉じて賀名生に忍び出で給ひ、更に吉野に遷幸ましましぬ、此の時尊氏は專横にも京都に於て光嚴天皇をたてまゐらせ、所謂南北の争ひこはなりたれど天に二日あるべからず、地に二王あるべからず、正統の御君は正しく南朝に限れるなり、天皇諸國の勤王の士を語らひ日夜回復を謀り給へど、新田義貞北島顯家相ついで戦死し、いたく宸襟を悩まし給ふ折柄、同四年八月九日より御不豫となり、

同十五日位を皇太子義長親王に譲り翌十六日吉野の行宮に崩じ給へり、在位二十一年、寶曆五十二歳で、崩するに臨み御口づから勅すら、妻子珍寶及王位及命終不隨者但願賊平かすして四海未だ安からず、惟此を恨まなすのみ、太子位に即かは其の賢に任じ能か使ひ以て朕が志に稱へよ、朕が身は南山に墜るも神は常に北を望まん、若し命を墜すものあらば予は繼體に誦す臣は盡忠に乖かんと語りて左に法華經を把り右に劍を按じて崩じ給へり、天皇常に博く書史に渉り予は皇子を信じ其の風を密宗禪旨に於て特に研究する所ありき、又御心を典故に留め年中行事を著し給へり、治を爲すに延喜の風を慕ひ給ひ、國に還りてより關白を廢じ御躬ら庶務を攬り更革したまふ所甚多し、常に宣ひて申すらく今日の舊例は乃ち往日の新制なり、安そ朕が新制にして復後日の遺例ならざることを知らんやと、洵に我國中興の大英主にて明治維新の大業も五百年以前の此の御代に已に端緒を開き給ひしと申し奉る。

峯の藥師堂址

吉野宮より上ること八丁餘、道路の右側にありて昔時結構壯麗を極めたりしが、維新の際廢頽す、本尊は今藏王堂にあり。

この邊に豊公觀樓の際、大和中納言秀俊卿の設けられし松山茶亭の址あり。

吉野山梢の花のいろ／＼に驚かれぬる雪の曙

豊公

村上義光の墓

藥師堂址の傍松檜の茂れる小阜の頂上に義光の墓碑あり、君が没後幾百星霜の間榛莽に埋れ、虫聲僅に英魂を吊ふのみなりしが、明治四十一年十一月陸軍大演習の際、陛下その功を追賞し、特に從三位を贈らせ給ひ、後これが營繕をなせり。

村上義光は信濃の人彦四郎と稱し、左馬權頭たり。陸奥守源頼清の後、頼四郎信泰の子なり。元弘の亂に大塔宮に從ひて十津川に逃れ、戸野兵衛竹原入郎に頼る。熊野別當定通之を來むること甚志なりければ、宮は逃れて吉野に落ち給ふ。時に土豪半通莊司兵を以て途に要せしかば、宮は之に錦旗を賜ひて僅に過ぐることを得給へり。義光偶遙に後れたりしが、莊司の錦旗を伺ひかへるに逢ひ、進みて旗を奪ひ、旗を持ちたる大男をつかみて田中に抛けて漸く宮に追ひつき奉る。既にして吉野に城きて之に籠る。元弘三年正月(紀元一九九三年)敵將二階堂道温大兵を督し來り攻むること七日にして抜く能はず、時に當山の執行若菊丸といふもの、間道より敵を導きしかば宮は自ら敵に當り力戦し給ひしかど前後に敵をうけて及ばず遂に軍に敗れ給ふ。(四本櫻記事参照)時に義光宮の鎧裝を賜はり、宮に代りて自及す。

忠烈碑

元弘之亂大塔王出據吉野東師團之七日不克東入宵潛入金峰味且三覆齊起鼓謀而進王擐甲出戰身被七矢流血及履末拔遺矢還入藏王堂立飲于庭中小寺相模斬一人挂首劍鋒歌且舞邨上君諱義光棄敵走回謂王曰彼熾我濟臣願賜王鐵衣代王而死王曰死則同所君厲言固諫進解王衣登樓呼曰神孫帝子今已自裁若等蠢々死亦不久志以爲法脫甲投下剗腸擲壁銜鋒而俛東師大驚解圍爭獲王逸君子義隆見君臨死與俱君曰叱若衛而君義隆乃從王闢殺數創走投竹中屠腹而斃王適高野遂斷渠魁嗚呼方王事多難君之忠烈百世之後夫婦之愚尙猶誦之景文每及之未嘗不髮上乃樹貞石于此以勒大節辭曰諫則屈誨則信得仁哉若人由義哉若人

天明三年冬十月

高取

内藤景文子武立

君がため散るや吉野の花矢倉たかき其の名は今も匂へり
不教兇賊奪旗章 致死誰全大塔王 碑上表君猶有憾 痛免長没彼幽光

加藤千浪
山本凹庵

嵐山

路の右側にあり、京都嵐山の櫻樹は、龜山天皇藏王権現を勸請して、こゝより移植し給ひしものなりと。因に甲斐金峰山の櫻も吉野より移植せしものなりと。

嵐山これも吉野や尋ね見んさくらにかゝる瀧の白糸

讀人知らず

一目千本

口の千本又は下の千本ともいふ。花時彩雲谷を埋め、山をめぐり、爛熳たる光彩は目を奪ひ、馥郁たる香氣は天地を薫染し、人心をして恍惚春風と共に飄揚せしむ、此所を日本が花と稱する又宜なりといふ可し。海拔一千一百尺。

明治二十三年四月二十一日 昭憲皇太后當山行啓の御時、この絶景を賞せられ暫く御野立あらせられ主上の御覽に供へまゐらせんとて一枝を折り取らせ給へり。

擊暉日記 ろれより吉野山にのぼらせ給ふ一目千本といふ所に御休所のまうけあり中略こゝは見ゆる限りは櫻なれどもこの春ははや花はちりばてたりをちこちたづねさせ給ふうちにひさ木ふた木ちりのこりたゝ花を御覽せられこゝは都に御かへりのなり主上の御覽にちなへまゐらせん枝なりてよこ仰こゝありければ敬三

我君をいてましまちて櫻花みやまかくれにちりのこりけん

路傍に刻せるは芭蕉の句にして「吉野にて櫻見せうぞ檜笠」とあり眼下に見ゆる老杉の森は幣掛神社にして金峰詣の行場なり。

- こえぬまは吉野の山の櫻花人傳にのみきゝ渡るかな
- みよしのゝ山邊に咲ける櫻花雲かとのみぞ見誤たれける
- 古里はよしのゝ山も近ければ一日もみ雪ふらぬ日もなし
- 吉野山花のさかりになりけりたゆるときなき峰の白雪
- 吉野山霞の奥は知らねども見ゆる限りは櫻なりけり
- よしの山八重立峰の白雪に重ねて見ゆる花さくらかな
- 何れをか花とはわけてなかめましなへて櫻のみよしのゝ山
- よき人をよしとよくみし夕よりよしのゝ花のおもかげに立つ
- みよしのは櫻も櫻歌人の言葉の花も山をなす山
- もろこしの人に見せばやみよしのゝ吉野の山の山さくら花
- おしなへて花の盛りになりけり山の端ごとにかゝる白雪
- これはこれとはばかり花の吉野山
- 花さかり山は日ころの朝ぼらけ

- 紀 貫 之
- 紀 友 則
- 讀人知らず
- 藤原爲業
- 八田知紀
- 藤原清家
- 本居宣長
- 香川景樹
- 宿屋飯盛
- 加茂眞淵
- 西行法師
- 貞 室
- 松尾芭蕉

追分の辻

元寇の亂賊軍こゝに攻め上りしを以て、攻が辻(責衝)ともいふ。北面して岐路を右に取れば飯貝上市を経て多武峰に至り、櫻井停車場に達し、左すれば六田壺阪を経て畷傍御陵檉原神宮に至り、又下市五條及び高野山和歌山に通ずべし。東北に見ゆる船形の山を、御船山又は船岡山といふ。萬葉以後古歌多し。

たきむへの御船の山にゐる雲のつねにあらんとわか思はなくに

弓削皇子

おほきみはちとせにまさん白雲の御船の山にたゆるひあらめや

春日王

みよしの、御船の山に立雲の常にあらんと我思はなくに

柿本人丸

一抹烟霞二月天 花如白浪山如船 定知仙幸留連日 歌吹海中御者邊

荒井公藤

七

曲

(吉野八景の一 七曲の曉櫻)

幣掛神社より下の千本櫻間を縫うて、攻が辻に至れる崎嶇たる坂路をいふ。花時仰視すれば香雲遙に天に連り、美觀いふばかりなし。

七曲の中腹の櫻を龜石櫻といひ坂の下を櫻田の櫻といふ。又七曲の對岸の櫻を花園山の櫻といふ明治維新迄村童の櫻苗を多く持ち出で、行人に賣れり。

みよしの、峰の花園風吹けばふもとにくもる春の夜の月

入道 太政大臣

吉野山たれか植けんさくら田のところの、花のはしり穂
仰ぎ見れば空にもつとくを花など一目千本と誰限りけん

道法親王
頼惟柔

大橋

又一の橋ともいふ吉野三橋(大橋、天皇橋、丈の橋)の一たり。擬寶珠に豊富朝臣秀頼卿御建立奉行建部内匠頭光重慶長九年甲辰十一月吉日大工三條藤原朝臣宗兵衛尉國次作の銘あり、明治四十三年二月修繕す。

隠れ松

關屋櫻の中央道の左側にある丈餘の老松なり。陽春櫻花満開せばこの松花に隠るゝが故にこの名ありと、吉野勝景圖には笈立松とあり俗に義經のかくれ松といふ。

盛りなる花にかくれて名もしく立つるやいづこみよしの、松

飛鳥井雅章

關屋の櫻

大橋より黒門までにある櫻をいふ。往時こゝに關を構へし故にこの名あり。この上方高地に山の井あり。關屋の櫻下の千本の櫻等を一陣にあつめ、眺望甚だ佳なり。

吉野山誰とむるとてはなけれども今宵も花のかげにやどらん

豊公

みよしの、山井のつら、結べばや花の下ひもおそくとくらん

黒門

藤原基俊

金峰山寺の總門にしてこれより人家ならびつとく、維新以前この門内は大名と雖伏槍下乗して通行せしといふ。

物産には杉、檜、木材及其苗種子、櫻菓子、櫻花漬、櫻細工、吉野葛、花籠、陀羅尼助、法螺貝。

此町にてうる土産多し葛、糖、烟草紙(くづみてあつき紙あり又杉原には薄紙あり)漆茶塗物(椀折敷まげ物小樽等色々多し)鏝、鱗、瓶、餅、椀折敷松茸、花籠、造化(鳥花扇等多し皆小兒の戯の弄物なり)頭巾法螺の貝(和州巡覽記)

銅の鳥居

黒門より一丁ばかりの處にあり。高二丈五尺、柱周一丈一尺餘、相傳ふ聖武天皇奈良東大寺大佛鑄造の餘剩を以て造ると。一説には醍醐帝の昌泰元年(紀元一五四九年)に建立せられしとも云ふ。額面の發心門の三大字は、聖武帝の御宸筆とも弘法大師の筆ともいひ傳ふ。明治二十一年七月二十三日、暴風の爲め倒れしを同二十八年四月再建し以て舊狀に復せり。

金峰山寺四門の内、修行門は金峰神社にあり、等覺妙覺の二門は昔時金峰山上にありしが今は額のみ藏王堂の寶庫に納む。

夢さめて其の曉をまつ程の間をもてらす法の燈

藤原光教

藤尾坂

銅の鳥居の南半丁にあり。俗に藤井坂といふ。文治元年十一月十七日、源義經の愛妾靜、義經と別れてこの坂を下り藏王堂に來りしを、吉野衆徒之を怪み捕へたりと。

吾妻鏡 文治元年十一月十七日丙申豫州籠大和國吉野山之由、風聞之間、執行相催惡僧等、日來雖案山林、無其實之處、今夜爰刻豫州妾靜、自當山藤尾坂降、到于藏王堂、其牀尤奇怪、衆徒等見咎之、相具向執行坊、具問子細、靜云、吾是九郎大夫判官妾也、自大物濱豫州此山、五今日逗留之處、衆徒蜂起之由依風聞、伊豫守者假山臥姿逐電訖、干時與數多金銀類於我、付雜色男等欲送京、而彼男共取財寶、棄置干深峰雪中之間如此迷來云々。

十八日丁酉、就靜之說、爲搜求豫州、吉野大衆等又踏山谷、靜者、執行頗令憐愍、相勞之後、稱可進鎌倉之由云々。

末路英雄何所爲	雪香一踏泣紅姬	有臣據守花之櫓	無客不尋藤尾遠
方外欲逃櫻亦恨	同根相煮雪應知	千秋嗚咽芳川水	山寺長留征討辭
九郎功成乃兄怒	欲依山僧々不附	脫身去踏萬重雲	家僕伴死姬見捕
迢々藤坂步遲々	靜女途窮泣血時	可憐綆得細腰處	揚柳風前拈綠絲
○みよしの、峰の白雪ふみわけて入りにし人のあとぞ戀しき			

蔵王門

又大門といふ。藏王堂の山門にして、後花園帝の康正元年(藏王堂と同時代)の建築にかゝり、桁行八間餘梁行五間餘あり。左右に密迹金剛の兩力士を安置す、共に身長一丈六尺餘、俗に運慶湛慶の作と云ひ傳へ、刀塚眞に迫れり。風鐸の舌の銘に云、金峰山二王堂、大勸進定善、大工下田住助次郎康正二年九月二十日(紀元二二一六年)とあり、今一個を存し藏王堂の寶庫に納む。

花見塚

仁王門より谷を隔て、東方(左)の山腹人家のある邊を花見塚といふ。文祿三年三月一日豊太閤登山の砌、こゝより觀櫻せられしを以てこの稱あり。この處一本の老櫻ありて當時の名残を止めしが、明治四十四年六月の暴風のため倒れぬ惜い哉。

みよしの、山邊に咲ける櫻花雪かとのぞみあやまたれける

紀友則

吉野皇居金輪王寺

(實城寺)

仁王門より右二丁許にして西の尾にあり、城内櫻樹を植ゆ。延元々年十二月二十一日(紀元一九九六年)後醍醐帝當山に遷幸し給ひ、先づ吉水院に入らせられしが、やがて當寺を以て皇居とし給ひ金輪王寺御所と稱す。延元四年八月十六日天皇この宮に崩し給ひ、(塔尾御陵記事参照)皇太子御即位之を後村上天皇と申し奉る。關白經忠、左大臣師基、右大臣公賢、權大納言實世、權中納言隆資政を輔けて遺詔を天下に宣す。されど殿閣未だ整はず、月卿雲客微少にして、昇

進除目殆ど斷絶せんとす、こゝに於て興國二年二月下旬源親房常陸小田城に居して、職原抄二卷を作りてこれを獻じ奉る。正平三年正月高師直大舉來襲するに及び帝は賀名生に御幸し給ふ、賊乃ち皇居に火を放ちしかば、月卿雲客の宿所残る方なく焼失せり、間もなく當寺を再建して生木の御所なるに及び、屢々皇居を此處に定め、大いに皇威を張り給ふ、又時に吟哦の清遊を絶たず、天授二年、千首和歌會あり百番歌會等の御催ありきとぞ。

慶長十九年甲寅霜月、徳川家康大阪在陣の節、當山は要害の地にして、寺院の勢力亦旺盛なりしかば、古來屢々之に據りて、事を爲さんとするもの多かりしを患へ、南光坊天海をして當寺を修繕せしめ、實城寺と改稱し、金輪王寺を日光に遷して、宮門跡の稱號を附し、天海僧正を金峰山寺學頭とす、以來吉野は日光の支配地となりて、維新の改革に至るまで、事皆學頭の與るところとなりき。當時京都所司代及天海僧正より下したる制札の文に曰く、

禁制 和州吉野山、一諸軍勢甲乙人濫妨狼籍之事、一武家牢人寄宿之事、一修理領並寺領當納所致難澁事、右條々堅被停止訖若違犯之族於有之者速可被處嚴科之旨仰知如件。慶長十九年霜月十九日、板倉伊賀守判 南海坊僧正判 明治八年廢寺となる、誠に惜むべきなり、寶物等數多ありしが、今は吉水神社及藏王堂に藏せり、前方中央の小高き地は御靈殿の跡にして御尊牌は藏王堂に奉祀す。

後醍醐帝御製

都だにさみしかりしを雲はれぬ吉野のおくの五月雨の空

歌書よりも軍書にかなし吉野山

曇々春山別有天 花開花落枕依然 羊腸險惡君休怒 曾護南朝五十年

支考

頼山陽

哀禽叫斷落花風 興廢三朝一夢中 日暮賞春人散盡 獨留山月照幽宮
 南朝往事夢成空 亂點飛花逐晚風 不使妖氣侵咫尺 萬櫻深護古行宮
 鬱環一路落花中 尋入山門僧半空 佛亦勤王可無禮 古禪宮即古行宮
 花擁古宮香霧蒸 斯中懷昔感何勝 不誅逆賊多遺憾 忍聽先皇按劍崩
 三木全枯一草空 勤王將士欲無功 唯留千樹櫻花雪 會護南山古帝宮

依田學海
 杉 聽 雨
 江 馬 天 江
 門 田 杉 東
 菊 地 三 溪

有客手裡橫紫玉、就視蒼髯老綠、吹之一曲聲悲聲、如蒼梧之符不北遠、溟亂湘雨斑斑、又如望帝之魂、嗚呼、山竹夜瀟血、問客何處得此物、延元天子古殿屋、敗壞取學祠亭收、一條龍海寄騰騰、長古有黃君樂器、短夢重失中原鹿、劍器灑脫始犯聲、七道眼伐涕野哭、圍城聞笛非無人、凝碧管絃長胡曲、君不見芳野山中頭白鳥、舉步似呼返闕速、吉語誤人入歌詞、空止殿屋俛且啄、龍顏仰屋曾按劍、王氣或寄一尺竹。

靈時已開芳野勝、老來始看芳野花、山腹山背花爲窟、就裡何處最花多、夾路森列舟里雪、千樹叢生一闌霞、此山有花木幾時、長使窮谷擅韶華、士女屈指計花候、遊賞不辭道路賒、二月三月好風日、懸徑日作絲竹譚、余自尋芳去較遲、猶見香巖遊舍牙、遊人未散花方謝、花謝人散春如何、春花不改閱人世、人世代謝情可嗟、靈昔南渡稱偏安、御床寂寞寄崑崙、九世復讎真英武、廢盤無如守成難、靈實抵致憤怨積、營宮誰問財力殫、前門拒虎後門狼、爾來幾除又高歡、再見殘寇入南斗、笠水北流長森漫、泉竭巫蟲事已去、況乃忠貞類摧殘、獨有元老源淮后、正統撐撐半壁天、當初舊物新入手、駕御羣雄豈無權、願望難掩田李罪、龍興翻導漢馬班、豕牙不實藏反靈、猶幸聞靈徒經年、昔人看花何情態、今人看花且盤桓、歡者不如憂者心、清時誰問亂時難、余今對花獨懷古、夕陽又下花林端、送靈風寒仍兵嘩、南人枉唱烏頭白。

藏 王 堂 (吉野八景の一 金峰の杜鵑)

本章 金剛藏王大權現

金峰山寺の本堂にして山内第一の巨刹なり、天武天皇の白鳳元年(紀元一三三三)役君小角の草創する所にして日本修驗道の根本道場なりとす。聖武天皇の天平年間、僧行基、勅を奉じて金峰山上に勅筆の經卷並に光明皇后の御親筆の經卷を埋藏するや、大いに本堂を改築して、永く國家鎮護の道場と定む、それより朝野の歸信を集め寺門の僧坊百數十を算し、その勢力の強大にして信仰の標的たりしこと、敢て南都北嶺に譲らざりき。本尊藏王大權現は御丈二丈六尺、二丈四尺、二丈二尺の木像三軀、着色立像にして大勢忿怒惡魔降伏の相を示し、釋迦、觀音、彌勒の變化身といふ、即ち右手に三鈷を握り、左手は五指を腰に當て、一睨大いに怒り、右脚を高く擧げて天地經緯の相を示す。抑々藏王大權現といふは、天智天皇の御宇、役君小角金峰山上に籠居し、濟度利生の爲めに、苦修練行墜埵の出現を祈りし時、初め柔和忍辱の釋迦觀音、彌勒出現せるも、小角以爲らく、かゝる相貌にては未來強惡の衆生を救度するに難しとて、之を拒否し潛心熱禱遂に感得せるものなりといふ。

本堂は其後元祿元年、寛治七年、嘉祿元年、文永元年の四度に焼失したるも盛なりし金峰山寺は直ちに之を建立せり、元弘三年大塔宮吉野御籠城の御時、此處を本陣とし給ひしが軍利あらず、賊將二階堂道灌大舉亂入して之を燒く、延元元年再興せしが、正平三年高師直吉野皇居を犯せし時、又燒失す、現今存するものは其後百七年を経たる康正元年(紀元二二一五)の建立にして、天正十九年豊公の大修繕にかゝるものなり、間口八十五尺、奥行九十一尺、棟高九十一尺七寸五分、但七間八面重層入母屋檜皮葺にして、棟梁柱楹の類堅牢巨大の良材を集め、其の規模の雄大宏壯なること他に比類なく、古社寺の豊富を以て知らるゝ大和にありて奈良大佛殿に次ぐ大建築にして而も其の構造形式はよく足利初

期の特徴を現し、當時の代表的建築なるのみならず、實に同時代の建築として残存せらるゝ内、我國第一なり。文祿四年九月豊公寺領千十三石二斗を付し本堂の修理もよく行はれたるも、近時結構稍々弛み簷傾き梁枋隙を生じ破損の箇所多きを以て特別保護建造物に編入し大修繕を行へり。此邊海拔一千二百五十尺。

太平記 去程に武蔵守師直、三萬餘騎を率ゐて吉野山に押し寄せ、三度関の聲を揚けたれども敵なれば音もせず、さらば焼き拂へさて、皇居并に柳相雲客の宿所に火をかけたれば、魔風盛に吹き懸りて、二丈一基の笠島居、二丈五尺の金の鳥居、金剛力士の二階の門、北野大神不現の宮、七十二門の回廊、三十八所の神樂屋、寶藏、遺殿、三尊光を和けて、萬人頭を傾くる、金剛藏王の社壇まで、一時に灰燼となりはて、煙蒼大に立ち上る、あさましかりし有様なり。

寶物

- 1、千手千眼觀音畫像(國寶藤原時代の傑作、傳光殿司筆、着色絹本縦五尺二寸三分横五尺五分)
- 2、嵯峨天皇奉納鍍金經篋及經片(國寶、元祿年間山上本堂大修繕の際經塚より發掘す、銅鍍金にて蓋足付、函内に紺紙金泥の經片を納む、縦一尺六分、横五寸、高五寸一分、魚子地、花鳥唐草の毛彫、重一貫二百目)
- 3、宇多天皇奉納鍍金經篋及經片(國寶、同上、縦一尺四分、横三寸一分、高二寸九分、蓋縦一尺一寸一分、横三寸九分、高九分五厘、重六百三十匁彫刻なし)
- 4、醍醐天皇奉納鍍金經篋及經片(國寶同上、縦一尺一寸、横五寸七分、高三寸八分、蓋縦一尺二寸七分、横七寸五分、高四寸、重一貫二百二十五匁彫刻なし)
- 5、普成普賢の立像(國寶、鎌倉時代の傑作、木質着色、高三尺六寸蓋一尺、普成の頭及右眼破損せり)
- 6、青銅大燈籠(國寶、藏王堂の正面にあり銘云奉造立燈籠和州下田住大工石門助、奉寄進御油田七反、文明三年辛卯九月十一日施主淨祐、妙久摩尼、高十二尺二寸)

- 7、藏王權現の立像(木質無着色、高一丈八尺、當山塔中安禪寺藏王堂の本尊なりき鎌倉時代)
- 8、釋迦牟尼佛の立像(鎌倉時代の傑作、木質無着色、高六尺八寸、蓋共九尺五寸、脇土阿難、迦葉尊者高各四尺三寸元世尊寺釋迦堂の本尊なりき)
- 9、久遠寶城釋迦牟尼佛の座像(木質無着色、高二尺八寸、蓋共六尺五寸、寶城寺の本尊なりき、藤原時代)
- 10、後水尾天皇御繪旨(元和二年九月十四日金峰山上再建の砌木食快元に掲げりたるもの)
- 11、金峰山上再興緣起四卷(元和九年青蓮院院純親王筆、寛永元年曼殊院良恕親王筆、同三年鳥丸大納言光廣筆、年月不詳瀧本法印筆)
- 12、青磁花瓶三個(支那燕、唐草牡丹浮樓様上下横筋入二個は完全一個口部破損せり高各一尺三寸餘)

以上は重なるものにして其他

- 一、三嶽曼荼羅(傳巨勢金剛筆)
- 一、愛染明王像(愛染堂安置、鎌倉時代)
- 一、後醍醐天皇尊儀(寶城寺靈殿安置)
- 一、役行者尊像(傳土佐光信筆)
- 一、三鈷之鈴(傳理源大師所持)
- 一、等覺門額(傳小野道風筆)
- 一、南室門額(室の窟の額)
- 一、理源大師の笈
- 一、聖德太子像(鎌倉時代)
- 一、高算上人像
- 一、後村上天皇尊儀(同上)
- 一、龍頭之鈴(傳日圓上人所持)
- 一、五鈷之鈴(傳傳教大師所持)
- 一、修行門額(傳嵯峨天皇宸筆)
- 一、花山法皇の笈
- 一、仁王門風鐸(康正二年の銘あり)

一、藏王堂風鐸(慶長二年の銘あり)
 一、懸魚四個(内陣側面に懸たるもの)
 境内に觀音堂經堂鐘樓等あり、毎年四月十一、十二の兩日こゝに盛大なる花供法會式行はれ京阪地方より群集するもの多し。

- 一、擬寶珠(豐臣秀頼の銘あり)
 一、山上常夜燈等
- | | | | | | | |
|---------|---------|---------|---------|---|---|---|
| 芳川北度歷羊腸 | 多武峰東千仞岡 | 背指豈圖紅霧際 | 分明高閣認藏王 | 頼 | 杏 | 坪 |
| 滿地東風散落霞 | 春殘三十六僧家 | 遊鞋勿踏亂紅片 | 盡是南朝天子花 | 小 | 原 | 竹 |
| 紫翠環周盤路空 | 鶯時未一著妍紅 | 藏王忿怒何年歇 | 颯起丹崖按劍風 | 國 | 府 | 犀 |
| 天子蒙塵度大瀛 | 親王敵愾據孤城 | 帳中不灑悲歌淚 | 麾下長懸節義名 | 中 | 井 | 竹 |
| 土窟游魂千載恨 | 邦畿振旅一時榮 | 悵望故壘烟塵迹 | 魅谷風醒杉檜鳴 | | | 山 |

四本櫻

藏王堂の前庭にあり、元弘三年閏二月一日護良親王敗戦し給ひし時、茲に帷幕を張り主従相汲んで忠壯悲烈鬼神を泣かしむべき最後の御酒宴を催さる。而して村上義光の自害したるは四本櫻の南方二天門の檜上なり(二天門は正平の兵要後建立せず)

太平記 親王親ら取ひ給ふこと數度、退いて左右に此處に最後の御酒宴を開き給ふ、宮の御鏡に立所の矢七筋、御頼さき二の御腦二箇所つかれさせ給ひて、血の流るゝ事瀧の如し、然れども立ちたる矢なも抜かず、流るゝ血をも拭ひ給はず、數皮の上に立ちながら大盃を三度傾けさせ給へば、小寺相模四尺三寸の太刀の鋒に敵の首をさし貫きて、宮の御前にかしこまり、戈鋌劍戰を降

らす事電光の如くなり、磐石岩を飛す事春の雨に相同じ、然りさはいへども、天帝の身には近づくか、修羅かれが爲めに破らるゝ、はやしを掲げて舞ひたる有様は、漢楚の鴻門に會せし時、楚の項伯と項莊とが、劍を抜きて舞ひしに、樊噲庭に立ちながら帷幕をかくけて項王を睨みし勢も、かくやと覺ゆるばかりなり、村上彦四郎義光、鎧に立處の矢十六筋、枯野に残る冬草の、風に吹きたる如くに折り懸けて、宮の御前に參りて申しけるは、大手の一の木戸、いふがひなく攻め破られつる間、二の木戸に支へて、數刻相戦ひ候ひつる處に、御所中の御酒宴の聲、すまましく聞候ひつるにつきて參りて候、敵既にかさに取り上げて、御方の氣の疲れ候ひぬれば此城にて功を立てん事、今は叶はじと覺候、未敵の勢を餘所へ廻し候はれは、一方より打ち破りて、一先づ落ちて御覽あるべしと存候、但し跡に残り留りて、戦ふ兵なくば、御所の落させ給ふものなりと心得て、敵いづくまでもつゞきて、追懸け進らせんと覺候へば、恐ある事にて候へども、召されて候鎧の御鏡直垂と御物具を賜はりて、御鏡の字を冒して敵を欺き、御命に代り進らせ候はんと申しければ宮いかでかざる事あるべきぞ死なば一所にてこそ仰せられけるを、義光かかるあさましき御事や候、僕の高祖榮陽に圍れし時、紀信高祖の眞似をして楚を欺かんを乞ひしをば、高祖是を許し給ひ候はずやとて、御鏡の上帯を解き奉れば、宮げにもとや思召しけん、御物具直垂を脱ぎかへさせ給ひて、我若し生きたらば汝が後生を吊ふべし、共に敵の手にかゝらば其途までも同じ岐に伴ふべしと仰せられて御涙を流させ給ひながら、勝手手の明神の御前を南に向ひて落させ給ふ、義光二の木戸高櫓ののぼり、遙かに見送り奉り、宮の御後影幽かに隔らせ給ひぬるを見て、今はかうと思ひければ、櫓のさまの板を切り落ちば、身をあらはにして大音聲を揚げて名のりけるは後醍醐天皇第三の皇子、一品兵部卿親王尊仁、逆臣のために亡され、恨を泉下に報せんために、只今自害する有様見置きて、汝等が武運忽に盡きて、腹を切らんとする時の手本にせよといふまに、鎧を脱ぎて櫓より下へ投げおとし、鎧の直垂の袴ばかりに、練貫の二小袖を押固脱ぎて、さく清らげなる膚に刀をつき立て、左の脇より右のろば腹まで一文字に掻き切りて、腸腑みて櫓の板になげつけ、太刀をくはへて、うつろしになりてぞ伏したりける、大手勝手の手を見、すはや大塔宮の御自害あるは、我先に御首を賜はらんとて四方の圓を解きて一所に集る、其間に宮は引き遠へて、天の河へぞ落ちさせ給ひけり。

- 鞠の場に移し植なん三吉野の四本のさくら面影にして
 飛白井雅章
 嚴關奪得錦旗明 芳野抛來緋甲輕 不見中興何用恨 假王徽號唱王名 大沼枕山
 藏王窟下四株櫻 各自花開一樣明 聞說王孫張樂日 樹邊時聽鳳皇聲 荒井公廉

威徳天神社

藏王堂の側にありて吉野八大神祠の一なり、天慶四年八月一日、日藏上人、金峰山の筈の岩窟にて假死のうちに延喜帝の臨幸に逢ひ奉り、菅公の廟を建て化導利生を専らにすべしとの勅宣ありければ上人具に承りて堅く領狀申すと思へば同十二日蘇生し、此處に廟を建て、菅公を祀ると云ふ、扶桑略記元亨釋書にも天慶四年沙門道賢(日藏上人)の菅公を祀りて禮拜したる由見ゆ。

稻荷社

藏王堂の石段の東傍にあり、延元元年十二月、後醍醐天皇南遷し給ひし時、導き奉りし稻荷を祀る。

吉野拾遺 後醍醐帝花山院をひろかに出御ならせ給ひて大和のかたへおもむかせ給ひけるに、いさくらき夜なりければ、御供にさふらひける人々いかにせんさわひあへるをきかせ給ひて、こまはいつくのほごにやまたづねさせ給ひふれば、忠房の侍従(千種忠顯男)いなりの御社の前にころま奏し給へば、御歌「むげ珠のくらきやみちまよふなり、われにかきなんみつのもとし火」さて伏し拜ませたまひければ、御社の上より、いさあかき雲一むら立出で来て、臨幸の道なてらこおくりて、やまの内山にいらせ給へば、雲は金御嶽(吉野山)の上にて消失にけりまさしく御供に侍りて見こまにころ。

臺駄天山

吉野三山(章駄天山、御影山、聖天山)の一にして、眺望佳なり、昔此處に、章駄天明神の社ありしを以て此名あり、

頂上に故宇智吉野郡長玉置高長の碑あり、明治二十二年玉置郡長十津川巡視の際、大洪水に遭ひ斃れしかば、郡民其の徳を表彰せんがため、こゝに其の碑を建つ。

東南院

當院は金峰山寺の一院にして、天臺宗山門派に屬す、役小角の開基にかゝり、累代高德の師の輩出したる名利なり、中興日圓上人求法のために入唐し、唐廷の歸依を得て、經卷法器を賜はり、歸朝後有縁の社寺に寄贈せらる、金峰山什寶中唐鈴も其の一なり。

後醍醐天皇の侍從僧聖尋土人は、關白大臣鷹司基忠の男にして、延元元年、天皇に隨從して吉野に入り、當院の住職となる後敵手に捕へられ、下野の獄屋につながる。

吉水神社

(吉野八景の一 吉水の庭月)

祭神後醍醐天皇。外に楠正成、僧宗信

元吉水院と稱し、去今一千二百有餘年前、天武帝の白鳳年中、役君小角休息の庵室につきて創立す、金峰山寺僧派の僧坊たりしが、明治八年三月五日吉水神社と改稱し、今村社たり。寺院餘りに廣大ならざれど其の社格上位に屢し、常に金峰山寺一編の住したる所なりき。

文治元年十一月十七日、源義經吉野に入るや竊かに此院に隠る。當時の住僧は俠氣にして、隠匿よく努めしも遂に吉

野大衆の知る處となり、頼朝の爲めに之を捕へんとせしかば逗留僅かに五日間遁れて中院谷に居したりしも、惡僧尙も追跡して止まざりければ、佐藤忠信を残して之を拒がしめ、義經多武峰藤屋十字坊に走る。故に義經御座の間、辨慶思案の間、義經の腹巻、辨慶の太刀、忠信の兜といふあり。

延元元年十二月二十一日、後醍醐天皇花山院を逃れ出で給ひて、吉野山に遷幸ありし時、初めて此處に入らせられ、金輪王寺と共に吉野廷の行宮となし給へり。

後醍醐天皇御製

花にねてよしや吉野の吉水のまくらのもとに石はしる音

之れ當時の御製にして、枕の下に石走る音といふは、王座の下籤越しに聞ゆる泉湯谷の水音なり。延元の昔畏くも天皇此處に於て、逆賊討滅の御企をたて給ひて淋しくこの潺々たる溪流を聞き給へり。今行宮を訪ふて等しくこの水音を聞くもの、誰か感慨を深くせざらん。尙御宸翰祈之文、兩界曼茶羅、色紙、竹之文臺硯箱、金輪王寺茶入、樂器、樂譜、年中行事等の御物は往年の御有様を偲ばる。

文錄三年二月廿七日、豊臣秀吉は關白秀次、徳川家康、浮田秀家、前田利家、伊達政宗等五千入を率ゐて、花を吉野に賞せしとき、秀吉此處に宿泊し、觀櫻五日間、能樂あり、茶湯あり、歌會ありて其の豪遊蓋し此時を以て最とす、故に桃山百雙外豊公の寄贈物あり。

社務所即ち元僧坊は、桁行十四間梁行六間にして、單層入母屋吉連格子枋板葺なり。大正四年特別保護建造物に編入す、而して其の建築物の前の部分は、吉野朝以前の鎌倉建築に屬し、住宅建築として本邦稀に存するものなり。其の特

徴としては柱の面の廣きこと、肘木の異なること、天井板の遺鈔を使用したること、各間取の廣きこと、釘隠、敷居鴨居の狀況等異れり。建築物の後方、即ち寶物陳列所及書院は、皆桃山時代の改築にして、豊公觀櫻の前年になりたるものなり、而して書院の床、連棚、御帳臺構(納所構)は、其の構造金具等甚だ優秀にして、明かに桃山時代豪華の風を發揮し、殊に其の御帳臺構の如きは我國最古の標本たりとす。

門内に辨慶の力釘あり、庭園狭小なれども雅趣に富み、竹林院の群芳園と共に、當山中の雙美なり、小高き所を聖天山とす。

當院に宗信といふ高僧あり、法印に叙せらる、元弘元年護良親王の吉野に據り給ふや、宗信等之を助く、城陷るに及び、宗信親王に従ひて逃れ、亂平けて又當寺に歸り、延元元年十二月、後醍醐天皇花山院を出で、吉野山に入り給ふや、宗信吉野衆徒を語らひ、藏王堂に集會し、若大衆三百餘人甲冑を帶して御迎に參り、遂に陣を吉野に止めさせ給ふにいたれり、延元四年八月、帝崩御せらるるに及びて、衆情沮敗して退散隱遁の念ありしかば宗信大に之を激勵し、御遺勅に任せて後村上帝を御位につけまわらせ、關ヶへ給旨を下さるべし、身不肖と雖も宗信ある間は、當山に於て又何の御怖畏か候べきと申しければ、諸卿皆實にもこれに従ひぬ、吉野廷の久しき勢威を保ちしもの、宗信の力興りて大なりと知るべし、傳へいふ延元帝皇女を降嫁し、一子を生めり、即ち體の字を賜りて尊壽丸といふ。

後醍醐帝延元二年春正月の末、法印に給ひける御歌に

みよしのの山の山守、こさはん今いくかありて花はさきなん

宗信答へて

花さかん風はいつも白雲の居るをしるべにみよしのの山

寶物

1、後醍醐天皇御宸翰祈之文(圖寶、紙本長九寸八分幅一尺五寸、文云、いのりの事がやうに承り候かへすく人して申候は喜

- び入候備正の房にも同七御事と申され候はゞ只今ちさこりみだしたる事と申され候以上あら／＼かし、
- 2、同帝御宸筆兩界曼陀羅、双幅(紺地彩色、畫面長一尺七寸五分巾一尺四寸三分、畫は小野文親の筆にして後醍醐天皇之に兩部の梵字ハ御宸筆あらせられたるものなり明德甲戌六月云々の裏書あり)
 - 3、同帝御製和歌一葉(紙地、あふここのむなしき空のうき雲はゆくへもしらぬ眺めをぞする。箱に寶曆十二年藤堂元甫の銘あり)
 - 4、同帝御物竹文臺(長一尺九寸三分幅一尺一寸三分高三寸五分、全部竹の節なし、裏は漆布張、側面螺鈿、銅金具付)
 - 5、同帝御物竹硯箱(長九寸四分半、幅三寸八分半、高三寸一分、各内部黒塗、竹の面は美麗なる螺鈿をなす)
 - 6、同帝御自作金輪寺茶入三個(藤の葛材、外木地内黒塗高三寸二分半、口徑二寸七分、高二寸六分半、口徑二寸二分、高二寸五分半、口徑二寸)
 - 7、同帝御物茄子形茶入(蓋象牙、寶磁器、高二寸三分、胴周七寸三分、口徑六分五厘)
 - 8、同帝御物三五中録一卷(長三丈幅九寸七分、卷第二催馬樂上、律歌琵琶黃銅調を記す)
 - 9、同帝御物業記一冊(和裝本、種々の樂記の名稱、使用法を記載す)
 - 10、同帝御物石硯(縦五寸三分、横三寸四分、厚七分半、硯の裏に龍玉の二字を銘し後醍醐帝の御宸筆といふ)
 - 11、吉野朝御綸旨(吉野朝より當院に下し賜ひしものにして正平、弘和、元中、明德にいたる十四葉を一巻に綴れり)
 - 12、御所年中行事(二條爲世筆、長五丈、幅一尺五分、正月元旦より十二月末日にいたるもの、其他合計四百六十七項に亘り、實に國家の重寶なり。)
- 本書奥云 文治五年二月之比申請大納言殿御本所書寫也、同二月十八日書之

- 13、坊領紛失證文(紙地表裝墨書一卷、長八尺九寸、幅六寸二分、卷中蓋飾多く所々被毀汚染すれど、建武年間以前の坊領、及元弘の役に於ける賊軍放火狼籍の状況を窺ひ知るべく、誠に貴重の寶物なり)
 - 14、尊秀王御物新葉和歌集(和裝綴本墨書上下各一冊、下卷奥云、十月十三日謹上二條少將殿、右少辨實茂)
 - 15、楠氏系圖(紙地表裝一卷、敬遠天皇難波親王より諸兄に至り、從四位少納言正演、皇后宮權亮從五位正富にいたる。)
 - 16、水戸光圀禮狀(奉書墨書一通、義公大日本史編纂の節當院の文書記録等信用の禮狀なり)
 - 17、佐竹石見守書(二通同上)
 - 18、色々威腹巻(國寶、源義經所用、黒小札五段成、但上三段赤紫、茶絲、下二段黒革、垂五段、但上三段黒革下二段赤白茶絲、七枚付胸板、押付板、脇板各牡丹獅子染革張、金具銅鍍金、喉輪黒漆垂一段、胸前高九寸七分、垂長九寸二分、喉輪幅六寸。)
 - 19、十一面觀音畫像(絹本紺地金泥極彩色表裝)
 - 20、本居宣長吉野歌(紙地表裝本居宣長自書自贊歌曰、神世より尊き山といでましの宮しかしげん三吉野の山)
- 其 他
- 一、職原抄(傳後村上帝御物)
 - 一、稱讚淨土佛攝受經
 - 一、十三佛畫像(傳惠心僧部)
 - 一、銅像毘沙門天(傳補正成所持)
 - 一、千體地藏及其厨子(小野篁の畫あり)
 - 一、新侍賢門院家集
 - 一、源氏物語系圖
 - 一、關山國師畫三幅對
 - 一、役君小角木像及脇士
 - 一、龍門寺古瓦

- 一、大海形茶入(秀吉寄附)
- 一、同上朝顔金屏風(同上)
- 一、足利、桃山、徳川時代の古文書等

此外金峰神社の寶物此處に陣列せるを以て之を擧ぐ。

- 一、桃山百雙金屏風(同上)
- 一、猩々毛陣蓑(傳大塔宮御所用)

1、鍍金經筒(國寶、寛弘四年、藤原道長一族を率ゐて、金峰山上に參詣奉納せるものなり、元録四年發掘。銅鍍金、蓋の外側面に梵字を彫り筒の側面に祈願文を鐫り底に伴延助と記す、中に紺紙金泥の經切あり、筒高一尺一寸五分、口徑五寸二分、銘云。南瞻部洲大日本國左大臣正二位藤原朝臣道長。百日深齋率信心道俗若干人。以寛弘四年秋八月。上金峰山。以手自奉書寫妙法蓮華經一部八卷。無量義經觀音經各一卷。阿彌陀經一卷。彌勒上生生成佛經各一卷。般若心經一卷。各十五卷。納之銅匣埋于金峯。其上立金銅燈檠。奉常燈。況此之道俗若干人。或有以香花手足與此善者。或有以翰墨工藝從此奉者。南無教主釋迦王權現知見證明願興神方圓滿。弟子願法界衆生依此津梁。皆結見佛聞法之緣。弟子道長敬白。寛弘四年丁未八月十一日

- 2、矢筒(傳楠木正成所用、木製金銀地、菊薄蒔繪、印籠蓋、尻金具銀製長三尺二寸三分、上部幅三寸二分、横一寸五分、下部幅二寸三分、横一寸四分)
- 3、後醍醐天皇御宸翰御散の文(紙地表裝卷物紙面長一尺五寸、幅八寸六分五厘)
- 4、同帝御宸翰サテマスノ文(紙地表裝掛軸紙面九寸二分、幅一尺五寸二分)
- 5、後小松天皇御宸筆(紙地表裝掛軸紙面長九寸五分、幅一尺五寸二分)
- 6、後深草天皇御宸筆(同上、長一尺一分、幅一尺六寸五分)
- 7、後水尾東山靈(元三帝御宸筆和歌(紙地表裝卷物紙面長各一尺六寸、幅一尺五分)

- 8、源義輝墨印帳(征夷大將軍花押あり紙地)
- 9、豊臣秀長墨印帳(秀長の花押あり次に金峰山寺伽藍爲建立諸國有勳進度之由尤可然者也、天正十五年十一月十九日と記せり紙地)
- 10、村上義光所用鐵鐙(正方形にして一邊三寸五分厚一分半、五本穿堵裏に南無阿彌陀佛と彫抜を爲せる類少き鐙にして重寶たり)
- 11、後醍醐天皇御物御獄丸筆(管中に大治三年八月十二日井樹院内別處定前住僧慶俊作と銘せり、長一尺五寸五分)
- 12、同帝御物國軸丸筆(管中に藏王堂と銘せり大いさ御獄丸に同じ)
- 13、同帝御物七文字笛及同上高麗笛
- 14、同帝御物羊皮太鼓(扇中に德治三年七月二十五日作之新造十一面之内と銘せり徑二尺一分、厚一尺三分)
- 15、青磁大瓶花三個(藏王堂にあるものと同じ一個は無疵二個は大疵あり)

其 他

- 一、青蓮院尊 親王御筆廿一代和歌集外題
- 一、吉野拾遺(法橋國世所寫)
- 一、張良の軍書
- 一、一休墨跡事理之文
- 一、神農像
- 一、鍍金經筒破片及鍍銀經筒
- 一、源氏供養の卷(玄惠法印作)
- 一、竹林院弓之書及秘書
- 一、理源大師墨跡
- 一、蓮花鴛鳥唐畫
- 一、天之半鐙(秀吉寄附)
- 一、古鏡(傳三國傳來)

一、陣羽織(傳大塔宮所用)
一、琵琶一個(傳輝丸所持)

一、兜一個(傳佐藤忠信所用)
一、湯呑一個(傳大塔宮御所用)等

神代よりたふとき山といでましの宮しろしけむみよしの山	本居宣長			
満山絲肉嘔唾裏	千里來投七十翁	吟步故尋幽處往	落花寂々古皇宮	頼杏坪
中興偉業亂如麻	雪暖行宮萬朵花	遺憾南巡駕不返	帝家幾歲僧家	東久世通禧
哀禽叫斷落花風	興廢三朝一夢中	日暮賞春人散盡	獨留山月照幽宮	依田川百川
黃屋南奔王氣分	峰巒重疊駐孤軍	中原戈甲無清日	北闕鐘虞只白雲	伊藤東涯
神器何能祚衰運	藥人誰復答殊勳	漁郎不知興亡事	一棹刺過箕水漬	
陰雲斷續夕陽斜	一望芳山雪似花	可惜地形規模小	皇居也是野僧家	中井櫻洲
爰襄到處帶輿圖	探到芳山感有餘	偶遇老僧談往事	始知爾若是皇居	富岡鐵齋
老木陰森苔逕荒	鶯愁花泣總傷神	春深來吊南朝跡	古寺無人鎖夕陽	江島天江
帝子嬰城々不完	忠臣自屠膽其肝	行宮四世五十載	吉水院古苔色寒	細川十洲
攀坂度橋移端笄	穿過花影幾重々	偶然吉水門前望	萬朵紅雲又一峰	宮原易安
花擁行宮春酒馨	芳山深處小朝廷	當初一夢終成織	南木之陰御座寧	大槻盤溪

吉野 鑛泉

吉水神社前を右に下れば三丁ばかりにして、含鐵炭酸泉あり、皮膚病等に効あり。

元 櫻本坊 (西本願寺説教所)

大海人皇子吉野に遁れて、日雄殿にひませし折、一冬櫻花嬌研春三月の如きを夢み、翌朝前の山を見給ふに、一老櫻
艶然として開けり、皇子怪しみ、之を角乘(役君小角の高弟)に判せしめ給ふ。角乘答へて曰く、櫻花は花中の王なり、
これ殿下來春天下に光榮を發し給ふの兆なり云々と、果して其の言の如かりしかば、白鳳二年九月、勅して養の夢後に
見給ひし櫻樹の下に、一寺を創營し、角乘の子角仁に給ひ、櫻本坊(五臺寺)と稱し、金峰山中錚々たるものなりしが
明治十二年本派本願寺の説教所となる、當山有數の巨刹にして、書院の壁畫、御帳臺構機等内部の裝飾壯麗なり、寺内
に聖德太子の立像を安置す。

井 光 神 社

元櫻本坊の門を入れれば右側に一小社詞あり井光神社といふ、神武天皇御東征の時、出で迎へたる吉野首の祖井氷鹿(井
光)を祀る、昔は毎年壯嚴なる祭典を行ひしといふ、是より東南方二丁計井光山の麓に井光の井あり。井氷鹿の居住せ
し所なり。

日本書紀「神武天皇親率輕兵、至吉野時、有人出自井中、光而有尾、天皇問之曰、汝何人、對曰臣是國神名曰井光、此則吉野首部
始祖也。」

古事記 從其八咫鳥之後幸行者、到吉野河之河尻時、作寮有取魚人、爾天神御子問汝者誰也、答曰僕者國神名謂管持之子（此者阿陀之鸕養之祖）從其地幸行者、生尾人自井出來、其井有光、爾問汝者誰也、答曰僕者國神名謂井水鹿（此者吉野首等祖也）即入其山之、亦遇生尾人、此人押分廳而出來、爾問汝者誰也、答曰僕者國神名謂石押分之子、今聞天神御子幸行、故參向耳（此者吉野國樞之祖）

傳云神武此南巡 偶見倭傀出井人 人々去井存春舜々 千年誰吊井光神

荒井公廉

式内吉野山口神社

祭神

忍穗耳命、大山祇命、久々迺智命、木花咲耶姬命、吾虫命、葉野姬命の諸神を合祀す。

舊記には吉野の首、井光の祖受靈命を祀る所といへり。

俗に勝手神社といひ、吉野八大神祠の一なり。舊記には孝安天皇の第六年に創立し、神功皇后の第四十四年、再び此宮を補治し歸敬をなせりとあり、清和天皇貞觀元年正月廿七日甲申奉_レ授_二從五位下吉野山口神正五位下_一。同九月八日庚申吉野山口神遣_レ使奉_レ幣爲_二風雨_一祈焉。朱雀天皇天慶三年正月六日詔授_二正四位_一。後醍醐天皇延元二年正月十日詔授_二正二位_一。

延喜式神名帳に、吉野山口神社大、月次新嘗に列り。案上官幣に預る。又同臨時祭の條に、吉野山口神社一座祈雨祭八十五座並大の内に列り、祈雨の祭幣に預る。本殿桁行八間梁行二間。

正平の役、後村上帝、金輪寺御所を立ち出で、賀名生に落させ給ふとき、社前にてこの度の戦にことせよ、

頼む甲斐なきにつけても誓ひてし勝手の神の名こそをしけれ

源義經の妾靜、この境内に於て、吉野業徒のために、法樂の舞を演じたる所と云ふ、社前に一小峰ありて御影山といふ、吉野三山の一にして頂上に吉野八大神祠の一なる佐拋明神を祭れり、今は取り崩されて僅かに形ばかりの小祠を残すのみ此所を右へとれば木戸阪を通じ下市、洞川に至る。

袖振山

勝手神社の背後、老樹鬱茂せる山にして、八雲御抄に袖振山は吉野にありといへるは即ち是なり。天智天皇の十年十月大海人皇子大友皇子を避け、當山日雄殿に入らせられし折、十一月三日、神樂を勝手の祠前に奏し、親しく琴をとつて、御製の國詩を歌はせ給へば、忽ち雲中に霓裳羽衣の天女あり、髣髴として祠後の山に現れ、袖を翻して舞ふこと五回、然も帝獨之を視て、從者皆視ること能はざりしといふ。帝直ちに御製あり。

おと女子が乙女さひすもから玉をたもとにまきておと女さひすも

袖振山の名之より起る惣國風土記本朝月令江家次第等にはこの天女降臨の記事を掲げ五節舞の起源と爲せり、祠林采要抄には袖振山は神女降臨の所にして誠に由來ある者といへり、又吉野拾遺には後醍醐天皇豐明の節會に袖振山の記事を偲ばせ給ひて御歌ありける由見ゆ。

本朝月令 五節舞者淨御原天皇之所製也、相傳天皇幸吉野宮、日暮彈琴有興、俄爾之間前岫之下雲氣忽起、疑如高

唐神女、髣髴應曲而舞、獨入天關他人無見、舉袖五變、故謂之五節、其歌曰、乎度綿度茂豈度綿左備須茂可良多萬

乎多茂度邇麻岐底乎度綿左備須茂。

關林采葉抄 袖振山八雲御抄云吉野にありと云々、神女降臨の所誠に有由來者也、仍乙女等とよめり、神女群降と聞たり云々。

天女子が袖振山の瑞籬の久しき世より思ひそめてき

天女子がかさしの櫻咲きにけり袖振山にかゝるしら雲

柿本人丸
爲氏

吉野拾遺 後醍醐帝、豐明の節會をさせ給へるに、あまりにかたばかりなるありさまを、おぼしなげかせ給ひけるに、袖振山のまぢかく見わたれば。

袖かへす天津をさめもおもひいでよしの宮のむかしがたりを

と打なげかさ給ひて、月ふくる迄おほしましけるに、御夢さもなく、袖ふる山の上より、しら雲のたなびきて南殿の御庭の冬がれし櫓の木末にさざまりけるに、うれかさばかりおぼしやらせ給へるに、おさめ姿打ちしほれたるが

かへしなば雨さやふらむあはれしる天津をさめの袖のげしきを

さなくなく詠じて雲がくればるを、御覽じおくらせ給ひて、御心ばうげにわたらせ給ひし御ありさま、わすれがたくこ

袖振山は天武天皇の御琴を弾し給ひしに天人あま降りて乙女子の

歌をうたひ袖を翻ひしたる所なれば

飛白井雅章

昔をもちかへすやいかに乙女子が花の袖ふる山風ぞ吹く

吉野山千度やちたびかへり見て我は袖ふる人ならなくに

本居宣長

靜女長留千歳名、遺芳又見滿山櫻、飛花髣髴羽衣舞、更想源郎踏雪行

齋藤拙堂

武帝仙游昔敲琴、天娥飛袖下花陰、不見霓裳羽衣田、空留蝶舞與鶯吟

荒井公廉

大日寺

山口神社の前、木戸坂を僅かに下れば、右方に小堂あり、大日寺といふ、金峰山寺の一院なりしが、今は荒廢して往時の面影を存するなし。元本尊五智如來は藤原時代の傑作にして、國寶となり、今奈良博物館に存す、安阿彌作と傳ふ。大日如來の座像、木像高三尺二寸五分蓮臺高二尺三寸六分金箔押、光背高四尺四寸舟形にして唐草透彫金箔押、金唐草毛彫の金具を附す

脇士、阿彌陀釋迦阿闍世の座像(各木像高各一尺七寸三分、蓮臺高一尺五寸三分、高背高二尺七寸五分、形式大日如來と同じ)

村上義隆の墓

山口神社より木戸阪を下りて五町餘、老櫻群生中にあり。義隆は義光の子なり、大塔宮吉野に敗れ、高野山に落ち給ふ時、義隆父の命により、宮に従ひ奉りしが、五百餘の敵兵、後に逼りければ、義隆この吉野隠の險崖に踏み止まりて敵を拒ぎ、遂に此處に討死す時に年十八才。宮は虎口を遁れて、高野山に落ちさせ給ふ。

太平記 南より廻りける吉野執行が勢五百餘騎、多年の案内者なれば、道を要りさかに廻りて、打ち留め奉らんと取り籠むる、村上義光が子息兵衛藏人義隆は、父が自害しつる時、共に腹を切らんと、二の木戸の櫓の下まで馳せ來りたりけるを、父大いに諫めて、父子の義はさる事ならんも、且く生きて宮の御先途を見はて進らせよと、庭訓を授けければ、力なくしばらくの命を延べて宮の御供にぞ候ひける、落ち行く道の軍、事既に急にして討死せずば宮落得させ給はじと覺ければ、義隆只一人踏み留りて

追ひてかかる敵の馬の蹄踏まされては切りすゑ、平頭切りては刃落させ、九折なる細道に五百餘騎の敵を相受けて、半時ばかりぞ交へける。義隆即石の如くなり、雖其身金鐵ならざれば、敵の取巻きて射ける矢に、義隆既に十餘箇所の疵を被りてけり、死ぬるまでも猶敵の手にかゝらじと思ひけん、小竹一隊ありける中へ走り入りて、腹かき切りて死にけり。村上父子が敵を防ぎ討死しける其間に、官は虎口の死を御遺れありて、高野山へぞ落ちさせ給ふ。

北兵蟻附擁高城 堅守謀彈半死生 父子同時同致命 永令後世憶忠精

父子勤王護錦旗 乾坤半壁置支 行人淚落千山底 兩片空留萬古碑

荒井公廉

大江誠堂

村上義隆之墓誌

吉野山有村上君之墓二焉其在嶺樂師者爲父君彦四郎其在南溪山腹者爲郎君藏人徵之諸書則確乎中古誤立父君碑於南溪過者或疑焉勢人松井延基偶一調歎曰何者致此凶莽二君之神必不安矣吾當改製之因謀諸山司伐藥莽平嶮崖壘樹一碑題其面曰藏人村上君義隆之墓石偉工良大勝舊觀足以發藏人氏光輝矣舊碑移之嶺樂師而使各得其所焉夫當大塔王嬰守之時賊兵肉薄城將陷二君死以脫 王於虎口 王之他日能鑿滅醜安靖 宸襟者皆出於二君之勳績也其忠勇大節戴存竹帛然 天榮一獻 王赤薨于讒毒政權再歸將家者五百餘年矣二君 城遂將湮晦不亦悲哉方今 王政復舊百僚賢明漸有繼絕興廢之舉異時此墓亦應有於表之議願延基爲之嚆矢餘深感之慨然遂書 時明治三年庚午秋八月也

翠亭竺全撰

大北温書

中の千本

山口神社より岐路を左にとれば、三丁餘にして櫻樹の多きところ中の千本といふ。近時日露役の戦勝記念櫻樹林の、この地を相して設けらるゝありて愈其の美を加へ、花時天麗に吼ゆる塔尾山の松柏に映じ、其の美觀敢て下の千本にゆつらず。

年々に花にかくるゝ吉野山

みよしのは花より外の色もなし櫻を山の姿にはして

三吉野のよしをよく見つ今暫しさくら花見は何をかおもはん

よしの山梢の花を見し日よりこゝろは身にもそはずなりにき

落花满地雪如崩 春盡峰情誰亦登 不識有人向深夜 獨行踏月拜山陵

澗季其如薄俗何 延元陵畔亦絃歌 看花只道芳山好 看到芳山感更多

歸禽影盡望氣氤 花滿峰巒日漸曛 吊古行行迷處所 香雲穿去復香雲

古帝陵邊欲夕曛 萬花開盡望氣氤 劍先旌影空歸夢 觸眼春山只白雲

松崖竹塢踏春行 鶯語綿綿弄午晴 最是陵前風景好 紅霞深鎖洩溪聲

櫻稱遺愛發餘薰 芳野峰頭幾簇雲 天步艱難懷往事 仙蹤縹緲愜曾聞

寺門僧去夕陽冷 陵樹鳥啼香雪紛 萬斛春愁消不得 併將舊感意可云

複嶺層嵐雲耶雪 櫻花千樹萬樹白 芳霧撲衣春濛々

花影籠空日將夕 我來賞花兼吊古 古陵無人花無主

永 機

佐々木弘綱

本居宣長

西行法師

依田學海

江馬天江

神山鳳陽

近藤南州

土屋鳳州

福原周峰

谷 鐵 臣

想見賊氛犯闕來 忠臣血灑落花雨 今日四海共陽和
對花對山莫嘆嗟 山是天皇駐蹕跡 花是吾邦第一花

如意輪寺 (吉野八景之一塔尾の暮鐘)

中の千本花の吹雪の散るあたり、羊腸の坂をのぼれば塔尾山如意輪寺に至る。當寺は延喜年間日藏上人の開基にして、本堂桁行六間半、梁行五間半。本尊は後醍醐天皇の御信仰厚かりし如意輪觀音にして、屢々御幸し給ひ、吉野朝の勅願所とし給へり。寺内に壯嚴なる御靈殿あり後醍醐帝御自作といひ傳ふる同帝の御木像(高一尺一寸七分)を安置し奉る。境内には辨内侍の至情塚、正行髻塚、藤本鐵石の碑あり。左方稍高きところに多寶塔址あり。正平二年十二月二十七日楠正行の一族郎黨百四十餘人、塔尾の御陵に参拜して後姓名を記し『かへらじとかねて思へば梓弓なきかすに入る名をぞとむる』の辭世を止めたる所といひ傳へ、近時其の再建にかゝれり。境内六百餘坪、海拔一千三百尺。

寶物

- 1、藏王權現の木像、一軀(國寶鎌倉時代の傑作、像高二尺七寸五分着色)
- 2、同上厨子、一個(高さ四尺七寸横二尺四寸五分、扉に巨勢金岡の筆吉野八社明神の畫、扉の上に 後醍醐帝御製七言律詩 御宸筆あり)
- 3、醍醐月前爲教主、金峰嵐底現藏王、班荆禪客安居砌、緇素群焉滿願望、慈風扇境四海渴、感霧晴心六道差、碧樹集雲飛鸞嶺、黃金敷地契龍華、風月證心文道祖、火雷宥忿法陀尊、日藏聖感瑞夢處、大政天爲教海繁、兩山

梯峻古仙蹟、四流船浮檀化神、行積僧祇監末世、威政鬼類縛其身、

- 3、阿彌陀如來の木像一軀(天平時代之作、立像高三尺二寸蓋座九重)
 - 4、廿五菩薩來迎畫圖二幅(畫工傑作、傳惠心僧都筆、絹地金泥金線微綠地繪子、渡念神、本地縱四尺一寸四分横一尺九寸六分)
 - 5、釋迦文殊普賢畫圖三幅(傳光嚴司筆絹地本地縱三尺八寸一分横一尺九寸一分)
- 以上は重なるものにして其他

- 一、かへらじとの塔扉(長六尺一寸幅二尺三寸、黒塗面朱の吉野塗)
- 一、腹卷(傳小楠公所用)
- 一、腹卷及馬鞍(同上)
- 一、後醍醐天皇畫像(菊地容齋筆)
- 一、廿五條竹布袈裟(傳日藏上人所用)
- 古陵松柏吼天驚 山寺尋春春寂寥 眉雪老僧時歇帶 落花深處說南朝 藤井竹外
- 孤城落日舊山河 唯有烟嵐映碧波 古寺門扉鏤痕在 老僧示我梓弓歌 中井櫻洲
- 吉野山さかぬ櫻をふり捨て、なき數に入る身こそつらけれ 藤田東湖
- かへらじと征矢もてかきし言の葉に千世をつらぬく君がま心 富岡百鍊
- 楠公永訣先皇墓 鬼錄上名淚幾行 留得龜扉絕命語 忠肝義膽斷人腸 荒井公廉
- 陰崖雲暗水聲寒 吊古芳花山事闌 徒倚延元陵畔路 風光雖好不堪看 賴支峰

補左衛門尉墓塚碑

延元陵下古僧堂	滿地春泥白似霜	百練鍛成忠孝鍊	題名字々與花香	西村天囚
青山滿目恨難消	陵樹花飛春寂寥	猶有殘僧守蘭若	御容掛壁說南朝	鱧松塘
杏澗山蹊曳杖行	村南村北滿紅櫻	古陵雨靜花空落	度寺雲寒鳥自鳴	久我通久
志士千秋悲帝業	老僧一夜說皇京	南朝無限傷心事	付與溪流鳴咽聲	
辭訣階前獨出宮	歌留屏面不歸躬	人生自古誰無死	忠孝双全是此公	大島荻南
鵲語泉聲觸處悲	古陵雲樹聚成團	千秋留得英雄淚	暮雨淒涼瀝客衣	生駒膽山

正平三年正月 東駕在芳野賊將高師直大舉來寇補左衛門尉與其族黨百四十三人詣行宮陛辭畢拜訣 後醍醐帝入如意輪寺各截髮題姓名於壁然後進戰不克皆死今茲乙丑之秋益自備中歸鄉將登談山遂遊芳山會津田臣正建石欲以表左衛門尉墓塚來請文益益曰餘且遊二山子姑待之已而登談山謁藤原大織冠廟規模宏敞殿宇壯麗使人起敬及登芳山首問其所謂瘞醫處在蔓艸寒烟中過者或不知也於是益低徊不能去潸然泣下曰左衛門尉與大織冠皆 王朝蓋臣也而大織冠斃大難於一擊回天日於將墜位極人臣子孫蔓衍廟食百世左衛門尉則討賊不克以身殉難南風不競宗族殆盡今欲其求遺跡而不可之左衛門尉得嗚呼何其不幸異也已益拭淚以爲其不幸雖異其功未嘗不同也夫大織冠回天之績偉矣然比尉父子之大節彪炳與日月并懸存綱常於無窮者未知其孰愈故曰其不幸雖異其功未嘗不同也益既歸正臣復來促乃舉前言告之且曰方今夷狄猖獗

九重膏肝士効力 國家之秋也事成則爲大織冠廟食百世不成則爲左衛門尉死節垂名於竹帛豈非大丈夫平日之至願乎

正臣雖然起日是可以表左衛門尉墓塚矣遂書以與之正臣字仲相稱監物世仕紀藩補中將十八世之裔云

慶應紀元冬十月

大和處士 森田益撰

伊勢 三井高敏書

東京 廣群鶴鐫

辨內侍 內侍は右少辨後基の女にして、和歌をよくす。父は北條氏のために鶴原岡に斬られ、母をさへ難きほどに失ひければ、三位行氏の許に養はれけるが後、後醍醐後村上の兩帝に仕へき、高師直かれてよりこの内侍を戀ひ慕ひければ、或年龍計をもつて吉野の宮より内侍を奪はしめしに、補正行途にこれを見て、内侍を救ひ、吉野に参りてかくと奏しければ帝これ賞して、内侍を正行に賜はんとせり、正行畏りて「とても世にながらふべくもあらぬ身の假のちざりないかま結ばん」と奏して辭したりけり。内侍は正行の志に感じて「大君に仕へ奉るも今日よりは心にうむる墨染の袖」と返して龍門岳の南麓なる龍門寺に入りぬ。正平四年正月五日、正行四條殿にて討死せりと聞きて、乃ち尼となりて、正行の菩提を吊ひきこぞ今西蓮華聖院の境内にある聖尼庵は内侍の住みたりと所なるべしと。

鐵石先生招魂碑

先生眞金字某自號鐵石、備前入本姓片山氏、考諱某君之第三子也、出嗣藤本氏、爲池田伊豫守家臣、壯歲致仕周遊四方、足跡殆遍海内、初寓浪華又移伏水、後去住京師、先生資性沈毅容貌峭嶮、好講輅略、又善書畫、常歎皇威之不振、患外寇之日迫、慨然以天下之事、爲己任矣、文久三年癸亥秋九月、與同志五十餘人、奉侍從中山公忠光、舉兵於大和十津川、先生實爲之總裁、幕府遣兵來攻、二十五日大戰于鷲家村、遂死之時四十有八、其臨戰也從容賦國詩以精神貫盤石自況云、後五年大政復古雖賴先帝在天之靈、抑亦先生首唱之功與有力焉、朝廷嘉其忠烈、爲追祀之藩侯亦賜粟米若干於其家、嗚呼先生千載之名金石不朽、而其殘骸今猶湮沒於寒烟荒草之中、悲夫、亡兄椒會與先生交誼尤厚、以故善亦識先生、因遙表其墓、又與同志相謀、建碑於吉野之山、而招魂於九原之下、其詞曰

魂兮歸來、南山之陲、大節永勳、一片之碑。

明治年十四龍次辛巳秋九月

平安中沼之舞家額越後村山善謹識

塔尾御陵

如意輪寺より右石階をのぼれば、松柏の亭々たる處、塔尾御陵あり。後醍醐帝當山に御遷幸の後、只管寂慮を朝敵征討に憫ませ給ひ、暫も御心の安ませ給ふ折もなく、時の至るを待ち給ひし甲斐もあらせられず、延元四年八月九日より御不豫の御事あり、次第に重らせ給ひけるが、委細に論言を残し給ひて、右の御手に御劍を按しさせながら、十六夜の月と共に雲隠れ給ふ。寶算五十二、御遺詔により御形を改めず、山鳩色の御衣を召させ、鳥羽院より傳はらせ給ひける三掬といふ靈劍を玉體に添はせこゝえ北向に葬り奉る。謹で拜すれば、建武中興の英主、萬世盡きざるの御怨恨と共にこゝに眠らせ給ふ。萬感交々至り夕を送る鐘の音に、ありし昔を追懐すれば、手自顫ひ、胸自躍り、感慨の涙滂沱として禁する能はざるべし。

聖徳餘聞 かくて吉野にては、塔尾の御陵へも御参拜あらせられしが、此の御陵への路は、深き谷に沿へる險しき山阪にて水の音は聞ねながら雲深くしてさやかにも見えず、谷の對岸には、老杉生ひ茂りて晝なほ暗く、如何なる獸が棲むらむと物凄きこと言ふばかりなし、供奉の人人すら息喘きて、さもすれば休むがちなを、陛下は、ものさもし給はず、徐に玉歩を移して、御陵に登り着かせられ御禮拜の事終りて、やがて行宮に歸らせたまひぬ。夜に入りて、香川大夫御前に伺候し、「今日はしも、御疲勞さ、ころ恐察し奉る。さるにても、御陵の路をば、如何に御覽じたまひつる」と申上げしに、「實にも路の險しきは聞きしに勝れり。さはれ此の度ば、彼の御陵の参拜を許さして來つるなり。塔尾の御靈のいまかりし御時の事なと思へば、路の險しきなどは言ふべきにあらず。既に禮拜を終へぬれば、今は心歸しくて、なかに身の疲をも覺はず」と宣はせたまひきこなん。

昭憲皇太後の塔尾の御陵にまうで給はんとするをよませ給ひける

よし野山みさ、さちかくなりぬらんちりくる花も打しめりつゝ

御村上帝御製

思ひ出つる苔のみかけかきくもる涙のしづく袖の上の月

九重の玉の臺も夢なれや苔の下にし君を思へば

よしの山花に染めつる我か袖もみはかと聞けばうちぬらしけり

山禽叫斷夜寥々 無限春風恨未消 露臥延元陵下月 滿身花影夢南朝

今來古往事茫茫 石馬無聲抔土荒 春入櫻花滿山白 南朝天子御魂香

拜延元帝山陵

山寺東隅一丘横、謂是延元舊園塋、麒麟埋沒荒草合、杉括交加怪禽鳴、

鼎湖龍去千秋事、今日追尋萬感萃、可惜建武中興日、雙虎吞噬鴻業墜、

九重不知維城蹶、藤公掛冠楠公沒、君王誰與支傾厦、狼巢熊窟重播越、

恢復壯圖揚末命、無那南風竟不競、神靈三傳歷數終、統紀百世誰能正、

陳壽屈蜀溫公惑、待吾紫陽筆始直、會開常藩修正史、未播人間恨無極、

在天之靈小慰不、芳山風色猶自愁、陵戸唯留一僧舍、伏臘蕭條廢掃修、

君王勇智超前古、瓊瑜不掩亦天數、自從統合二百年、四海鋒鏑尙旁午、

新待賢門院

頼 惟 柔

河 野 鐵 兜

梁 川 星 巖

中 井 積 善

遺胄孤臣終敗亡、宿奸大猾亦塵土、幸遇元和僊武時、雖無眞主有眞輔
王室今挾却墜威、將軍小心戒跋扈、宗社既安黎首蘇、應殺重泉按劍怒、
浪華草茅臣積善、稽顙陵前淚如雨、長句聊審滿胸憤、詩史敢言追老杜、

謁延元陵詩

賴山陽

千株萬株花如雪、中有一邱蟲羣越、松邪柏邪錯杉檜、蟠根互護天龍骨、樵蘇相戒不敢觸、風怒雲攫山欲裂、
可惜威靈尙如此、當時不能殄蛇豕、遊人不知何帝陵、玉魚光閤落花裡、吾難莫豈亦王臣、曾私帶淚修前史、
芻蕘敢欲慰帝魄、陳詞陵前獨拜跪、維昔天潢弄狡童、天之曆數在君躬、勵精誓雪列聖恥、此心上可質蒼穹、
人神均敵王所懷、頽日回輪紅再中、大政豈盡乖處置、再造再傾本難事、唯使君操心常如元弘初、不憂邦有
足利、願命按劍語空雄一杯長埋萬冀志、雖然五十年間萬生靈、爲誰膏鋒尸縱橫、臣正成、死君在時心已明、
臣義貞、懷君遺詔亦結纒、此輩忠肝累々及孫仍盡爲君王死、不與賊共戴天生、天定賊巢亦終覆、死骨委犬
犬不食、天家依舊傳日嗣、自祖宗視無南北、中興偉舉警百世、陰制姦雄不肆毒、噫嘻君王可瞑目、
萬人買醉攪芳叢、感慨誰能與我同、恨殺殘紅飛向北、延元陵上落花風、
花蹤無處著啼鵲、寺寺樓臺鬧戲娛、杉檜參天春日黑、荒陵誰弔後醍醐、
藏王堂外彩霞蒸、如意輪邊香霧凝、花似有志巡幸處、翠紅千帳護山陵、
群峰環繞綠峻嶒、櫻樹如雲護帝陵、正統連綿千萬古、南山芳躋曾不崩、

賴杏坪

賴山陽

篠崎小竹

三島中州

遺恨千年墮淚歌 君王按劍嘆蹉跎 延元陵古花心冷 況又春來風雨多
滿地櫻雲春常寒 孤筇吊古八禪關 延元陵下春花立 拭淚遙看金剛山
一目妖婉魅聖襟 春風遺恨落花深 無情最是陵前鳥 猶學當時簧舌音
峰巒高處月初升 四顧凄凄情不勝 不是尋常賞春客 夜深花外拜山陵
古陵雲暗晚蕭々 瀾水聲中喬木搖 想見餘威猶果霽 滿山風雨鎖南朝
來入市郎山半層 南朝遺跡記吾曾 白模糊裡花如海 中有萬櫻圍古陵

西村天囚

渡邊東民

寺田晚香

依田學海

田部苔園

福原周峰

世泰親王の御墓

塔尾陵の傍にあり、後龜山天皇の第一の皇子世泰親王を葬る。

芳野離宮址

袖振山の背後一丁ばかり右に取れば日雄殿趾あり、天智天皇の十年、大海人皇子大友皇子を避けて此處に入らせ給ひ、
後長く離宮とし、持統、文武の諸帝相次いで行幸し給へり。

天武天皇御製

みよし野の耳我のみねに時なくぞ雪はふりける、間なくぞ雨はふりける、その雪のとき無きがごと其の雨の間

なきがごと、隈もおちず思ひつゝぞくる、其の山道を

よき人のよしとよく見てよしといひし

吉野よく見よよき人よくみ

武帝行宮是日雄 捨爲佛寺玉玲瓏 不知廢蹟幾年所 花下空蕪太古風

荒井公廉

喜藏院

勝手神社より宮坂を上れば左側に喜藏院あり、金峰山寺の一院にして承和年間智證大師圓珍入峰行の際、その創立にかゝり、聖護院門跡に屬し、本山三十六先達の一にして本山派修驗入峰の着到所とす。文化年間、光格天皇の皇弟盈仁親王、御入峰の御時、當院に參籠せらる。

優婆塞がおこなひ置きしあととへばよしのの寺にあり明の月

盈仁親王

寛文年間熊澤蕃山此寺に潛匿せり。

此春は吉野の山の山守となりこそ知れ花の心を

了介

櫻本坊

喜藏院より一町ばかり上にあり、元密場院と稱し金峰山寺滿堂派の錚々たるものなりき。明治八年神佛判別の際、本坊を廢して櫻本坊となし、山内廢寺の諸佛を、本坊中の灌頂堂(桁行六間梁行七間)高祖堂(三間四面)及聖天堂(二間半

四面)に集め祀る、故に之より諸佛堂の名あり。推古朝以來各時代の佛像百數十を羅列して一小博物館の趣あり、中に名作のもの多し。

花供法會式の御供は毎年四月十日此處にて擣く、千本搗とて甚だ奇觀なり。

寶物

- 1、釋迦如來の座像(圓寶、推古式銅質鍍金、高八寸七分、重量一貫百兩手指先磨滅し、前垂たゞきたる跡あり)
- 2、地藏菩薩の座像(圓寶、藤原式初期、木質、高二尺七寸三分、兩肩破損、兩手、光背臺座皆なし白毫剝落して木地著はる)
- 3、役君小角の座像(圓寶、鎌倉式木質彩色、高四尺四寸、臺座木造岩にして高一尺六寸之に腰をかゝ)
- 4、普賢菩薩の座像(弘仁式木質高一尺五寸、本體燻煤し白毫相取れてなし、寶冠鍍金、光背木造舟形にして唐草透彫金箔押、高二尺二寸)
- 5、藥師如來の立像(藤原式木質無着色、高三尺二寸八分、光背木造輪形金箔押)
- 6、阿彌陀如來の立像(藤原式末、木質金箔押、高三尺五寸三分、蓮臺木造青蓮形、光背舟形木造蓮花の上に満月形と雲形の透彫金箔押高四尺八寸。)
- 7、大日如來の座像(藤原式末、木質高二尺五寸、本體燻煤し白毫相剝落す、寶冠胸飾鍍金、唐草透彫、兩脇瑠璃なし、蓮花形、荷葉金箔押、光背渦卷雲形浮彫金箔押高三尺一寸五分)
- 8、役君小角の母の座像(鎌倉式、木質二尺二寸七分、彩色剝落、臺木造岩形、その裏に役行者母公臺岩、元録二年奥之院別當眞言宗徒寶塔院主勢與代さい代と書す)

- 9、阿彌陀如來座像、脇土觀音勢至立像（鎌倉式末、本尊高四尺五寸、兩脇土高四尺二寸五分、木尊光背唐草浮彫高八尺六寸、寸徑七尺七寸、蓮臺下臺高三尺二寸六分全部金箔押）
 - 10、十一面觀世音菩薩の立像（藤原式初期、木質高三尺一寸、本體本地右方天衣なし、蟲入破損、寶冠及胸飾鍍金）
 - 11、厨子扉一面（銅質鍍金、表面二王、裏面大自左天彫刻、縦九寸一分、横三寸五分、重量百三十匁）
- 右は重なるものなれど其他之を略す。

竹林院

嵯峨天皇の弘仁九年（紀元一四七八年）弘法大師大峰登山の節、來拜者の爲め、精舎をこゝに營み椿山寺と稱せしが、後常樂山竹林院と改む、醍醐天皇の延喜十六年、三好善行當寺に入りて薙髮し、日藏上人といふ、上人は京都の産謙議大夫殿中監清行の弟なり道賢と號し又御嶽上人とも云ふ、義經逃れて當山に蟄居せる時、賴朝より追討書を當院に送る。正親町帝の御宇、當院二十三代尊祐法師は、天資豪邁にして力量衆に絶し、射術を能くし、世に大弓法師と云ふ、竹林流の一派を立つ。

明治二十三年四月二十四日昭憲皇太后吉野山に行啓の御時、當院を以て行在所となし給ふ庭園は群芳園と稱し、天正年間豐公の命により千利休の築く所にして、後細川幽齋の再築にかゝり、園域廣大にして、閑靜築山のたゞすまひ、水石の配置をもしろく、老櫻其間に介在して陽春を飾り、杜鵑新緑の間に點々して初夏を彩る、又當山の一美觀たるを失はず。

寶物

- 1、米目の屏風一雙（團寶、六曲屏金箔押、白粉を以て格子形を劃す、總長五尺七寸二分、幅各扇二尺一寸二分、各隻に慶長十九年五山兼試文稿十五枚宛貼付し、四方框際に縁彩せる桐紋あり）
- 2、地藏菩薩の立像（藤原式、木質黒塗高三尺二寸五分、胸飾唐草透彫、光背木造輪形、臺高一尺）
- 3、大弓（長七尺九寸、中央周四寸三分、梓に兩面竹を張り）

小山神社

竹林院より半町許にして小山神社あり、梵天帝釋天王を祀る、依て前の橋を天皇橋といふ、左の坂は即ち猿曳坂にして、其の上の小高き丘を火見櫓といふ。道を左にとれば、上千本を経て喜佐谷、櫻木神社、宮瀧、丹生川上神社にいたる。

忠僧宗信の墓

猿曳坂を上ること一丁、左方に松杉稍々茂れる一小丘ありて阜頭三個の石塔並ぶ、その中央こそ即ち稀世の忠僧宗信の墓なり。里人今尚吉水院の一つ墓といふ（吉水神社宗信の記事参照）

布引の櫻

猿曳坂の邊にある櫻をいふ、昔は高根より谷底迄一面に咲き揃ひ、恰も布を引きたる如く見えければ此の名ありとぞ。
飛鳥井雅章

御幸之芝雨師 (吉野八景之一 雨師新緑)

辰之尾坂をのぼれば、老杉巨榿の中に小祠あり、元こゝに猿觀音堂(夢違の觀音)ありて吉野八大神祠の一なりしが、
明治八年之を廢す、後醍醐帝延元四年五月雨の頃、御遊山の御途次こゝまで御幸し給ひけるに、空のけしきいとあやし
くなり、雨篠つくばかりなりければ、御堂に暫く立ちやすらはせ給ひて、

こゝはなほ丹生の社に程近いのらば晴れよ五月雨の空
と詠じ給ひしに、雨忽ち止み空晴れわたり、日影うらゝかになりしかば、供奉の月卿雲客等、帝の御徳のいみじきに
感じあへりとなん。

因に丹生川上神社は川上村迫と南芳野村丹生とにあり、共に官幣大社にして茲より三里餘。延喜式神名帳に、名神大
月次新嘗に列り、案上國幣に傾る。

丹生川近雨師祠 祈雨禱晴所與知 關道國風使神感 先皇五月止霖雨 荒井公廉

上千本

小山神社より岐路を左にとること五丁にして上千本に至る、下中千本と共に櫻樹多く、萬朶の芳雲は四周の濃緑に和

し、彩烟谷を埋むるあたり吉野全山は浮島の如く現はれ、棚曳く淡霞に隠現する處其の眺いふ可からず。

花を見てなぐさむよりは三吉野の山をうき世の外といふらむ

藤原爲家

尋ねゆく道も櫻をみよしの、花のさかりの奥ぞゆかしき

藤原爲基

吉野山たかねの櫻さき初めばかゝらんものが花のうすくも

西行法師

櫻花さきぬと見えて吉野山ありしにもあらぬ雲ぞかゝれる

藤原爲道

一目千株花盡開 滿前唯見白皚々 近聞人語不知處 聲自香雲團裏來

菅茶山

横川覺範の首塚

雨師より三丁上れば路傍に横川覺範の首塚あり、覺範は當山妙覺院の僧なり、文治の昔源義經吉野を逃れて多武峰に
落ちんとせし時、覺範衆徒と共に之を追撃せしかば、義經の臣佐藤忠信踏止まりて之を中院谷(右手の谷)に射る、衆徒
その首をこゝに埋む。

この坂を子守坂又獅子尾坂ともいふ、首塚の稍下方に大將軍址あり

瀧櫻

元獅子尾坂より上千本の邊にいたる谷間一面に老櫻群生して、恰も瀑布の懸れるが如く、壯觀を極めしが、今は其の
面影の存するなし。

いかなれば水なき空の瀧櫻花のなみ立つみよしの山
咲き匂ふ花のよそめは立ちよりて見るにもまさる瀧のしら糸
山おろしに亂れて花の散りけるを岩はなれたる瀧とみたれば
雲井より落ちて音なきぬの引の瀧つさくらをけふ見つるかな

飛鳥井雅章
本居宣長
西行法師
氷室長翁

花 矢 倉

獅子尾坂をのぼりつむる處花矢倉あり、佐藤忠信が其の主義經のため、吉野衆徒に當りて防ぎ矢を射しところなり、
岐路を左に下れば喜佐谷宮瀧に至る。

從凶壯士爲君憂 拒虎進狼這谷頭 若使忠臣無血戰 當年那得免俘囚

荒井公廉

雲 井 櫻

花矢倉の傍にあり、後醍醐帝の御製により著名の櫻なりしか、今は枯幹を残し其の實生の後繼樹僅かに生育す此邊吉
野大半を雙眸に集め、眺望甚だ佳なり。海拔貳千尺。

後醍醐帝の御製

こゝにても雲井の櫻咲きにけりたゞかりそめの宿とおもへど
世々を経て向の山の花の名に残る雲井のあととはふりにき

本居宣長

雲にまがふ花のもとにて眺むればおほろに月は見ゆるなりけれ

西行法師

世 尊 寺 址

花矢倉より半町上る右側にあり、當寺は其の創立舊く、古來有名のものなりしが、明治八年廢寺となる、惜しむ可き
號、本尊の釋迦如來はもと欽明天皇の十四年、和泉の海中にありし放光樟樹を以てつくられしといふ、其後世尊寺燒失
のことあり今存するものは高六尺八寸鎌倉式なれど其の作素朴にして高雄なり、今は藏王堂に納む(藏王堂記事参照)此
處鷲尾山と呼ぶ古鐘あり、吉野三郎と稱す、銘に曰く、

保延七年辛酉普勸花衆奉鑄之

執行法橋春春并滿山同心、大勸進聖人道寂鑄、散位丹治、、、御位、、師散位廣田、、同、、保延六年十二月
三日右京大夫兼播磨守平朝臣忠盛奉施入熟銅廿町三在大和國城上郡内六師庄八條、里廿三坪内是爲禪定聖靈往生
極樂先穴證大菩提乃至法界平等利益

蔭子橋季兼

記安任

僧法、

永曆元年庚辰九月循依其聲以、所奉、所入熟銅六萬三千斤、執行仁、、勸進聖人延、、大、、、義鑄師、、

三度鑄定 鑄物師散位船是守

金峰山寺洪鐘龍頭鑄續

寛元三年甲辰四月九日

穴師寄進田之代水山三段奉入立在大和國吉野郡藥師寺庄之内字牛房田谷田一段 大和國吉野郡藥師寺庄之内字井上田一段 大和國葛上郡宇馬屋戸西邊田一段奉入立仍貴賤靈等皆成佛道乃至法界衆生平等利矣

勸進聖願因緣佛

鷺の山御法の庭に散る花をよしの嶺の嵐にぞ見る

京極良經

頼政の月見ところや五月盡

寶井其角

佛像石 (人丸塚)

三郎の鐘の傍に方形の佛像石あり里人傳へて人丸塚と呼ぶ、又昔時建立の寶篋塔の一部なりともいふ、その何れか詳かならざれども古色約一千年に及び方形の四方に彫せる佛像は漸く磨滅し去らんとせるを以て 大正四年吉野山小學校同窓會は雨露を妨がため縣補助を得て屋根葺を爲せり。

式内吉野水分神社

祭神

右 天萬栲幡千千姬命、瓊々杵命、玉依姬命

正面 天水分神

左 高皇產靈神、少名彥命、御子神

水分山の峰にありて俗に子守明神と稱し、吉野八大神祠の一なり。創立年月詳ならず。文武天皇二年夏四月戊午奉于芳野水分峰神二祈雨也。仁明天皇承和七年冬十月己酉奉授三元位水分神從五位下。清和天皇貞觀元年正月廿七日甲申奉授三從五位下吉野水分神正五位下。同九月八日庚申吉野水分神云々等遣使奉幣爲風雨二祈焉。後醍醐天皇延元二年正月十日授正二位。

水分神は古事記に、速秋津日子速秋津比賣二神因三河海一持別而生神云々次天之水分神次國之水分神(訓分云久麻理)云々とあるもの此神にして、久麻理は分配の義、田畑の爲めに水を分ち施し給ふ神なり。延喜式神名帳に吉野水分神社大、月次、新嘗に列り案上國幣に預る。又祈年月次の兩祭には別して此神に其の由の祝詞を宣し給へり。

慶長三年八月、豐太閤社殿改造中棄去せられしを以て、同五年秀頼奉行建部内匠頭光重に命じ、神殿以下一切の建物を改造せしめ同九年九月十一日落成す、現今の社殿即之なり。

- 本殿 桁行九間、梁行每社二間、流造、檜皮葺
- 拜殿 桁行十間、梁間三間、單層、入母屋、檜皮葺
- 幣殿 桁行六間、梁間四間、單層、切妻、柿葺
- 棟門 三間一戸、入母屋、柿葺
- 回廊 桁行三間、梁間二間、單層、切妻、杉皮葺

就中本殿は最も特色を有す、即ち古代の神社建築は、祭神一柱毎に社殿を異にせるも、本殿は獨り其趣を異にし、祭神七座を三つの社殿(中の社殿は一座、左右各三座)に奉祀せり、而もこの三殿を一棟に聯結したるものにして、甚だ珍

らしきものなりとす、殊に其の形式構造は、遺憾なく桃山時代の特徴を發揮し、壯麗なる色彩、精巧なる金具は高麗なる時代を表現し、我國神社建築特有のものたるのみならず、桃山時代を代表する第一流の建築なり、尙社殿に釣せる芋の葉唐草燈籠其他神輿、湯釜、柴燈、襖等に至る迄皆秀麗寄進にして、よく時代の特徴を表せり。

- 1、御輿(長一丈三尺、幅五尺一寸、高七尺五寸、胴内一丈一尺七寸、臺周一丈六尺八寸。板札の銘云、夫神依人敬增威人依神繼添運故爲天下泰平息災延命子孫繁昌豐朝臣秀賴卿御再興了。時奉行建部内匠頭光重。慶長九年甲辰九月十一日)
 - 2、芋の葉唐草燈籠一對(銅鍍金、高一尺九寸、胴周二尺九寸、銘云、金峰山子守社、秀賴卿御造宮、慶長九年正月吉日。御奉行建部内匠頭光重)
 - 3、湯釜(鐵製、高二尺九寸、口徑一尺七寸三分、及周八尺七寸五分、銘云、金峰山子守社湯釜豐朝臣秀賴卿再興御建立。奉行建部内匠頭、慶長九甲辰歲)
 - 4、柴燈二基(各鐵製、一個は高三尺六寸五分、口徑一尺九寸、胴周二尺九寸、臺周九尺、胴に龍の浮模様あり、銘云、金峰社子守社柴燈豐朝臣秀賴卿再興御建立、奉行建部内匠頭、慶長九甲辰歲三月吉日。一個は高四尺四寸、口徑三尺五分、胴周三尺四寸、台周九尺二寸五分、同上の銘の終りに大丁下田善右衛門と記せり)
 - 5、子守大明神像(木質、馬上、桃山時代稀有のものなり高一尺五寸五分馬共二尺六寸五分)
 - 6、西行法師像(木質座像、高二尺、銘云、奉納天明五乙巳春、願主江戸南鍛冶町大井八右衛門定恒、細工人同中橋登田慶運)
 - 7、水盤(青銅、正方形一邊長一尺五寸、高三寸九分、銘云、金峰山子守宮御寶前、延德二年庚戌七月吉日)
- 幼兒の守護神として古來靈驗顯著にして、秀賴及本居宣長はこの神の祈子なりと。毎年四月三日、こゝに御田植式あり。昔は九月十九日に盛なる祭典ありき。
- 拜殿内三十六歌仙の額は、道光親王の御筆にして、狩野永徳の畫くところなりと。

圖 賣

天高栲幡千千姫命坐像(木造) 一 軀
 玉依姫命坐像(木造) 一 軀

神さふる岩根こゝしき三芳野の水分山を見ればかなしも
 もろこひに今はなるらん御子守の神のしるしはありとこそきけ
 三芳野の水分山の瀧津瀬も末はひとつのなかななりけり
 いかにして心の末をあらはさんかけてちかひし御子守の神
 ちゝはゝのむかし思へは袖ぬれぬみくまり山に雨は降ねと
 ことなくも守らせたまへふるさに残す子守の神ならは神

萬葉集
 清少納言
 壽證法師
 衣笠内大臣
 本居宣長
 陳子

午頭天王の社址

水分神社より上二丁許にして巨杉一本高く天を摩するところ、午頭天王の社址あり、八大神祠の一にして昔時鄙屬城の鎮守として信仰厚く、老樹鬱茂神威の崇嚴を加へしが、今や其の面影もなく櫻樹若杉中に點在して春秋の美趣を添ふるのみ。

高城山

城山又は鉢伏山ともいふ、元弘二年大塔宮の躑躅城を築き給ひし處にして當時其の用水をひきし樋道及井は今尙存して當時を偲ぶ可し、頂上は展望大に開けて高取山を掠めて國中平坦地方を望む可く、又遠く高野諸山と對し、理源大師の大蛇を退治せしといふ百螺岳は近く指呼の間にあり。海拔貳千六百尺。

みよしのの高城の山に白雲はゆきはばかりて棚曳きて見ゆ
高き山ふかき谷こそあはれなれさあらぬ人は音信もせず

釋道觀
慈鎮

金峯神社

祭神、金山毘古神

高城山より松並木の間をたどりて、行くこと八町許りにして、巨杉老繪畫尙暗きところ金峯神社あり、又金精明神ともいふ。吉野八大神祠の隨一にして、金峰總領の地主神なり。

創立年代不詳、文德天皇仁壽二年十一月辛丑特加從三位、同三年六月己巳以大和國金峰神預明神、同齋衡元年六月甲寅朔以大和國金峰神預於相嘗月次並神今食祭也。清和天皇貞觀元年正月二十七日甲申授從三位勳八等金峰神並正三位、後醍醐天皇延元二年正月授正二位、とあり、延喜式神名帳に金峰神社名神、大、月次、相嘗、新嘗に列り、案上の官幣に預る。

すべて金山毘古神は枯樹の義にして生物の枯死を防ぐの神なり、故に清和天皇貞觀元年八月三日丙戌、大雨遣從五位下行備後權介藤原朝臣山陰、外從五位下行陰陽權助兼陰陽博士滋岳朝臣川人等、於大和國吉野郡高山令修祭禮、

兼仲舒祭法云、螟賊害五穀之時、於害食之州縣內清淨處解之、故用此法、前年命陰陽寮於城北船岳修此祭、今亦於此修之、蓋擇清淨之處。又同五年三月甲午朔、勅從五位下行陰陽權助兼陰陽博士播磨權大椽滋岳朝臣川人、率大屬從八位上早部利貞并陰陽師等向大和國吉野郡高山修祭事、預攘虫害也とある、當社に於て行はれたるなるべし。

本殿は桁行三間、梁行二間、小高き山腹にあり、拜殿は暴風の爲めに破壊して存せず、境内三千三十坪境外又所有地多し。社務所の左釘拔門より小道を下れば蹴拔の塔あり、元鎌倉時代の建築にして工作甚だ佳なりしが明治三十九年九月二十日焼失し、今其の址に建塔したれど、古雅の存するなきは惜むべし。文治年間源義經、この塔内に隠れしが、敵勢近き來りしかば、逃れて宮瀧を経て西行へ落ちたりと、故に隠れ塔といふ。

高城山よりこのあたりといたる一面を遙か谷と稱し櫻樹甚だ多かりしが今は伐木して杉檜林と化せり。
高根より程もはるか谷うけて立つきたる花の白雲
本居宣長
吉野山雲をはかりに尋ね入りてこゝろに花を見るかな
西行法師
地主明神世所崇 古來作鎮護金峰 升平今日府錢朽 不許盜鑄有鄧通
荒井公廉

寶塔院の址

寶塔院は一に飯高山安禪寺と稱し俗に吉野奥之院といふ、初め桓武天皇の御世高算上人(報恩)此處に一塔を建て、後真平年中僧相應其の側に佛殿を設くといふ。吉野郡舊記に曰く、桓武帝於長岡宮患沈痾坐醫萬法皆不驗也時高算上人在

吉野山救召使則算加持之帝病頓癒故欲感號僧報恩依頼勅而建此塔也即小堂高算之影也。又曰く安禪寺藏王堂有相應和尚開基也。境内東西四町四十五間南北七町貳拾間安禪寺藏王堂、多寶塔、奥之院本堂四方正面堂、鐘樓堂、山王七社、熊野三社、伊勢多賀、荒神、辨天、八幡の諸社塔堂伽藍老杉の轟々たる間雲中に聳立し、丹生の妙、建築彫刻の技を極めたりしが、寒煙荒草、今や其基石だになく、僅に苔むす石垣により其の跡を偲はるのみ、本尊金剛藏王權現の木像及安禪明王の木像は共に藏王堂に安置す。(藏王堂記事参照)昔時この附近は實に吉野の中心地にして今尙附近の森林中に石垣の墨々たるを見るべく石藏(岩倉)千軒鎌倉千軒の名を存す。

元享釋書 釋報恩十五歲離家、三十入吉野山、持觀世音咒。四五載間早得靈感、天平勝寶四年 上不豫 勅恩加持帝疾乃愈 時恩爲沙彌、勅得名報恩、辭反本山、勤修益甚、桓武帝在長岡宮、嬰沈痾、腹結如纏繩、眼暗似隔紗、巫醫萬方皆不効、帝誓曰、佛法力痊朕疾、朕願勤弘傳、不然者佛法無驗、在國何益、聽者震恐、恩應詔入宮、閉目持根本咒五十遍、宮中大動、大悲菩薩顯形殿上、上疾立痊、上感激宣問曰、法師蘊何行業、對曰久居深山誦觀自在根本咒、上起禮恩、給賞甚渥、不幾潛反山、上遣內臣、昇鳳輦追迎于路、恩謝而不乘徒步返宮云々。

上方幽舜古禪坊 仰止藏王一文強 賽客自能來慚愧 時聞金鼓響雲脚 荒井公康

青根峯 (吉野八景の一 青根の鬚雪)

金峰神社の東南五丁ばかりの高峰をいふ。翠巒深谷眼下に集まり。眺望尤も佳なり。

吉野川岩瀬の波によるや花青根が峰に消ゆる白雲

源 頼 政

みよし野の青根が峰のこけむしろ離かおりけんたてぬきなしに
佐保姫の遊ぶところは奥山の青根が峰の苔のむしろに

萬 葉 集
公 實

苔清水 (吉野八景の一 苔清水の時雨)

寶塔院址より下ること四丁許にして潺々の響あり、苔臺巖を封し冷水微に滴る之を苔清水といひ又とくとくの清水ともいふ。

とくとくと落つる岩間の苔清水汲みほす程もなき住居なか
あさくともよしや又汲む人もあらし我にことたる山の井の水
露とくくこころ見に浮世すすかはや

西 行 法 師
同 人
芭 蕉

西行庵、奥千本

苔清水より半町ばかりにして西行庵あり、この處人籬遙に隔り、幽邃閑寂にして一別天地をなす、建久の昔西行法師が俗塵をさけて三歳の星霜を猿鹿を友とし幽棲せしも實にやと思はる、庵内に西行法師の木像ありしが今は水分神社に藏す、この邊の櫻を總稱して奥の千本といふ、土地高ければ花期従ておそく、麓の方青葉となりて後開く。

吉野山花のさかりは限りなし青葉の奥もなほさかりにて
吉野山やがていでじと思ふ身を花ちりなばと人やまつらん

西 行 法 師
同 人

今よりは花見人につたへおかん世のかれつゝ山に住まんと

吉野山去年のしをりの道かへてまだ見ぬ方の花を尋ねん

願くは花のもとにて春死なんそのきさらきのも月のころ

西行庵遺趾在芳山極深處

樵人牧豎語行公 風雨滿山春已空 我春殘碑不辭遠 行三十里落花中

佳境幽居遠世嘩 白茅一束結成家 西公禪味真堪羨 觀月觀雲又觀花

西行法師
同人
藤井竹外
荒井公廉

野隱紀行

獨吉野の奥にたどりけるに、まごに山深く白雲峰に重なり、煙雨谷を埋んで山賊の家さころさころにちいさく西に木を伐る音
東にひびき、院々の鐘の聲こもるの底にこたふ、昔より此の山に入りて世を忘れたる人のおほくは詩にのがれ歌にかくる、いで
やもろこしの廣山さ云はんも又むべならずや、ある坊に一夜をかりて

碓打てわれにきかせよや坊か妻

四上人の草の庵のあさは奥の院より石の方二町許りわけ入る程衆人の通ふ道のみわつかにありてさかしま谷をへたていこたふさ
し彼さくくくの清水はむかしにかはらすと見えて今もさくくくさ雪落ける

露さくくくこころ見に浮世すこかはや

凍さけて華に汲干す清水かな
若し是れ扶桑に伯夷あらば必ず口を嗽かんもしこれ許由に告げば耳を洗はん

金峰山上

金峰山上は其山麓吉野山と共に金峰山寺修験派の唯一本山にして、今を距る一千二百餘年前、天智天皇の四年、役君
小角之を開きて、天下無比の靈場とす、當時我國佛教の渡來日尙淺く、安心を得るものなく、強惡にして化し難き衆生
のみ天下に滿つ、行者輒ち之が濟度の大願を起し、不食不飢の仙法を學び、纔かに草花樹皮を以て飢を醫し、無人絶境
の淨域を擇び、高嶽奇峰全國到る處に止錫して苦修したるも、曾て無塵の靈境に逢著せざりしに、偶々金峰山上に登り、
其の滿願屈竟の靈地たるを發見し、吉野山麓を一の行場と定め、權化の垂跡、佛影の降臨、善神の影向等の遺跡に賽し、
苦修練行、天武天皇の白鳳元年遂に金峰山頂に於て、始めて悉地成就を得、藏王權現を感得す、行者大いに歡び、敬重
奉崇し、感得の藏王權現を木に模し、一の小堂を權現湧出の岩上に建てて之を安置し（後世之を稱して湧出嶽と名づく
今の山上本堂内陣是れなり）以て難化衆生の濟度に從ふ。

行者の高弟に角仁角乘の二人あり、夙に行者に從て其の衣鉢を受く、行者入滅後二人は優婆塞小角を開祖とし、藏王
權現を本尊とし、一の法義を立て、之を弘通し、法燈を繼承し、男は優婆塞戒を女は優婆夷戒を授かり、血統相承す、
降て聖武天皇の天平年間、僧行基勅を奉じて入峰し、勅筆の經卷を埋藏するや、此時山上本堂の大の破修繕すると共に、
之を模擬して吉野藏王堂を改築し、兩堂交代して勤行せしむ、醍醐天皇の昌泰年間、聖寶僧正入峰大いに山上本堂を再
建せり、當時既に山頂に三十六坊を有せりといふ盛なりといふべし、然るに天文三年事ありて三十六坊を燒失し、後更
に六坊を建つ今の六坊是れなり。

山上三十六坊（天文三年以前）

上賣藏院 淨明院 橋本坊 惣持院

藤尾寺	菩提院	東南院	上淨土寺
妙法寺	不動寺	上辰之尾寺	中院
下寶藏院	上吉水院	吉峰坊	小鳥院
新中院	下吉水院	光明院	妙覺寺
下淨土寺	持明院	少山坊	西牛頭坊
東室院	岩本院	藥師院	南院
下辰之尾坊	一鳥院	清水寺	東院
大門坊	往生院	小松坊	中光坊

後水尾天皇の元和二年、金峰山寺塔中小松院住職木食上人、山上藏王堂の朽敗せるを嘆き天朝に奏願し、勅許を得て諸國に勸進を募り大修繕を爲す、勅に曰く『大峰山上藏王堂舍破壞之由候專佛法紹隆勳再興之功尤可爲神妙者也者依天氣執達如件、元和二年九月十四日、左少辨花押』と、後又元祿四年、更に十方信施の淨財を以て新建す、現今の堂宇即ち是にして、桁行九間、梁行八間、屋根總銅板葺なり。堂内の一隅に古鐘あり長さ龍頭迄三尺三寸一分、厚さ二寸二分、徑二尺一寸八分、銘に曰く近江國佐野郡原田郷長福寺鐘、天慶七年六月二日。

光格天皇の御時役小角の徳を頌して神變大菩薩の號を賜ふ、その勅語に曰く、勅優婆塞役小角、海嶽斗數功、古今辛苦行、前超古人、後絕來者、若夫妙法明教之施四海也、非以神是僊脚之遍五方乎、是以一千年久、馨香愈遠衆生之渴仰、瓜瓞益盛、天女之靈夢不空、神龍嘉瑞爰應、因示特寵、以贈徽號、宜

稱神變大菩薩。

毎年(五月八日開扉、九月二十七日閉扉)諸國有信の僧俗、入峰參詣するもの、十數萬を數ふ、實に天下無比の靈區といふべし。

吉野山より登ること五里半、其間、新茶屋、百町、蛇原、洞辻等の茶屋ありて少憩するによし、海拔六千二百尺、巨巖怪石聳峙して、斷壁幾千仞、時に白雲騰々脚下に起りて、身は天上に在るの感あらしむ、油懸、鐘懸岩、西畷、屏風岩、体内くぐり、蟻戸渡り、平等岩、東畷等最も難所の行場なり。

峰入は官もわらぢの旅路かな
 宗 因
 大峰やよしの、おくの花の果
 會 長
 有木梯架險崖、拾而登、大巖當面、曰鐘懸衆障若、曰是可登乎、岩上偶有人、呼曰、不易登、亦可登、乃足據巖角、手執巖頭、盤行魚貫而進。

金峯山創草記

扶桑略記別神祇集云第六代孝安天皇第六年甲午金峰山創草云云、宣化天皇御宇僧聽三年戊午八月十九日靈鷲山已角崩落乘五雲而飛來

天智天皇御宇白鳳十一年辛未年正月八日役行者始登金峰山

紫磨金山記云紫磨金山在大和國治東南百餘里此山積金所成故以名緣起云行者生天竺震旦日城登處々高山行於佛法靈巖

初天生舍衛國名毘羅菩薩次生震旦國號香積仙人于時向東方以三莖黃蓮花遙散致觀念云我機緣深有可行開佛法之處當此花可落余時三莖蓮花一花落伊與國石辻千光佛淨土一莖落大和國彌勒長光佛淨土一莖落伯耆國三德山無量光佛淨土以知三所是機緣深處法靈驛之勝地也後生大日本國名曰役優婆塞云云

又云我山有佛法護持軍十九萬騎常護我山佛法衆僧我初中後夜廻院內各見住僧所行善惡給若勤修學二道者即摩頂効加護若行盜犯惡事者忽擬宛罰余時子守知見以手招給即止罰去若一度二度制止若致三度者子守不可見給余時金剛童子刑罰給也若國王傾我山時二萬騎金剛童子顯立合國王當行合戰若我山軍陳被落者不可有佛法之名號若佛法有世者我山軍陳不可被落若惡人惡王傾我山者一七日乃至三七日見我在無我山無魔畏何況人間界恣乎故我山是從往昔以來不蒙宣旨之處也但我山一千一百歲之時兵杖當起一千一百五十歲之時亦兵杖可起從此外全兵杖不可起云云

一、御代々帝王御歸依事

宇多天皇

昌泰三年七月御臨幸以助憲大法師補檢校職令致鎮護國家祈禱即御寄進五百町免相檢校最初也

朱雀院御宇 天曆七年賜七高分藥師海過官符

村上天皇御宇 天曆三年賜給四至并整師過之官符、應和三年賜讀一切雜役皆免之官符

冷泉院御宇 安和二年賜年分度者三人官符

一條院御宇 長祿三年檢校等賜藥師海過阿闍梨官符、寬弘三年賜鳥居內水田二十五町餘施入之官符

白川院 寬治六年七月御參詣十二日着御山上御宿坊、承保三年丙辰當山石藏寺被立御塔、承歷三年己未十二月二十六日御供養之勅使

右中辨、同四年庚申十二月二十四日於御塔內講摩五百日、康和三年辛巳紀伊國小倉庄御寄進

鳥羽院 長日大般若轉讀被置百口僧、長承三年比也

後醍醐法皇 下山藏王堂燒失之時依勅願被造立御鉢

一、御代々被送御宸筆并御經佛等事

天智天皇 被送觀音經奉納供養佛龕、六寸觀音像安白處觀自在芥藏

天武天皇 御劍并御護等奉納開敷花王知來續御使觀惠僧正

嵯峨天皇 御守小字經并木空三藏御本尊虛空藏菩薩、奉納毘盧傳及天王續御使阿闍梨上人、御宸筆法華經奉納普賢菩薩御使獻惠僧正

弘仁十三年五月御自筆法華經納觀自在菩薩續御使眞禪內此

仁明天皇 金剛頂經大日經增伽論五寸大日如來像金幡等奉納毘盧舍那如來藏、理趣分并五寸愛染王御鉢奉納毘里俱耶菩薩續

文德天皇 仁壽元年三月二十九日法華經十二部奉納寶幢如來續御使石藏西高上人

清和天皇 貞觀十二年庚寅二月六日御自筆法華經并法華 茶羅奉納白身觀世音菩薩續、同十六年五月御本尊并新佛等奉納佛眼母續御

使貞元上人

陽成天皇 御本尊奉納如來慈護念續御使圓珍

宇陀法皇 寬平二年五月御本尊新金三寸藥師佛并華嚴經奉納除一切靈寶菩薩續御使惟首阿闍梨

醍醐天皇 御自筆法華經奉送寶印菩薩續御使長意僧正、法華經八部奉納持金剛菩薩續御使石崎上人、御自筆法華經奉納般若波羅蜜菩薩續御使聖實僧正

村上天皇 天德元丁巳年依御示現御本尊七寸如意輪菩薩御舍利三粒法華經十六部、同二年五月一日奉納金剛華嚴續御使心空上人

白河帝 承保三年被立御願寺等事如古注之

鳥羽院 結緣灌頂并一乘寺御願等如上注之

後白河院 治承元年一乘寺并大聖寺有職被置之如右注之

一、公卿歸依之事

御堂關白道長 寬弘四年六月七日參詣于時左大臣正二位種々法施願文等有之

宇治殿賴通 寬弘四年八月參詣長和三年甲寅七月十六日于時正二位行招大納言兼春宮太夫云願文在之果如御願云云、永承七年乙丑

七月十一日參詣于時關白從一位左大臣御願文又果無違云云

後二條殿下師通 寬治二年戊午七月參詣于時內大臣正二位兼左近衛大將御願文有之、同四年八月十日參詣種々財法施有之色紙法華

經一部八卷開結心阿大般若經一部爲永代講讀被安置之願文并禮文有之承德二戊年

正二位齊信 法興院關白殿息、長和四年五月二日參詣于時正二位行振大納言兼春宮太夫願文在之

大納言信家 天喜四年七月二十四日參詣願文有之

右小辨廣業(藤原) 願文等有之

大納言俊房 承曆四年七月十二日參詣願文有之、于時正二位權大納言兼皇天春宮太夫源朝臣

大政大臣雅實 寬治二年戊辰七月二十八日參詣于時、有大將歟、康和五年癸未七月二十五日參詣同二十六日於藏王堂御前如法禮檀午自

折山樹之枝植之誓願云云、長治二年乙酉三月十四日山上洪鐘被施入之嘉承元年丙戌七月十八日參詣

右中院大臣雅定 喜承元年七月三日參詣供養物多于時少將

一、僧侶歸伏事

弘法大師

眞雅僧正 瓊瑠塔并金泥法華經安置天鼓音如讚、自筆法華經納十一面觀

眞濟僧正 大日經安置多羅菩薩讚

眞然僧正 孔雀經并三衣安置孔雀明王讚、如法經安置觀世音菩薩讚

益信僧正 六觀音安置馬頭觀音讚

聖寶僧正 山上日參大峰修行以三部經并止觀等安置念怒月狀菩薩讚、昌泰元年戊午晦日山臥于時年六十四

護命僧正 造五大尊安置降三世續五寸大威德安署大威德讚

延 禪 木像戒波羅密菩薩安置戒波羅密菩薩讚

良辨僧正 大集經并如法花經奉納般若波羅密菩薩讚

寬空僧正 金銅發意轉法輪菩薩安置發意轉法輪菩薩讚

觀修僧正 金銅五寸如意輪安置方便波羅密菩薩讚

寬朝僧正 曼荼羅二補安置波羅密讚

善珠僧正 大峰御修行願文等有之

勤操僧正 大集經奉納不空羅索讚

貞崇僧正 住鳥住寺風角寺

智證大師 大峰修行

惟首座主 佛經安殿靈真讚

長意僧正 大峰修行凡位時御經奉納寶印菩薩
 增命僧正 金銅九寸彌勒送彌勒菩薩、普賢菩薩并延命七寸像安力波羅密
 延昌法務僧正 古持經等以石上ノ上人送智波羅密
 行尊法務大僧正 大峰修行軍岩屋冬籠
 日藏上人 延喜十六年二月生年十二歲初入當山椿山寺剃髮云云入山勤修行二十六箇年委如傳
 良源大僧正 兩界安大安樂不空讚使定生上人
 源心座主 涅槃經如法經奉納虛空藏菩薩讚使隆上人
 相應和尚 三箇年安居
 淨藏賞所 安居行業
 源信僧都 寬和二年四月五日源信、明禪、微塵、覺運、嚴久、昌生、明蒙、院源等手自奉書妙法蓮華經各一卷此外道俗男女尊卑老少或書加
 一句一文一經等或加一部源安金體慶靈其上起率都婆二基又供養滿山衆僧云云下界

豊太閤芳野山登嶺記

古より觀遊の壯を極めしもの先に源頼朝の富士の巻狩あり、後に豊太閤吉野の觀櫻あり、稱して天下の二大發遊云ふ、傳へいふ
 文祿年中豊臣秀吉征韓の師を起すや、世俗未だ遠征の雄圖を解せず動もすれば疑懼を其間に挿むものさへ少からざりければ、秀吉
 一大發遊を試みて、英雄の襟度を示し、以て海内群小の膽を奮ふに如くはなごころ、やがて朝廷の輔相及び諸侯伯を率ひ觀櫻を吉野
 に恣にし、天下をして外事また憂ふるに足るものなご思はしむるに至りしと云ふ、英雄の胸中何ぞ天空海淵なるを今吉野に遺
 れる豊公登嶺記と題せる記録を抄出し敢て當年の面影を偲ばしむ
 文祿三年二月秀吉花を吉野に賞すべく出立ちぬ、相隨ふ人々公家には今出川右大臣晴季、中山樞大納言親綱、日野樞大納言顯實、

高直左衛門督水孝、左近衛備中將飛鳥井藤枝あり、武家には關白秀次、樞大納言徳川家康、樞中納言結城秀康、參議左近衛中將浮
 田秀家、同前田利家、侍從伊達政宗、内大臣織田信雄、細川二位法印玄旨を始め秀吉の股肱として羽柴樞中納言秀俊、木下大膳
 太夫、木村宗宜の外比丘尼孝藏主法眼紹巴、法印由己、法橋昌胤等にして聖護院道證法親王も此列に加はり給ひけり、因みに豊公
 大阪を出で立ちしは二月二十四日にして途次大和の當麻に淹まるもの二日、二十七日六田の橋を渡りしと誌せるによりて見ば當麻
 ・吉野との間に於、尙一日の淹留ありしか、うはさまれ秀吉此日の装ひは例の髪に小眉作らせ、鐵葉黒々口口に衝みて數多の人々
 を囁ひつ、一の阪を登れば此に風流瀟灑を極めし茶屋あり、大和中納言秀俊太閤を迎ふるが爲め殊更に仕作らひしものよし、即
 ち立ち寄りて饗應の款待を受け、下の千本、花園、櫻田、わたの尾、かくれ松、關屋の櫻など打めでつゝ

よしの山木末のはなの色々に驚かれぬるはなの曙
 關白秀次これに和して歌ひけるは 木々は花舌路は雲で三吉野のわけあかの山の春の袖かな
 其弟中納言秀俊もまた ちりちりふもよしや情まじ吉野山はなの木影の雲さなかもて
 准三后道證親王 吉野山木の本毎に關するはなは無きも花に休らふ
 右大臣晴季 櫻ちる木々の梢の錦衣て吉野の山をわけ歸るかな
 三位法印玄旨 三吉野や花は深雪と降り茂み生ひもなつまの木々の下草
 紹巴 曙の花こや見へん吉野山常盤木までもはなの嵐に
 昌胤 答へせぬはなれぞ問はん吉野山昔もかゝる春に逢ふやこ
 大納言親綱 白雪を先ふみわけて吉野山おきなを思ふはな咲けるかな
 大納言親綱 世々の春君にひかれて諸この吉野の奥の花こころ見ん
 左衛門督永孝 雲の色も春の眺めの吉野山梢のはなけふを待つらん
 中納言雅枝 乙女子か袖をしかへせ吉野山梢に晴れたる人を待つらん
 關白秀次 ひたすらにかこちもやらすらば咲雨より後の花の三吉野
 右大臣晴季 色も香も名にめで見ん自らちる櫻あれば櫻木の宮
 法印全宗 ちらば又櫻木の宮の花に來て尙奥深くはるを尋れん
 斯く互みに打誦じて各々短冊に物しられより金の鳥居仁王門を過ぎり、藏王堂に詣でしに秀俊が建てつる旅館及び舞臺あり、暫し

神の前のはな 杉むらの緑の色も推並べてあけのいかにばなや咲らん
 花の 祝 檀添ふる吉野の奥の山櫻はなの盛り萬代までも
 はなの願 吉野山はなの木立を自ら都のうちに移し置かばや
 はな散きぬ風 咲はなの散見へれ三吉野の山の外をやかざの吹くらん
 瀧の上のはな 吉野川散添ふはなの白浪に峰の雲さへ流れてぞ行く
 神の前のはな 心なき人や手折らんはなの色を宮木守なる三吉野の山
 はなの祝 吉野山千歳の後もばるを得て君が歸にはなもあらせん
 はなの願 荒増に送りきつとも春を經し花をけふ三吉野の山
 花不散風 吉野山先吹風もかすみてはなの匂ひにあげ渡るらん
 瀧の上のはな 水上のはな咲色にたき糸も唐紅をふり出すかな
 神の前のはな うつろはぬ色も更に瑞垣の久しきはるにはなもならひて
 はなの祝 うのかみのはるを思ひて行末も尚色まてのはなの三吉野

さる程に守護代木村宗宜吉野山の人々參候を停むる旨を令す、これが爲僧徒太閤に見ゆることを得ず、爲方もなくありける折節
 比丘尼孝藏王太閤の旨を受け茶を給ふべきよしを傳ふ、これにより吉水院の兒を新熊野院成慶法印、西藏院不真、知足院玄祐、新
 藏院榮範(以上天台)、先達櫻本坊良基法印、福島院快安、松室所眞水、竹林院尊頼(以上眞言)及び飯具の本善寺證順坊等出で、茶湯の
 饗を受く、總ての器具悉く黄金を以てこれを作り、豪華實に今古を空ふす、勝手の間には秀吉泰然として坐せるまゝ僧徒等畏みて
 床間の裝飾を仰ぐ能はず、茶は何人の手に立てられしは覺へずして退出せり云ふ、斯くて大室に於て警械の衣服一重、濃淺黄
 の單衣に帷衣一人に五領づゝを給ふ、僧孝藏王の旨を受け木下大膳太夫に従ひて恩を謝し、吉水院を罷り下りしが服は各々色を異
 にしけれども單衣と帷衣とは皆同色なり、綿ふくらに丈長し、二月の末なれば時にあらざるに帷衣までも給はること重きが上の
 恩惠なりと録せらる、此日の暮つ方聖護院道澄准后御參の時秀吉道澄に向ひて云ひけるは此行藏王の權現と鎮守の心に叶はざる故
 に雨の降散まざるかと道澄答へて云ふ山内古來鳥獸を食はず、今武人鳥獸を恣にして思むところなし、天霖れざる恐らくはこれに
 これよらんよ、秀吉即ち木下大膳を召し、いと嚴かに職内の禁を令し、さて斯くても尙雨散まらずは全山の堂社悉く焼却し、勿々下
 山すべきのみと戯れしに道澄色を失ひて退り出で、其夜は靈廟に閉られありけるか秀吉は彼が惶惑の態を見て殊に興かり、夜す

がら笑い樂しみけることなむ。

明くれば三月一日、辰の刻より空晴れて日影のごかなり、巳の刻より花の遊が催ふされしに、下はふる井の瀧より上は雲井の高
 根まで、咲き残る下枝も無くなりうむる木末もなし、知りぬ連日の雨は今の開花を促がせしものなることを、秀吉感興禁はず、先
 づ勝手前前に詣で、うれより登り登りて子守宮を經、金峰神社に至りて已む、此日秀吉以下人々思ひの立立にて或は山伏の姿
 をなせるあり或は巫祝の装ひせるものあり各々異様の装ひせる爲め打見には其誰なるを知るべからず、玉を懸れ黄金を鍔ばめ雲の
 通ひ路あごさめて天人再び降臨あるかと疑はる、馬には錦の覆ひを衣せ、犬には紅の網を曳く、恩土忽ち報土の妙化を寫せり、見
 物の諸人九年の蓄ひを思はず、老は百歳の齢を顧みずして尺寸も前に進んで見んことを思ひ、遊興限り無ふしての春日却りて短き
 を苦む其日の風流紙墨染め難し、實吉もこれを語らんやと記されたり、此時秀吉勝手子守等の神社へ金錢を献せしと云ふも更なり
 路すがら上下の茶屋どもにまで其分に賑は銀錢を地與せしにぞ、一味の雨萬物を潤はすが如しとて拜謝せぬものなかりことなむ、
 觀櫻終へて後秀吉は一千石、秀次は五百石の米を藏王堂に献す云々。

附記

三月二日は藏王堂の廣前に於て御能あり。三日吉野を出立ち高野に詣で歸阪の後新知一千石を吉野山に寄す、其左券の禮本今存す
るもの左の如し。

- | | | | |
|------------|----|----|---|
| 藏王領 | 和州 | 吉野 | 山 |
| 一、八百五十三石九斗 | 小 | 野 | 路 |
| 一、百五十九石三斗 | | | |
- 右今度新儀令寄附之訖此内五百石藏王造營領五百石は寺僧滿堂全令寺納勤行不可懈怠者也
 文祿四年九月十一日 秀吉印 吉野山金峰山寺寺僧中

花供養法會の由來

花供養法會は我吉野山に於ける年中行事の重なるもの一なり、熟々其濫觴を尋ねるに畏くも長岡の宮に在して天が下治らし給ひし桓武天皇、沈痾を患ひ給ひし砌り、巫醫萬法あらずしてを盡し奉りしかども、其効更になかりける折しも、吉野山寶塔院に高算上人きて行徳勝れし聖ある旨天聽に達し、さくく上りて御惱平癒の祈禱あるべきよし仰せ下されしかば、上人畏みて都に上り離みて加持し奉りしに、大徳の至誠佛神も感應ましけん、さしもの御惱忽ちに平癒あらせらる、至尊觀感の餘り上人に向はせ給ひ、何なりとも望ましきことあらば叶ひ得させん程に憚らず述べ申すべしと詔らせ給ふ、上人いと忝なく感涙に咽びつゝ、世を捨てし身の何の望みも候はず、唯吉野山は歴朝御祈願の名刹にして満山悉く櫻もて瘳めてあり、櫻はこれ藏王権現の神木と稱し、年毎に花神の供養を行へども今に至るまで費用の出處を得ず、翼くば海内の民どもより一畝一穂の蕪新を獻ぐることを許し賜へざりければ、至尊いよいよ觀感まし／＼直ちに勅許あらせ賜ひしとさなむ、これよりして令を諸國の裝束下(末寺)に傳へ、蕪新を徵することなせるが其法世の常の勸進の如くならず、唯門邊に立ちて聲高に「花供養法」と叫ぶのみ、さて此一畝一穂の蕪新全國を通じて果して幾百石に上りしや、今に於て其額を知るによしなしと雖も、當年佛法の盛んなる上は王公貴紳より下は庶民の末に至るまで、佛を崇信せざるはなく特に吉野山金峰山寺は十萬の裝束下百萬の信徒ありと傳へらる、以て其盛況の一斑を窺ふに足るべきか。

斯くて徵し得たる蕪新は供物及び撒餅の料にて餅に搗くならんが、これぞ名高き吉野の千本搗とて、いと大なる臼を圍みて櫻を搗ひ、オインラ、オインラの音頭勇ましく搗くにはあらで抱返すなり、此千本搗に加はらんとして遠きは二十里三十里の他國より、近きは二三里の在郷より我も／＼と集ひ來るもの其數を知らず、搗き終りて杵の先きに粘り著きし餅多ければ、其年の幸先よとて、成る／＼粘り著けんとする、下にてはまたさばせと争ふさまなか／＼面白し、昔は供物の料は穀屋坊にて搗き、撒餅の料は正頭屋にて搗きけるものぞ。

さて搗餅の事ども終りて三月十一日(現今は四月十一日)花供養の法要最とも莊嚴に行はる、今其次第を語らんに午後一時を合圖に一山の衆徒前後後鳥毛立並立箱の行衆今日を晴れと飾り立て藏王堂前なる御供所に參集し、以て學頭の入堂を待つ程に、餅の行列約五百人あまり正頭屋より來るなり、次に學頭は地下の侍ひを前驅に多くの侍者を隨へ爾曉たる俗樂の間に由來り、肅々として堂内に參入すれば、衆徒皆隨從じて參入し各々定めぬ路に著く、これより先き讀經に先ち、裝束の阿羅惡覺を拂ふの式を行ふ、其法一は斧を

揮ひ、一は炬を擡げ一は劍を擡げて内陣を三匝する也、此間堂内に於て天下第一等の法螺を吹き、天下第一等の法鼓を鳴らし、天下第一等の法響を打つ、其聲股々如何なる天響も退散すべく思はる、ちも／＼阿羅惡覺を拂ふとは吉野山獨特の作法にて、そのかみひの行者山上開拓の砌り使役に服せし死人ごものさまをば其儘に存せしもの覺ゆ、惡覺拂ひの式終へて讀經供養あり、徑一尺餘の銅盤に盛りし櫻の精花は恭々とし、花神に獻げられつ、讀經了へて餅撒の式あり其混雜、其然口にも筆にも盡し難し。

花供養法會は翌十二日も續いて行はる、其式法前日に異らず、昔時は此日阿兒の花供養あり、吉野の法會に列らんとして近邊の國々は云ふも更なり東は吾妻路、北は越路、西は四國中國の終端より集りつゞふを巧も幾萬と云ふ數を知らず、日頃は世に下げすまされて聖介も管ならぬ扱ひを甘んじつゝある珍客、此日ばかりは人類として其價値を認められ、最高門跡が自ら行ふ法要に參するなり、斯く定まれる慣例さて彼等も頗る鼻息あらく、一山の老職出で來らずは我等一同法義に參せずなきまきて、萬丈の氣短なか／＼に切り離きものありしとぞ。さしもの盛儀も今も漸く衰へ唯僅かに古の面影を偲ぶのみ。

昭和十五年三月十五日印刷
 昭和十四年三月二十日發行
 大正二年三月十日再版
 大正四年十月五日再版
 大正六年四月一日再版
 大正七年六月十五日再版
 大正九年三月十日再版



定價金四拾錢

發行兼著者 中岡清一
奈良縣吉野尋常高等小學校同窓會長

印刷者 濱田正夫
大阪市南區安堂寺橋通一丁目一番地

印刷所 濱田印刷所
大阪市南區安堂寺橋西詰南入

電話船場三三九〇番
三三九一番

發行所 奈良縣吉野郡吉野村字吉野山 吉野山同窓會

339
48e

終